

る事なり。吾人の筋肉骨格、神経及び感覺器の重要なる性質及び活動は、比較解剖學及び生理學に依りて直に吾人の理解する所なり。然るに高等植物の身體に於ける之に似たる現象を認識するは遙に困難にして、又高等動物體の細胞國に於ける無数の基本器官の關係は、一方に於て高等植物の身體の細胞共和國に於けるよりは遙に複雑なりと雖、他方に於ては遙に理解し易きものなり。又植物の系統史は、動物の系統史よりは遙に困難にして、植物の發生史は動物の發生史より其の系統の詳細を語るに遙に少し。是れ即ち生物發生學の根本法則が、植物學者に於ては動物學者に於ける程一般に認められざる所以なりとす。かの動物界の多くの群に對し、斯くも價值大なる化石材料を供給し、吾人が之に基きて動物の系統樹を多く、詳細に設定するを得たる化石學は、植物界の大多數の群に對して材料を供給すること甚だ少し。又他方に於て其の各箇の器官オレガタ子を有し、空間的に明瞭に區劃せられたる大なる植物細胞は、多くの問題に對し小なる動物細胞よりも遙に價值大なり。又高等植物の身體は、多くの生理學的實驗に對しても、高等なる動物に比して精密なる物理學的、化學的研究を行ひ得る

こと容易なり。然れども此の相反は、原生生物界に於ては大ならず、蓋し單細胞生物に於ては、動植物生命の區別は、大部分物質代謝の相反せるに存し、遂には全く消滅するものなればなり。されば大なる生物學の問題、殊に系統發生學上の問題に關し、公平にして明瞭なる判斷を下さんとせば、動物學及び植物學の研究を併せて考ふること必要なり。進化論の二大建設者ラマルク及びダーウィンは、共に植物學にも亦、動物學にも通じたりしが故に、有機生命並びに進化の祕密に徹することを得たりしなり。

新ラマルク説及び新ダーウィン説 最近進化論の完成に就いて動物學者及び植物學者が採りたる最も異なる方向中、二箇の相反せる學派として屢、新ラマルク説及び新ダーウィン説を區別す。此の對立は、人が之を以て變形論に對し「淘汰説を採るか將た之を否定するか、其の一を選ぶべし」と言ふことなりと解釋するに於て始めて意義を生ず。蓋し眞のダーウィン説を古きラマルク説と分つ唯一の綱領は、生存競争並びに之に基く淘汰説なればなり。之に反し、此の相反を以て漸進化遺傳を認定するか否定することなりとするは、全然許すべからざる

ものなり。ダーウィンが「後天形質の遺傳」の高級意義殊に官能適應の遺傳すべきを固く確信したるは、ラマルク及び余自身と同じ。唯、ダーウィンはラマルクよりも狭き範圍に於ける活動を之に歸したるのみ。之に反して、ウァイスマンは、漸進的遺傳を全然否定し、萬事を淘汰即ち「自然淘汰の全能」に歸せんとす。若し此のウァイスマンの見解及び之に基く其の生殖質説にして眞に正當なりとせば、進化説の全然新しき而して彼が確信に據れば、最も結果大なる方向を建設したる名言は、彼のみを歸すべきなり。然れども此のウァイスマン説を特に英國にて稱するが如く、新ダーウィン説と稱するは、全然誤謬にして、又之と等しく、ネーグリ、ドップリ、ス其の他、現代の他の生物學者にして、淘汰を否定する者を新ラマルク派と稱するは不當なり。

系統史の任務 若し進化論にして今日總ての有力なる生物學者が異口同音に假定する如く正當なりとせば、進化論は形態學に對して各箇の生命の形態の起原を略、説明するの任務を課するものなり。形態學は各生物の今日存在する體制を其の過去よりして説明し、其の祖先傳來の形態列に於て、之が變形の原因

を認めんと試みざるべからず。此の困難なる問題は、余自身が、拙著「發生學汎論」

（一般形態學第一卷）に於て發生史、即ち系統發生學を獨立せる歴史的自然科学として建設する事に依りて初めたるものなり。同時に余は、第二の同等なる部分として、發生學即ち個體發生學を設けたるが、こは當時まで單に「發生學」として世に行はれたるものなり。余は此の概念の下に個體發生史の全部、即ち胎生學と變態學とを總稱す。個體發生學は、そが直接觀察し得べき現象の箇々の記述を事とする點に於て、純粹なる記述科學たるの利益殊に確實なるを有す。又胎生學に於て胚葉發達の作用、並びに變態學に於て變態の過程を記述するに於ても同じ。之より遙に困難なるは、系統發生學の問題なり、蓋しこは已に長く消滅したる過程を部分的に知らるゝ源よりして解釋せんとするものにして、且、是等の基礎知識を大なる注意を以て比較利用すべきものなればなり。

統系史の基礎知識 系統發生學の最も貴重なる基礎知識として先づ擧ぐべきものは、化石學、比較解剖學、及び個體發生學なる三箇の價値大なる源なり。化石學は、吾人に對して、其の化石に於て吾人が直接「取り扱ひ得べき材料」を供給し、

是等は歴史的の連續に於て、又、長き有機的地球歴史の經過に於て、種が時を追うて相連續して生じ來れることを證明するものなり。唯悲しむべきは、此の化石の吾人に残れるものは、單に最少部分にして、且、其の保存も極めて不完全なることなり。是を以て、此の『積極的材料』の間に殘存する『多數の缺陷』即ち『消極的溝渠』は、他の二箇の源、即ち個體發生學と比較解剖學とに依りて充たされざるべからず。余は之に對して、拙著『人類發生學』なる二卷の書に於て詳細なる證明を與へんと試みたり(一九〇三年、第五版)。而して余は又此の系統發生的基礎知識を余が『自然造化史』の第十六講に於て説明したるを以て、此處には唯、單に此等三箇の互に相補足する源を平等に利用し、批判的に評價して始めて系統發生學の問題を満足に解決し得べきを切言するを以て足れりとす。勿論、之が爲めには、此等三箇の領域に於て根本的の知識を要するものなれども、此等の領域が屢、相總合せられざるは、悲しむべき事なり。胎生學者が概ね化石學を閉却すること猶、化石學者が概ね胎生學を閉却するが如し、而して形態學中廣汎なる知識と批判的判斷とを最も多く要する、最も困難の部分たる比較解剖學なる分科は、化石學者

並びに胎生學者の逃避する所なり。此等三箇の系統發生學の主源の外、生物學の他の分科も亦、系統發生學の建設に貴重なる基礎知識を供給す。即ちコロロギヤ(Chorologie)フコロギヤ(Oekologie)並びに生理學、生物化學は是なり。

系統發生學と地質學 系統發生學的研究は、過去三十年間に於て甚だしく擴張し、興味ある手掛りは豊富に現れたりと雖、尙、本研究は常に多くの自然研究者に依りて大に不確實なりと目せらるゝものなり。加之、多くの研究者は尙、之が科學的に正當なることを疑ひ、そは單に基礎を有せざる空中樓閣的臆説を供するものなりと主張す。殊にそは實驗を以て唯一正確なる研究方法なりとする多くの生理學者並びに發生學の記述を以て、唯一正確なる研究方法とする多くの胎生學者に於て然りとす。此の懷疑的なる攻撃に對し、吾人は地質學の歴史並びに意義を想起するなり。今日最早、何人も此の『地球の歴史』の高き意義と多方面なる應用とを攻撃する者なし、而も此の歴史的過程を直接觀察するは、大部分不可能なるにあらずや。今日最早、自然研究者にして、かの中生代の互に層を爲して山嶽を形成する地層、即ち三疊、侏羅、及び白堊三層が漸次凝固したる海中の

泥土、石灰、砂岩、陶土より生じたることを疑ふ者なしと雖、尙何人もそが堆積しつのある現場を見ざるなり。之と等しく地層中に化石となりて存する魚類及び爬蟲類の多數の化石せる骨骸が、不可解なる『自然の遊戯』にあらずして地球の歴史が吾人の後に残せし長き期間中、かの海に棲息し、而して今や絶滅せる魚類及び爬蟲類の殘留物たることを疑ふ者なし。而して今や比較解剖學が吾人に此の『親縁ある』形態の發生學的關係を證明し、系統發生學は個體發生學に支へられて、互に關係を有する形態群の系統樹を建設することを得たりとせば、此の歴史的臆説は確實にして、正當なること地質學上の認定せられたる臆説と異なる所なかるべし。唯、後者は前者に比して、遂に簡單に、從つて容易に建設せらるゝに過ぎず。系統發生學及び地質學は、其の事物の性質上、眞に歴史的自然科學たるべきものなり。

系統發生學的臆説 總ての歴史的科學に於ける如く、系統發生學及び地質學に於ても、實驗し得べき研究の源は、常に不完全なるを以て、臆説は缺くべからざるものなり。臆説は、屢、薄弱にして不十分なることあり、又屢、速に有效にして良

好なるものが之に代ることあれども、其の爲めに價値を滅却することなし。蓋し薄弱なる臆説も、全然、之なきには常に優るものなればなり。されば吾人にかの實驗的並びに記述的自然科學の『嚴密なる』代表者が吾人の系統發生學的方法に關して、懐く理由なき臆説恐怖を顧慮するの必要なし。此の臆説恐怖は、一部分、他の知識領域を知らざるが爲め、又一部分、綜合的思考能力乏しく因果的要求の薄弱なるが爲めなり。茲に多くの自然研究者が如何に自己自身を誤解せるかは、彼等が化學を以て『純正なる』科學として尊ぶを見れば明らかなり。蓋し如何なる化學者と雖、其の日々取り扱ふ化合物の原子及び分子を目撃したる者なく、又現代の構造化學の全部の基礎を爲す假説たるかの複雑なる分子配置の關係を目撃したる者あらざるなり。總て是等の臆説は、理性の決論に基くものにして、直接の觀察に依るものにあらず。

個體發生の機制 個體發生史が系統發生史に對して有する密接なる因果的關係は、余が『一般形態學』の第五篇に此の生物學の兩分科を價値等しき科學として併列せし以來、絶えず切言したる所なり。又當時に於て（一八六六年）已に此の

兩學科の機械的特性を特に顯著なりとなし、之が形態的現象を生理學的に説明せんと努力したり。當時に至るまで、人は「發生學」を以て單に胎生學なりとし、純粹に記述的科學なりと認めたり。カール・エルンスト・ペーアは一八二八年、其の古典的なる「動物の發生史」を著し、本科學に始めて確實なる基礎を與へたるが、彼は個體發生のあらゆる現象は生長の法則に歸し得べきものなりといふ確信に達したり。唯此の生長の特殊なる方向即ち「目的に達せんとする努力」たる形態形成の眞の原因は、全く彼の知らざる所なりき。「人類發生教科書」(一八五九年)を著し、發生學を以て初めて細胞學說の見地よりして、一目瞭然たらしめたる有名なウィルツブルヒの解剖學者アルベルト・ゲルリケルは、同書の第四版(一八八四年)に於てすら「有機體の發生法則は尙、全く未知に屬す」との意見を持したり。一般に行はるゝ此の見解に對して、余は已に一八六六年に於て、チャールズ・ダーウィンが其の進化論の改良に依り單に種の生成なる系統學上の謎を解きたるのみならず、之に依りて同時に吾人に對し、當時まで閉鎖せられたる胎生學の門戸を開き、個體發生上の「生命の不可思議」に就いても因果的の理解を得べき鍵を與へ

たることを證明せんと試みたり。此の確信は、余が「一般形態學」の第二十章に四十四ヶ條の個體發生學的定理として表式したる所なるが、此處には唯、次の三條を擧ぐるに止めんとす。「一、有機體の發生は生理的過程にして、又、生理的過程として機械的に作用する原因即ち物理的化學的運動に基くものなり。四〇、個體發生即ち有機的個體の發生は、系統發生即ち此の個體が屬する根幹(Phylon)の發生に依りて決定せらるゝなり。四一、個體發生は系統發生の急速にして短縮せられたる反復レカピトワライオンにして、遺傳並びに適應なる生殖學的官能に依りて決定せらるゝなり。」是等並びに他の個體及び系統的發生の因果的關係の定理(同所第三〇〇頁)に余が生物發生學的根本法則の要點は含まるゝなり。同時に其の中に十分明らかに個體發生の理學的過程を以て系統發生の過程と同様にプラズマの純粹なる機制批判的哲學の意義に於てに歸すべきものなることを言明せり。

生物發生學的根本法則 余が一八六六年「一般形態學」の第五篇に設定し、一八六八年「自然造化史」の第十講に於て簡単に説明したる(一九〇二年第十版第十四講に於て更に詳細に論じたり)此の廣汎なる「有機體發生の根本法則」は、後に余が

二箇の異なる道程に依りて確定せんと試みたるものなり。第一余は、余の「ガストレア説の研究」に於てあらゆる有組織動物は、最下等なる海綿類及びポリプより最高等なる節肢動物及び脊椎動物に至るまで、多細胞有機體は同一なる本來の胚形ガストレアより發達せるものなる事、並びに此の發達は之に相當する根形ガストレア (Gastron) の遺傳に依りて決定せらるゝ個體發生的反復なる事を證明したり。第二に余は余が「人類發生學」二八七四年に於て、此の「反復説」を例へば吾人自身が人體に於て詳細に證明せんと試み、殊に全身に於ても各箇の器官系統に於ても、箇々の完全なる複雑せる過程を吾人が動物の祖先の系統史に對する因果的關係に依りて説明せんと努めたり。此の一元的「人類の發生史」の最近版(第五版)に於て、余はかの複雑なる關係を多數の挿繪三十箇の圖版並びに五百箇の挿圖に依つて説明せんとし、同時に、六十箇の發生學的表を加へて、教育ある素人をして此の關係に近づかしめんことを試みたり。余は同書を讀者に推薦し、此處には、余が生物發生學的根本法則を深く説明することなかるべし。是れ最近余が門弟の一人ドクトル・ハインリッヒ・シニット(在イェーナ)は、極めて明瞭に記述せられた

る一小冊子に於て本法則の生物學的意義及び其の前歴史並びに現狀を詳に論じたればなり。^{*}唯、三十年以來「生物發生學的根本法則」の全部、若しくは半部の認識に關し、又其の實驗的基礎、哲學的應用の範圍に關して爲されたる甚だしき爭論に關する二三言の説明を此處に掲ぐることを得ん。

^{*}「通俗叢書」第五篇所載「ヘッケルの生物發生學的根本法則と其の駁論」(一九〇二年オ

ーデンキルヒエン、ウィルヘルム・プライテンバッツ出版)。

生物發生學的根本法則の完全に行はるべき事 余が余の「反復説」の表式に際して好んで選擇したる「根本法則」なる稱呼は、已にそれが全然普遍的に行はるべきことを含蓄す。各有機體は、單細胞の原生生物より陰花植物並びに腔腸類に至るまで又、是等よりして顯花植物並びに脊椎動物に至るまで、一定の遺傳の法則に據り其の個體發生の法則に従つて、彼が系統發生史の一部を繰り返すなり。^{レイトワライオン}已に反復なる概念は、それが常に遺傳及び適應の法則に依りて決定せらるゝ本來の系統發生的發生行程の短縮せられたる部分的の反復なることを示す。遺傳は、一定の發生關係の反復を起し、之に反して適應は反復が適應の外界の作用に

依り變化せらるゝこと、即ち其の短縮、障害若しくは「變形」を生ぜしむ。是を以て余は初めより余が生物發生學的根本法則は二箇の部分より成り、一部は積極的の選擇發生的部分にして、他は制限性積極的の障礙發生的部分なることを力説せり。パリングゲネシス即ち「拔萃發生」は、本來の系統史の一部分を吾人に語り、カインゲネシス即ち「障礙發生」は、元來の發生行程が後に至りて生じたる變化に依り、其の像の變形又は障害せられたる有様を示す。此の區別は根本的に重要にして、多數の反對者の幾多の誤解に對し、如何に切言するも猶足らざるを覺ゆ。此の事は、「根本法則」の一部分行はるゝことを承認する人々(ブラーテ、シュタインマンの如く)にも亦全然之を放棄する人々(カイベル及びヘンゼンの如く)にも等しく看過せられたり。後者の中、胎生學者カイベルは注意すべき者にして、彼は自身其の極めて周到なる記述胎生學的業蹟に依り、生物發生學的根本法則に對して大に力を盡したり。然れども彼は本法則を理解すること極めて尠く、又之に就いて考ふる所極めて少きを以て、彼は遂に拔萃發生と障礙發生との重要な區別を理解する能はざりしなり。

殊に、最も尊敬すべき胎生學者の一人にして、三十年以前生物發生學的根本法則を支持する上に爲したる伯林のオスカール・ヘルトウィヒが反對者の側に入りたるは悲しむべき事なりとす。彼の所謂根本法則の「訂正」即ち變更なるものは、カイベルが正當に言ひし如く、全然降伏に等しきものなり。此の主義變更の原因は、ハインリッヒ・シュミットが生物發生學の根本法則に關する論文に於て、一部分説明したる所なり(一九〇二年發行、第八四頁)。こは伯林のオスカール・ヘルトウィヒが經過したる心理學的變態と關係せるものにして、彼が一九〇〇年、アーヒエンに於ける自然科學者の集會に於て「第十九世紀に於ける生物學の發達」に關して試みたる演説に於て、彼は事實上、活力説の二元的原理を代表せり(尤も彼は此の主義を以て之に反對する機制論が自然の化學物理學の見解と同様に不當なるもの」と説明したり)。又オスカール・ヘルトウィヒが最近ダイウイン説の無價値なること、並びに系統發生學的臆説の信用すべからざることに関し、發表したる見解は、彼が二十五年前、イェーナに於て懷きたる確信と、ミュンヘンに於ける令弟リヒャルト・ヘルトウィヒが、其の優秀なる動物學教科書に於て今日尙徹底的に代表する確信とに全

然反對するものなり。

テクトゲネ個體發生 余が一八六六年に設定し、之を生物發生學の根本法則に表示したる個體發生の機制と根本的に反對して、其の後、胎生學の幾多の他の方向は發達せり。是等は『發生機制學』なる共同の名目の下に、あらゆる目的と道程とを追ひたるが、此の中、最も賞讃せられたるは、三十年以前ライブツィの解剖學者ウールヘルム・ヒスが假機制化學^{フアイド・メカニク}說にして、彼は脊椎動物の胚の甚だ精密なる記述及び自然を欺く模寫に依りて、發生學に大貢獻を爲したれども、比較形態學に就いては何等知る所なく、従つて有機的發生の本性に關しては最も奇怪なる一般的見解に到達したり。彼が『脊椎動物身體の發生に關する研究』(一八六八年)及び其の後の多くの業績に於て、ヒスは複雑なる個體發生上の事實を以て胚の原基^{ゾンゲ}の彈力彎曲、褶曲の形成に因るものとして、直接簡單に理學的に説明し得べしとなし、吾人の系統發生的方法を明らかに排斥したり。彼は吾人の此の方法を以て、『二箇の遠き迂路なり』とし、個體發生學的事實は生理學的發生の原則の直接の結果として之が説明に係る方法を全く要せざるものなり』と言へり。實際、

此のヒスの假機制即ちテクトゲネ說に據れば、母たる自然は、余が『人類發生學』の第三講に證明したる如く、熟練なる裁縫手の如きものにして、吾人は之を嘲笑的に裁縫手說と稱す。然れども本説は複雑なる胚發生の現象を純粹に機械的に説明するの豫想を供するが故に、多くの胎生學者を眩惑したり。ヒスの此の奇妙なる裁縫手說(バラブラスト說、封筒說、ヘルレンラッペン說等)は、初め甚だしく賞讃せられ、後直に放棄せられたるが、最近に至りて、現代の『發生機制學』の多くの方向に各種の影響を有するに至りたり、人類發生學第五版第五頁參照。

實驗發生學 現代實驗生理學が物理的並びに化學的實驗を廣く應用して得たる偉大なる結果に依りて、同様の精密なる方法を發生學の領域に應用して、等しく豊富なる結果を得べき望を生じたり。されど此處に存する歴史的現象の非常に複雑にして且、歴史的現象は概ね『精密に』解明すること能はざるが故に、之を此處に應用するは、一定の範圍内に於てのみ可能なりとす。こは發生史の兩方面、即ち個體發生學にも系統發生學の場合に於ても同様にして、種の起原に關する多くの實驗は、已に述べたる如く其の價值少きものなり。こは一般に胎生

學的實驗に關しても然りとす。されど最近殊に個體發生の最初の時期に於ける最近の巧妙なる實驗に依り、各種の興味ある結果が得られ、殊に胚發生の最も早期に於ける胚の生理學及び病理學に於て之を見る。此の方面に於て最も熱心なる代表者ウイヘルム・ルーが、一八九五年以來出版する『發生機制學雜誌』は、此の貴重なる研究の外、種々なる個體發生學的業績の雜多を含み、此等は一部分生物發生學的根本法則に基けるものなれども、他は之を閑却し、或は之に反對するものなり。(人類發生學第五版第六四頁參照)。

一元論と生物發生學 今日まで生物學のあらゆる領域に於て、一元的説明に對し最も困難なる問題として、又之と共に二元的活力説の最も大なる支持として一方には心理學あり、他方には生物の發生あり、然れども兩領域は共に生物發生學的根本法則に依りて一元論にも、將た器械的因果的説明にも撞着せざるなり、蓋し之に依りて個體發生的、系統發生的説明の間に設定せられたる密接の相互關係並びに遺傳及び適應の法則に基く相互作用は、其の相對せる説明を可能ならしむればなり。此の點に於て、余は已に三十年以前、余がガストレア説の最

初の研究に於て、次の根本法則を總ての生物發生的諸説の第一に置きたり。即ち『系統發生は、個體發生の機械的原因なり』といふことは是なり。此の一句を以て吾人が有機體の發生に對する根本的一元的見解は明らかに言明せられたるものにして、『生物發生學に於て驚くべき現象を嘆稱するを以て満足せず、其の意義を理解せんと欲する各研究者は、將來此の定理に味方するか或は反對するか兩者其の一に決定せざるべからず。此の一句は、同時に舊式の目的論的、二元論的形態學と新しき機械的一元的形態學とを分つ越え難き溝渠を示すものなり。若し遺傳及び適應なる生理學的官能にして、有機體の形態形成の唯一原因なること證明せられたりとせば、同時に目的論の如何なる種類も、亦二元的形而上學的觀察方法の如何なる種類も、生物發生學の領域より退けられたるなり。即ち之を以て根本主義の明らかなる相異は、明瞭に表さるゝものなりとす。——即ち個體發生學と系統發生學との間には、直接にして因果的の關係存するや否や、將た個體發生學は系統發生學の集約せられたる拔萃なりや否やは是なり。此の兩假定の間には、第三説の存するを許さずして發生説及び進化説エビジュシヨンスか或は展開説デフオルマツトイオン及

び創造ならざるべからず。余は此の文を茲に繰り返すに方りて尙特に此の見解に従へば、吾人が『機械的生物發生説』は、一元的哲學の最も有力なる支持たるを切言するものなり。

第十七章 生命の價值

生命の目的 自然と文化 自然民族 野蠻民族 文明民族 文化民族
生命の個人的並びに社會的價值

『比較心理學は其の全範圍に於て精神的なるもの、自然的創造並びに發生史を爲す。其の最も重要な部分は自然民族の心理學にして、若し人類精神の謎にして解かるべくんば、則ち此處に於て解かるべし。小兒の心理學は、之に對して第二次的のものなり。蓋しこは系統發生學に基礎を有する所を短く繰返すに過ぎざればなり。自然民族の心理學に依りて、始めて認識論、美學及び倫理、宗教、哲學の主要にして根本的なる問題は解決せらるべし。而して『生れ付きなるか發達したるものなるかの常用文句も亦、決定すべし。而して事實に基き科學的に設定せられたる答解は、之に對し、『發生して而して遺傳せられたり』と言ふにあるべきは疑を容れず。』

フリッツ・シュルツ(一九〇〇年)

生命の交替 生命の目的 生命の進歩 歴史的目的 歴史の波 綱及び人類の

生命の目的 自然民族の心理學 原人 野蠻人 文明人 文化人 此等四箇の階級の各に於ける三箇(下等、中等、高等)の發達階級 營養、生殖、運動、感覺、精神生活なる五箇の領域に於ける文化生活の價值 人類生命の尊ぶべき價值

今日吾人の生命の價值は、進化論の確實なる基礎の上に立ちて、五十年前とは全く異なる觀を呈するに至れり。吾人は人間を以て自然物として之を觀察するに慣れ、而も吾人が知れる自然物中、最も高等に發達せるものなりと做す。全宇宙の發展の徑路を支配すると同一なる「永久の尊敬すべき法則」は、吾人自身が生命をも支配するなり。吾人の一元論は、吾人をして宇宙なるものは、眞に其の名に負かず。吾人が之を以て神と稱し、自然と稱するも、それは兎に角、あらゆるものを總括する統一せる全體なること確信せしむ。吾人の一元的人類學は、人間は單に此の宇宙全體の微小なる部分に過ぎずして、第三紀の後期に哺乳類の一分枝より發達したる有盤類の一種に過ぎざることを認めしめたり。是を以て、吾人が吾人自身の生命の價值を評量せんとするに方り、先づ一般に有機生命の價值を比較評論する所あらんとす。

生命の交替 我が地球上に於ける、有機生命の歴史に公平なる一般的瞥見を與ふる時、吾人は第一有機生命は不斷の交替を受けつゝあることを知る。時々刻々幾百萬の動植物は死し、之に代りて幾百萬は新しく生ず。各個體は、其の有限なる生活時期を有し、一日の生命を樂しむ蠅、及び數時間にして死する滴蟲類の如きより、オロターヴァの龍血樹、ウヰリングトニア其他、數千年の齡に達する巨大なる樹木の如きあり。又、總ての同一なる即ち相似たる個體を包括する種なるものも、等しく經過し去るべく、多數の動植物の種類を包括する目及び綱に於ても亦、然り。多くの種類は、地球の有機的歴史に於て唯一時期に限りて存在し、變化せずして長時期の間を經過するものは、僅かの種若しくは屬に止まり、一としてあらゆる時期に亘りて生活するものなし。化石學の事實に依つて支持せらるゝ種屬の歴史は、疑もなく各特別の生命の形態は、單に有機的歴史を包括する幾萬年中、僅かばかりの期間、生活するものなることを吾人に示す。

生命の目的 各生活物は、それ自身目的なり、これは總て公平なる思想家の一致する所にして、彼等は目的論的にエンテレヒヤ若しくは主宰者を生命機制の調

節者と假定するも、亦機械的に各特殊の生物個體の生成を淘汰説モビダネシス即ち發生説に依りて説明せんとするも、それは問ふ所にあらず。動植物を以て人類の利益の爲めに形成せられたりとし、一般に有機物の相互の關係を以て「巧妙なる創造」に依りて支配せらるゝとなす人類中心の見解は、今日科學的社會に於て之を信ずる者なし。之と等しく、各有機的個體即ち各箇の生物は、「自己の爲めに存在し」第一に「自己の保存に努むる」ことは、如何なる種に於ても同様なり。又、其の存在及び其の目的は、時間上限られたるものにして一時的なり。網及び部門の漸次の發達は、緩漫なれども、而も絶えず新しき種の形成を生ずるものとす。各特殊の生物、即ち各個體並びに各種は、生物學の間曲にして、互に生命の交替に於て移り行く現象形態に過ぎず。人類は、此の點に於て他の脊椎動物より何等除外せられざるなり。「變化に比して一層恒久なるものなし」と。古き誠の諺は斯く語りぬ。

生命の進化 動物界に於ても植物界に於ても、歴史的順序、即ち配列は、其の體制の不斷の緩漫なる進歩と相關係す。こは化石學が直接吾人に教ふる所にして、吾人は之を目撃することを得るなり。而して其の「創造の記念牌」なる化石は、

疑もなく此の生物發生的進化の攻撃すべからざる證明なり。余は之を余が「自然造化史」に於て一目瞭然表示し、同時に種の漸進的完成は、其の漸増的多種多様なることゝ等しく、淘汰の必然的結果なりとして、機械的に説明し得べきことを示せり。之には設計通りに働く造物者も、又超絶的目的追求性をも要せず。之に對する詳細にして、嚴密に科學的なる證明は、余が「系統的系統發生學」(一八九四年出版第三卷)に於て與へんと試みたる所なり。唯、此處には有組織植物並びに脊椎動物の系統史が、吾人に供する二箇の大なる例を引用せんとす。後世植物中、羊齒類は、太古代に於て、裸子植物は、中古代に於て、被子植物は、近古代に於て榮えたる主なる群なり。脊椎動物にありては、志留利亞紀に於ては、單に魚を生ぜるのみにして、泥盆紀に於て肺魚類を生じ、石炭紀に於ては、兩棲類、二疊紀に於ては、爬蟲類を生じ、三疊紀に於て第一の哺乳類を生じたるなり。

歴史的目的 化石學の吾人に示す形態の漸進的變化に關し、上に掲げたる如き事實よりして頗る誤りたる目的論的結論は導かれたり。世人は各部門の最新にして最高等に發達せる形態を其の豫想せられたる目的なりとし、其等の不

完全なる先驅者即ち祖先を以て、此の目的に達するの「豫備階段」なりと做す。これは多くの歴史家が民族の歴史(所謂世界歴史)に於て爲す所と相似たり。若し一箇特殊なる人類の種族、國民或は國家が、其の自然の特色、又は有利なる發達要約の下に、文化生活上顯著なる位置に達するときは、人は之を以て「特選せられたる民族」なりとし、其の特に不完全なる發達状態を以て、豫想せられ目的を追求する準備時期なりと做す。然れどもこれは必然別々に生ずるものにして、一方に於ては内部の(遺傳に依りて與へらる)基礎、他方に於ては外部に適應に依りて惹起せらるゝ生存の關係に依りて定めらるゝものなりとす。一定の目的に對する意識ある運命の如きは、吾人之を神學的豫定説としても、將た汎神論的終局態としても認むること能はず。寧ろ其の代りに心理學的、機制的一元論即ち萬物有生論の意味に於ける、簡單なる機械的因果律を置くべきなり。

歴史的の波 動植物の系統史は、人類の文明史に於けると同様、大體に於て向上的階段を現し、下級なるものより高級に進み行くものなれども、各箇の點に於ては、多くの動搖を示す。此の「歴史的波」は、全く不規則にして、退向時の機に於て

は屢波の谷の長く續くことありて、次に急に高き波の山に躍進す。古き絶滅したる群の後には、體制の遙に完全にして、急速に向上する若き群現る。斯くて今日の羊齒類は、かの泥盆紀及び石炭紀に於て、太古代の森の著しき部を爲したる、偉大にして形態に富みたる羊齒類の微弱なる殘存物にして、彼等は第二紀に於て裸子なるエビゴーン(蘇鐵類及び松柏植物)に依りて追ひ拂はれ、後者は又、第三紀に於て被子の有花植物に依りて退けられたるなり。同様にして陸棲の兩棲類中、今日の蜥蜴、鱉、魚、龜、鼈は、第二紀に於て榮えたる雄大なる兩棲類動物即ち巨大なるデノザウルス、プレロザウルス、イクテオザウルス、プレジオザウルスの微弱なる殘りを示すものなり。第二紀に於て彼等に代りて、比較的小さき、優勢なる哺乳動物を生じたり。民族史に於ては、基督教の中世史は古典的古代と現代文明との兩箇の光輝ある高みの間の低き暗黒なる波の谷を爲すなり。

綱の生命の價值 已に此の僅かなる所説よりして生物の各種の綱及び目は、其の相互を比較すときは、種々なる價值を有すること明らかなり。其の内部の目的、即ち自己の保有に關しては、勿論總ての有機體は同等の權利を有し、同價な

れども他の生物並びに大なる自然全體に對しては、甚だしく異なる價值を有す。單に大なる動物は、其の特殊の利益、即ち力及び身體の優れたる事に於て、長き間勢力を有し得るのみならず、或は其の與ふる害及び有害なる毒作用(細菌、菌、寄生生物等)に依りて勢力を得るものあり、民族史に於ても各民族並びに國民の價值は甚だしく不同なり。かの一小希臘國は、已に二千年以前に於て、其の文化の甚だしく發達せるに際し、獨り良く全歐洲の精神生活を支配せり。之に反して亞米利加に於ける多數のインディアンは、秘露及び中央亞米利加と二三の場所に於て、一時偏頗なる發達を爲したるに止まり、全體に於ては高等なる文化生活に對し何等の交渉もあらざりき。

人種の生命の價值 高等及び下等なる民族の間には、其の精神生活と文化の狀態とに、著るしき區別あること一般に認めらるゝに拘らず、此等は概ね甚だしく蔑視せられ、從つて彼等の種々なる生命の價值は、誤りて評價せらる。人類をして動物並びに已に最も近き哺乳類を高く凌駕せしめ、其の生命の價值を無限に高むる所以は、文化並びに文化を生ぜしむる理性の高等なる發達にあり。然

れどもこは大部分、高等なる民族の所有物にして、下等なる民族にありては、不完全なるか或は全く發達するものにあらず。かの自然人(ウツダ、濠洲人)は心理的關係に於ては、高等に發達せる歐洲人よりも寧ろ猿、犬等の哺乳動物に近し。從つて彼等個人の生命の價值も亦、全く判斷を異にせざるべからず。熱帯に於て莫大なる植民地を有し、數百年來自然民族と接觸せる歐羅巴國民の之に關する見解は甚だしく實際的にして、今日獨逸に行はるゝ觀念とは大に異なれり。今日吾人の學校の知識に依りて鐵則となり、又形而上學者が其の理想人の見本となせる理想的見解は、現實の事實とは甚だしく照應せず。此の點よりして、吾人の理想哲學の多くの誤謬並びに吾人が始めて最近に得たる多くの獨逸植民地に生じたる實際上の誤謬を説明すべきなり。こは若し吾人が自然民族の下等なる精神生活に就いて、根本知識を有したらんには避け得べかりしものなり(コピノ及びラボツタ第四四四頁參照)。

自然民族の心理學 精神學即ち心理學が數十年以來有したる重大なる誤謬は、大部分比較的並びに系統發生的の方法を蔑如し、自己省察即ち内觀的方法を

偏頗に使用したるにあり、而して他の部分は形而上學者が概ね高等に發達せし自己の精神、即ち科學的に教育せられたる文化國の精神の活動を其の研究の出發點として選び、之を以て一般に人類精神の代表者なりとし、之に従つて人類の精神の範式を構成したるにあり。文化人の思考力ある精神と野蠻なる自然人の思想なき動物的精神との間には大なる徑庭あり、其の相違は、自然人と犬の精神との相違よりも大なりとす。カントにして、若し自然民族の劣等なる精神を詳細に且、比較的に研究し、之に依りて文化人の精神を系統發生的に導き出だしたらんには、彼は、其の『批判哲學』に於て、多くの誤謬を避け、多くの重大なる獨斷例へば精神の不滅無上命法を設定せざりしなるべし。

此の比較の重大なる意義は、最近に至り始めてラボック、ロマネス其の他に依りて正當に認められたり。フリッツ・シュルツェ(在ドレスデン)は、一九〇〇年其の興味津津たる『自然民族の心理學』に於て、自然人の『智能的、美學的、倫理的、及び宗教的關係に於ける進化心理學の特性』を示さんと試みたり。之に依りて彼は即ち『人類の觀念、欲望及び信仰の自然的發生史』を與へたるなり。此の重要な著作の

第一卷に於ては自然人の思考、第二卷に於ては自然人の欲望を論じ、第三卷に於ては其の宗教的宇宙觀、即ち『宗教の自然的發達史』(諸物崇拜、アニミスム、天體の崇拜)を論じたり。第二卷の附録に於て、フリッツ・シュルツェは、進化論的道德て困難なる問題を論じ、此の際、アレキサンダー・スーザの『道徳本能の起原及び生長に就いて』(倫敦—一八九八年出版)なる價值ある大冊に據りたり。スーザは、イラントは、人類を其の精神發達(民族の相互の親縁に依るにあらず)の各種の文明状態並びに階級に依りて、之を四箇の大族に分ちたり。(一)原人(自然民族)(二)野蠻人(半原人)(三)文明民族(四)文化民族是なり。スーザは、イラントの此の分類は、單に精神發達の各種の階級に對する瞥見を甚だしく容易ならしむるのみならず、其の生命の價值なる問題に對して、特に、重要なが故に、此の四箇の民族の特徴の重要な點を左に簡單に掲ぐべし。

一 自然民族即ち原人 彼等の食物は、野生の自然物より成る(植物の實及び根、あらゆる種類の野生動物従つて多くは獵師又は漁夫にして、耕作及び牧畜は未だ知られず。彼等は箇々の家族に分立し、若しくは小群を爲して散在し、未だ

固着せる住所を有せず。最下等にして最も古き原人は、其の體格及び生活方法は彼等が元來發したる類人猿類に甚だ近し。此の綱の三箇の目として、中等、中等及び高等の原人を區別すべし。

一(イ) 下等原人 下等原人は猿に最も近く、身長四呎乃至四呎二分の一(稀に四呎四分の三の)ピグメーン (Pygmies) にして、女子は屢三呎乃至三呎半に過ぎざることあり。全身軟毛を以て被はれ、鼻平にして皮膚の色、黒色或は暗褐色、腹は突出し、紡椎骨^{Spinous}細く短し。住所なく森林若しくは凹地に住み、一部分樹上に住居す。十人乃至四十人より成る小家族を爲して徘徊し、衣服を着けず、裸體にして時に唯、最も原始的なる衣服を纏ふ。今日の下等種屬中、之に屬するものは、錫蘭のウヰダ、馬來半島のセマング、比律賓のネグリト、アンダーマンの住民、マダガスカル^{Madagascar}のキモス、ギニアのアカス、及び南亞弗利加のブッシュマン等なり。此の直接類人猿類に近き最古のネグロ式の侏儒の各地に残留せる者の今日、尙、ボルネオ、スマトラ、セレベス、スンダ諸島の森林に住居す。

此の下等原人の生命の價值は、類人猿類と等しきか、若しくは之より進むこと

僅かに過ぎず。彼等を其の故郷に於て精密に觀察し、其の身體の構造並びに精神の發達を精確に研究したる最近の旅行者等は、悉く此の判斷に一致す。世人は宜しく兩サラジンが錫蘭のウヰダに關する大なる著作に於て與へたる詳密なる記述を比較すべし(余が印度の旅行通信第四版第三五三頁に簡單なる拔萃あり)。彼等が唯一の興味は、營養と生殖とにありて、而も是れ吾人が類人猿類に見出だすと同一なる形態なり(余が人類發生學第十五章及び第二十三章參照)。恐らく吾人自身の祖先も一萬年、若しくはそれ以上の昔に於ては、同様の性質を有したりしなるべし。ブライストセーン(第三紀の最上層に於ける人類の化石の殘留物に基き、ユリウス・コールマンは、之に似たる侏儒民族(平均四呎半の身長を有す)が、歐羅巴の主なる住民たりしなるべしと言へり。

一(ロ) 中等原人 下等なる自然人よりは、稍大にして、又猿に似たる所稍少く、平均五呎乃至五呎半の高さを有し、其の住所は、岩窟及び風雨を凌ぐ屋内に過ぎず。彼等は花樹及び他の原始的の衣服を知れりと雖、兩性共に多くは裸體なるを常とす。木及び石より成る原始的の武器を有し、且、又無細工なる舟を有し五十

人乃至二百人の群を爲して徘徊すれども、猶社會的組織を有せず。一定の民族道徳が法律の力を有す。之に屬するものは濠洲の黑人、タスマニア人、日本のアイヌ人、ホッテントト、更に火山島民、マカス及び二三のブラジルの森林種族等、是なり。彼等の生命の價値は、下等なる原人を去ること僅かなるに過ぎず。

一 (ハ) 高等原人 多くは普通の人間の平均身長を有し、寒冷なる地方に於ては小なり、常に簡單なる住所(主として動物皮若しくは木皮より成る天幕なり)を有す。常に原始的なる衣服を纏ひ、石、青銅又は銅より成る善良なる武器を有す。彼等は百人乃至五百人づつ群を爲して住ひ、尊敬せらるれども統御する力なき首長に統御せられ、階級制度の萌芽を有す。生活の秩序は遺傳的の民族道徳に依りて定めらる。之に屬するは、トイダ、ナガ、グルンバス等多くの印度の原人に於て、更にニコバル、サモア人、勘察加人、亞弗利加に於ては、ダマラ國人及び南亞米利加に於ける多くの印度人は是なり。彼等の生命の價値は、ピテコイドの下等及び中等の野蠻人を去ること僅かにして、而も尙野蠻人の生命の價値に及ばざるものとす。

二 野蠻人即ち半原人 彼等の食物の大部分は、彼等が豫め自己の用に供し得る自然の生産物なり。従つて牧畜及び農業は、多少發達せり。分業は未だ僅かなり、是れ各家族は自ら其の要求を充たせばなり。通常一年間を通じて食物は常に過剰なり。従つて藝術は稍發達し初む。一定の住居なくして徘徊する原人とは異なり、概ね一定の住居を有す。

二 (イ) 下等野蠻人 住所は簡單なる小屋にして、通常村に分たれ、而して植物を以て取圍まる。彼等は常に衣服を着用すれども、甚だ簡單にして、男子は禪を纏ふの外、屢裸體なり。食器及び竈を有し、石、木、骨等より成る器具を有す。交換に依りて通商貿易を始め、大なる連結を形成するに足る一千乃至五千の人数を有する種族にして、階級の區別は戰爭中の勇敢なる行爲に依りて定めらる。首長は世襲の法律に據りて統治す。之に屬する種族は、亞細亞に於ては印度の多くの原住民(即ちムンダ、ゴンド、バハリア、ベール)其他にして、ボルネオのダヤク、スマトラのバタク、トングス、キルギス人等とす。亞弗利加に於ては、カフル、ベチ、アナ、バースト等濠洲に於ては、ニューギニアの土人、ニューカレドニアの土人、ニューヘ

ブリード、ニュー・ジラランドの土民、亞米利加に於てはイロケイゼ、トリンケット及びニカラグ及びグッテマラの土人等とす。

二(ロ) 中等野蠻人 住所は善良にして永續的に概ね木又は藁或は革を以て葺き、大なる市街を爲す。衣服は常に着用すれども、裸體を以て不作法となさず。陶器、布織、鑄造等相當に發達せり。商業は規定の市場にて金錢に依つて行はれ、國家は代々傳はれる法律を基として國王に依りて支配せらる。嚴格なる階級の區別を有し、十萬人に至るまでの國民を統御す。之に屬するは、亞細亞に於てはカイラム、ニク、亞弗利加に於てはアシャンチ、ファンチ、フェラー、シルク、モンブット、オウア、ンボ等の黑人種屬、ポリネシアに於てはファイジ、トンガ、サモア、マルケサ島等の住民とす。歐羅巴に於ては、此の中等野蠻人に屬せし者は、二百年以前に於てラブランド人、二千年以前に於ては、古代のゲルマン人、ヌーマ以前の羅馬人、ホメロス時代の希臘人等なり。

二(ハ) 高等野蠻人 住所は概ね堅固なる石造にして、衣服は缺くべからず。織物は女子の日常の勞作にして、金屬業は甚だしく發達し、鐵の器具は普通とな

る。商業は鑄造せられたる金錢を以て限られたる區界に行はれ、小なる權を以て行る舟を有す。嚴格なる法廷に於て粗雜なる司法あり。又、文字の初歩を有す。世襲の分業と世襲の階級の區別とを有する多數の國民にして一定の君主の下に立ち、時に五十萬の人口を有することあり。之に屬するは、亞細亞に於ては多くの馬來人(スンダ諸島及び馬來半島のマラッカに於ける)並びに韃靼及び亞刺比亞の遊牧民族、ポリネシアに於てはタヒチ、及び布哇の島民、亞弗利加に於てはソマリランド及びアビシニア人、ザンジバル及びマダガスカルの住民等とす。古代の歴史的國民中、高等蠻民に屬する者は、ソロン時代に於ける希臘人、共和國の初めに於ける羅馬人、宗長時代に於ける猶太人、七王國時代のアングロサクソン人、西班牙奪掠時代に於ける墨西哥人、秘露人等とす。

三 文明民族(スーザンランドの四分系に於ける開化民族) 營養及び各種の發達したる生活上の要求は、分業の大なる發達と器具の完全とに依りて容易に得らる。其の結果、藝術と科學とは向上發展す。専門の増加するに従つて各種の官能は高度に完成し、同時に全國家なる有機體は有力となる。蓋し總ての分

業は、互に相聯絡するものなればなり。國民(Civitas)は國家(Civitas)の法律に従はざるべからざることを知るに至る。

三(イ) 下等文明民族 都市は石造の隔壁を以て取圍まれ、石造の著明なる建築物あり。農業には鋤を用ふ。戦争は一定の階級の職業にして、文字は確實に設定せられ、粗笨なる法律書並びに確乎なる法廷あり。文學は發達を始む。之に屬する者は亞細亞に於て、西藏、ブータン、ネパール、ラオス、安南、朝鮮、滿洲の住民、定着せる亞刺比亞人、及び土耳其人にして、亞弗利加に於てはアルジェリア人、テュニス人、マウエル人、カピレン人、テュアレグ人等とす。歴史上の文明民族にして之に屬する者は、古代の埃及人、フェニキア人、アッシリア人、バビロニア人、ソロモン時代に於ける猶太人、カルタゴ人、マラソン戦後の希臘人、ハンニバル時代の羅馬人、ノルマン諸將の下に於ける英吉利人等是なり。

三(ロ) 中等文明民族 美麗なる寺院並びに宮殿は石及び煉瓦より建築せらる。窓及び帆船は使用せられ、商業は廣く擴張す。彼等は文字及び筆記せる書籍を用ひ、初期の文學的發達を爲す。軍人の階級は、高等に發達し、詳細なる立法

及び辯護士の制度あり。之に屬する者は亞細亞に於ては、波斯人、アフガニスタン人、緬甸人、羅暹人等にして、歐洲に於ては第十八世紀に於ける芬蘭人及びマジヤール人は是なり。歴史的の文明民族にして之に屬するは、ペリクレス時代の希臘人、共和政代末期の羅馬人、マセドニアの支配の下にありし猶太人、カペティンジャー朝初期の佛蘭西人、プランタジネット時代の英吉利人なり。

三(ハ) 高等文明民族 石造の家は、一般に使用せられ、道路には石を疊み、煙筒、運河、水車及び風車の設備あり。學術的の航海及び戦争は始まり、文書は一般に必要となり、筆記せる書籍は一般に分布せられ、文學は極めて尊敬せらる。甚だしく中央集權的となりたる政府は、一千万或は一千万以上の人民を包括す。一定の法律書は官衙より交附せられ、種々なる場合に於て法廷にて用ひらる。多數の政廳官吏は精密に一定せる階級を有す。之に屬する者は、亞細亞に於ては、支那人、日本人及び印度人にして、土耳其人並びに南亞米利加の各共和國等とす。歴史上之に屬するは、王朝時代に於ける羅馬人、第十五世紀に於ける伊太利人、佛蘭西人、英吉利人及び獨逸人等とす。

四 文化民族 食物及び他の要求は、人が自然力を以て人力に換ふることに依りて、多量に而も出来る限り容易に人工を以て製造せらる。同時に國家の組織は發達し、且あらゆる社會的勢力の完全なる協力に依り、人類はかの精神的、美學的素質を完成するの自由を有す。印刷は到る處に使用せられ、青年の教育は最も重要な義務となれり。戦争は其の意義を減じ、階級及び名譽は、戦争の勇敢に關係すること少く、精神的能力に關すること多し。立法は國民の代表者に依りて左右せられ、藝術と科學とは政府の努力に依りて著しく促進せらる。

文化民族の三階級 原人、野蠻人及び文明人の已に述べたる三階級と等しく、文化民族に於ても同様にアレキサンダー・スーザランドは、下等、中等及び高等なる三箇の發達階級を區別す。彼は其の最初の階級即ち下等文化民族中に、『歐羅巴の列強並びに其の子孫なる北米合衆國』を算入し、此等に對してのみ上に掲げたる定義は合せりと做す。彼は第二の階級即ち中等文化民族を以て、恐らく四、五百年以後に於て完成すべきものと豫想し、次の如く定義せり。『總ての人類は、營養及び住居善良にして、戦争は一般に嫌惡せらるれども、尙時に生ずること

あり。あらゆる國民の僅少なる軍隊及び艦隊は、一種の世界的警察として共同に作業す。商業及び工業組織は同情てふ道德的見地よりして發達す。精神的教育は一般に行はれ、犯罪及び刑罰は稀なり。第三階級即ち高等文化民族に就いては、スーザランドは單に之を豫言するは大膽なる事業にして、一千年乃至二千年以後に始めて達せらるべきものなりと言へり。此等三箇の文化階級を區別するは、余は其の餘りに不定にして、且第十九世紀があらゆる他の世紀に比して爲せる、偉大なる進歩を十分商量せざるを以て不満足なるが如く思はる。故に余は新しき文化史に於ては、當分次の如き三期を區別するを以て適切なりと思惟す。第一は第十六乃至第十八世紀、第二は第十九世紀、第三は第二十世紀及び將來是なり。

四 (イ) 下等文化民族 歐羅巴に於ける第十六世紀乃至第十八世紀(此の期の初め、即ち第十六世紀の前半に於ては、次の如き大なる出來事に刺戟せられて、精神生活は甚だしく活躍せり。第一、ガリレオ(一五九二年)に基きてコペルニクス(一五四三年)が宇宙の系統を建てたること、第二、コルンブス(一四九二年)の亞米利

加の發見及びヴァスコ・ダ・ガマ(一四九八年)の東印度發見並びにマジラン(一五二〇年)が初めて世界を周航し、之に依りて地球の球形なる實際的證明を與へたる事、第三、マルティン・ルーテル(一五一七年)に依りて歐羅巴の精神生活が羅馬の法王政治の軛より脱したる事、並びに宗教改革の普及に依りて當時盛んなりし迷信の衰へたる事、第四、煩鎖哲學、教會及び當時盛んなりしアリストテレスの哲學を離れて、學術的研究の新に發達したる事、ヴェルラムのペーコン(一六二〇年)に依りて經驗科學の建設せられたる事、第五、活版術(グーテンベルヒ、一四五〇年)及び木版術に依り、學術的知識の公布したる事、是なり。是等及び他の同時に生じたる大進歩の結果、第十六世紀に於て現代文化の基礎を生じ、そは速に前時行はれたる歐羅巴の野蠻を凌駕したり。唯其の始めは狭き階級にのみ限られたるは、政治的並びに社會的生活に於て、尙、歐洲中世の文明が残存したる迷信及び背理に對する鬭争の進行が遅々たりしとに因るなり。此の實際的方面に於ける發展は、佛蘭西革命(一七九二年)に依りて始めて實現せられたり。

四(ロ) 中等文化民族 吾人は中等文化民族として第十九世紀に於ける歐洲

及び北米の列強を擧ぐべし。此の「自然科學の世紀」が人類のあらゆる之に先つ世紀に比し、其の精神生活に對し意味する大進歩は、吾人之を主として次の如き出來事に見るなり、第一、理論的自然認識が深くなり、實驗的に建設せられ、且、一般に公布したる事、自然科學の多數の新しき分科の獨立して建設せられたる事、細胞説(一八三八年)エネルギの法則(一八四五年)進化論(一八五九年)の建設、第二、是等の理論的自然認識を實際に應用し、工業及び製造業のあらゆる方面に廣く應用せし事、就中、第三、交通、蒸氣船、鐵道、電信、電氣工藝の著しく敏活になりし爲め、時間及び空間の價變じたる事、第四、前時行はれたる二元的神祕的傾向に反して、一元的實踐的哲學完成したる事、第五、合理的科學的教育の次第に勢力を増加て、教會の信仰詩より脱したる事、第六、國民の代表者が政治及び立法に關係して益、自治權を取得するに至りたる事、治者が神權を有すとす誤れる教義が破壊せられたる事、並びに階級の新しき區劃等是なり。實に吾人、第十九世紀の兒が誇りとなすべき是等文明の偉大なる進歩は、尙、吾人が希望する程一般に行はるゝまでは、前途尙、遙かにして、寧ろ是等は常に多くの政府及び政府と結託せる教會

の舊式の文化觀及び權力維持の努力と一般に行はるゝ軍國主義とあらゆる種類の舊式にして尊敬を博せる不道德と激しく闘へるものなり。

四(ハ) 高等文化民族 吾人が今日達せんとつゝある高等なる文化は、常に總ての人間に出來得る限り幸福なる、即ち満足なる生存を供することを以て任務とす。あらゆる宗教的獨斷を離れ、自然の明瞭なる認識に基く完全なる道徳は、福音書の所謂「汝自身の如く其の隣人を愛せよ」との黄金律(宇宙の謎第十九章參照)の古き智慧を吾人に教ふ。理性は、出來得る限り完全なる國家組織が同時に國家に屬する各個人に對し、及ぶ限り多量の幸福を與へざるべからざることを知らしむ。自愛及び他愛の間、又利己主義と利他主義との間に於ける理性的平衡は、吾人の一元的倫理の目的とする所なり。今日尙、缺くべからざるものとして行はるゝ、多くの野蠻的風習及び舊式の習慣、即ち戦争、決闘、教會強制等は、消滅すべし。仲裁裁判は以て能く個人間に於けると等しく國民間に於ても、其の紛議を解決して満足を得しむべし。國家の主要なる興味は、今日に於ける如く出來る限り強力なる軍隊を完成する事に存せずして、藝術及び科學の廣汎なる保

護の下に、出來得る限り完全に青年を教育するにあるべし。物理及び化學に於ける新發見に基く工藝の完成は、生活狀態を一般に満足せしめ、蛋白質の人工的合成は、あらゆる人々に對して豊富なる食物を供すべし。結婚關係の合理的改善は、家族的關係をして更に幸福ならしむべし。

文化生活の價値 何人にも多少痛切に感ぜらるゝ吾人の文化生活の暗黒面は、マックス・ノルダウが其の『文化人の便宜上の虚偽』に明らかに示したる所なり。是等は若し理性にして、透明なる一元的世界觀の上に立ちて其の權力を實際生活に振ひ、今尙、行はるゝ古き獨斷に基く不道德を排斥するに於ては、大部分改善せらるべきものなり。然れども總ての暗黒面あるにも拘らず、現代文化の光明面も非常に大なれば、吾人は希望と信任とを以て將來に對し得るなり。吾人が現代文化の進歩の大利益を透察せんとするには、單に過去半世紀を顧み、今日の生活關係を以て當時の生活關係に比するを以て足れりとす。若し吾人にして、現代の文化國を以て高等に發達したる有機體、高次の社會的個體として、なりと認め、其の國民を以て高等有組織動物の細胞に比較せば、今日の文化國と原人

の最も粗雑なる家族關係とに於ける相違は、高等なる後生動物例へば脊椎動物と原生動物の細胞群落との間に存する差異よりも少からざるを見るべし。一方社會を成せる個體の分業の進歩と、他方社會の中央集權とは、社會を成せる人をして孤獨の時代に於けるよりも、遂に高等なる事業を成就するを得しめ、従つて其の生命の價値を著しく増加したり。吾人は此の事を知らんが爲めに、一方に於ては文化の個人的價値、他方に於ては其の社會的價値を營養、生殖、運動、感覺及び精神生活の五箇の主要なる生活活動の領域に於て比較せんとす。

文化的營養の個人的價値 各個體を爲す有機體の第一の要求たる自己の保存は、現代の文化國に於てはあらゆる以前の生活關係に於けるよりも遂に完全に満足せらる。原人は獵に依り、漁に依り、又、野生の果實及び根を集聚することに依りて得たる自然の産物を以て満足せざるべからず。其の後に至り始めて牧畜及び農業は發達したるが、營養、住居、衣服等の關係が文化人の確實にして愉快なる生存を與へ、又、缺くべからざる營養を美的、精神的、興味と連結せしむるに至るまでは、野蠻及び文明なる多くの階級を経ざるを得ざりしなり。

文化的營養の社會的價値 各個人の營養及び状態に於けると同じく、社會的國家團結の營養及び状態も文化に依りて、極めて著しく進歩したり。科學及び農業の進歩は、先づ大なる人類の集團に對して、十分に食物を供給するを得しめ、鐵道及び蒸氣船に依る容易にして、且、急速なる交通は、是等の食料を全地球上に平等に分配するを得しめたり。科學的醫學及び衛生學は、疾病の危險を減少し、其の發生を豫防的に停止する多くの手段を發見したり。公設の浴場、運動場、調理場、公園等に依りて、最も廣き一般人民の健康に注意せらるゝ現代の住居、其の暖房及び採光の設備は、甚だしく改善せられたり。現代の社會政策は、文化の善良なる方面をあらゆる種類の生活を安樂にすべき準備に依りて、下級なる國民階級にも之を得しめんとす。博愛的團體は、各箇の社會階級の多くの物質的並びに精神的要求を満足せしむることを得ん。然れども國民の營養關係を更に完全ならしむるには尙、多くの改善を要すべき餘地を存す。されど、大體に於て、現代の文化國に於ける營養の關係は、中世代に於けるよりも亦、前時の野蠻時代に於けるよりも、著しく改善せられたるは否定すべからず。

文化的生殖の個人的價值 生理學の種々なる領域中、奥妙なる「生命の不可思議」即ち「種の保存」てふ領域に於ては、醇化せられたる文化の高級價値は最も著しく現れ、又其の文化は原人の本來の状態とは霄壤の差を生ずるに至れり。生殖の媒介を爲す強力なる生殖慾を満足せしむるに方り、原人及び多くの野蠻人は、尙、猿類及び他の哺乳類と同様なる状態にあり。彼等の間にありては、女子は男子に取りて單に快樂の渴仰せられたる對象なるか、或は單に他の所有物と同様に賣買せらるゝ權利なき奴隷に過ぎず。徐々として此の所有物の價値は上昇し、節度ある婚姻に於て、遂に不變なる高き保證に達す。家族生活は夫婦に取りて、高等にして醇化せる生活の快樂の源たるに至る、斯くて文明の次第に發達すると共に、其の價値は絶えず増加し、婦人の特權は漸次認識せられ、肉體的の愛の外に、夫妻の間に密接なる精神的關係は發達す。生兒を善く世話し教育する共同の配慮は、已に多くの動物に於ても養育(Conatia)として存するものなるが、こゝは家族生活及び學校を種々なる方面に於て完成す。されども始めて文化の高等なる發達を爲すに至つて性慾の醇化を生じ、密接なる一時的の感情の満足に

依るにあらず、兩性の精神的相互作用、及び不斷の緊密にして精神的なる同棲に依り、其の最高なる満足を得るに至る。茲に始めて美に、善及び眞と調和して三位一體を生ず。是を以て戀愛は已に數千年以來、如何なる關係に於ても人類が美術的に高尚となれる、最も重要な源にして、此の源泉より詩歌、音樂、繪畫、彫刻等、あらゆる藝術は其の糧を得て、盡くることなかりしなり。高等なる文化人類の各個人は、之を以て自然的にして抑制し難き性心を醇化し、高尚なる形態に於て満足得るのみならず、兩性相互の精神的感化及び最も高等なる理想的生活の利益を共に享受するは、獨り之を楽しむよりは甚だしく各人の性格を高尚にするを以て、文化的の戀愛は偉大なる價値を有するなり。従つて眞實、善良にして幸福なる結婚は、こゝは實に今日、甚だ多しと謂ふ能はず、心理的及び純粹に生理的見地より觀て、各箇の高等なる文化慾が努力して取得すべき價値ある生活上の目的なりとす。

文化的生殖の社會的價値 高尚なる結婚は、家族形成の最良なる形態にして、又直に國家形成の最も鞏固なる基礎なるが故に、其の高級社會的價値は、一目し

て瞭然たるべし。兩性の愛に満てる信頼及び相互の犠牲は、倫理の黄金律たる利己主義と利他主義との平衡を最高度に満たすものなり。之に就いては、フリッ・ツ・シユルツェが其の比較心理學(第二篇第九七頁、一八九七年出版)に於て論じたる所は甚だ當を得たり。吾人は「此の利他主義の起原を以て超自然的の超絶的領域、若しくは何等かの形而上學的抽象に求むべきものにあらざして、生物の本性の最も現實にして自然的性質に求めざるべからず。茲に於て有機的に又理學的に、將た心理學的に動かさるゝ性慾なるものが、總て精神的なる愛情の根本的且、永續的なる源泉たり、従つて總て固有の倫理的にして又、同情的感情に基く道德性の源泉たるは疑なし。——二箇の原動力は、あらゆる生物の有する所にして、自己保存及び種の保存即ち是なり。前者は利己主義を強制的に惹起するものにして、後者は利他主義を發動せしむ。前者よりして總て敵對的の感情と衝動とは出て、後者よりして友情的の衝動と感情とは生ずるなり。」

斯く生物は自己保存の要求に基きて、先づ自己を養ひ、且、保護せざるべからず。されど種の保存の要求の偉大なる魔力は、直に彼が心中に湧き、彼は性慾の壓迫

を感じ、之を満たして單に利己的なる快樂を楽しめりと信ず。然れどもそれは誤謬にして、實際、自己の用にあらず。こは全體即ち種の爲めなり。戀情の焔は、彼の中に燃ゆ、而して此の戀情は、初め頗る肉感的なれども、此の新しき感情は拒むべからざる相互信頼の情相互の同情及び顧慮の情にして、そは單に自己のみならず、他人をも顧慮し、自己の幸福のみならず、他人の幸福をも顧慮し、他人の幸福の中に自己の幸福を發見するものなり。而して此の感情たる、初めは單に生殖に與かる兩人間にのみ存在し、兩人を結合するのみなれども、其の子女にして、世に現るゝに至らば親の愛として子女にまで擴張せらるゝなり。斯くて種屬保存てふ理學的にも、心理的にも同様に強き基礎を有する生殖慾によりて、夫婦の愛、親の愛、子の愛、隣人に對する愛等を生ず。而して、猪突的利己主義は犠牲的利他主義に變じ、遂には幼者の爲めに自己自身の生命を犠牲にするに至る。此の有機的、自然的に基礎を有する家族的愛情及び家族的思想は、總て同情的及び眞に倫理的、他愛的なる同情の根據たり。之によりて愛情は、廣き社會に移さるゝものとす。従つて家族は、總て眞に道德的なる感情及び生活の根原なりと認む

べく、こは單に人類間に於けるのみならず、又動物界に於ても然り。將來高等なる文化に依り、家族の生活を思慮深く高尚ならしむるに於ては、更に此の見解に新しき證明を供するならん。

文明的運動方法の個人的價值 吾人にして若し今日、文明に依りて得られたる現代人類の運動方法と、かの原人の簡單なる運動形態とを比較して、前者の有する利益を見る時は、第一に、最古の人類は、其の直接祖先、即ち類人猿と等しく樹上に匍匐して生活し、漸く時々地上を走行したりしことに思ひ當るべし。高等なる原人の一部は、漸く馬を騎乘に利用し、之を慣らし始め、海岸及び島嶼の住民は、早く丸太を以て舟を造り始めたり。其の後に至り、漸く野蠻人は車を發明し、更に後に至りて、文明人は、道路を建設し、車の交通を改良したり。然れども、第九世紀は、吾人に對し始めて急速にして、愉快なる運動の無量の價值を有する進歩を齎せり。是れ吾人が鐵道及び蒸氣船に負ふ所のものなり。全交通制度は、之に依りて根柢より形態を變じたるが、最近十年間に於ては、之に加ふるに電氣工學の驚くべき發展に依り、新しき加速の運動率を得るに至れり。吾人が現代

空間及び時間に對する概念は、六十年以前に於ける父母、九十年以前に於ける祖父母とは全く異なれり。吾人は今や急行列車に乗り、昔時、郵便馬車が五倍の時間を要し、徒歩者が十倍の時間を要したる距離を一時間に行き得べし。伯林の電氣急行鐵道の實驗は、吾人が一時間に二百基米突以上を旅行し得べきことを示せり。歐羅巴より印度に至る旅行にありては、今や急行船に乗りて三週を要するのみなれども、以前帆船は、三ヶ月間を要したるなり。吾人が斯くして得たる莫大なる時間上の利益は、之に相應する吾人の生命の貴重なる延長を意味するなり。こは吾人が自働車及び自轉車等に依りて得る運動の急速なる方法に就いても同様にして、此の巨大なる文化の進歩の全價值は、何人と雖、認め得る所なるが、是等を正當に評價し得るは、長き間、良好なる道路の存せざる未開の土地に住み、或は單に運動機關として足を有するに過ぎざる野蠻人の間にありし人々なりとす。

文化的運動方法の社會的價值 國家其のものより觀たる現代の運動の進歩の價值は、各文化人より觀たる價值に劣らず。吾人若し國家を以て高次の統一

ある有機體なりとせば、其の交通の進歩は、多くの關係に於て各脊椎動物ベルズ
 ーン内に於ける、血液の循環に對應するものなり。生活上の需要品を中央より
 最も隔たりたる地方に容易に迅速に且安價に運搬し得る事並びに之に對應し
 て鐵道網及び汽船交通の發達は、或程度まで直接文化状態を秤る標準なりと認
 め得べし。加之、各種の官省及び多數の人々は、確實なる定着と十分なる生活と
 を爲し得るの利益あるなり。

文化的感覺機關の個人的價值 吾人若し文化人の感覺活動なる廣き領域を
 以て自然人の遙に簡單なるものに比較せば、吾人は先づ眼を外部の感覺器の作
 用に注ぎ、次に大脳皮質に於ける感覺過程を思はざるべからず。此の兩感覺活
 動に對して、最近フリップ・シニルツェは、『自然民族の心理學』(一九〇〇年出版、第二十一
 ー四十頁)に於て、野生の自然人は感覺の人にして、文化人は之に反し精神の人な
 るを切言せしは至當なり。吾人若し吾人が高等なる心靈官能、即ち本來の中樞
 神経活動(感覺及び意志、觀念及び思考)を以て解剖學上フロネマ(大脳皮質の思考
 器官)に結合せりとし、之に反し内部の感覺を知覺することを以て、中樞のセンソ

リウム(大脳皮質の感覺叢)に連續せりとせば、吾人は後者が野蠻人に於て、前者が
 文化人に於て、高度の發達を遂げたるものと假定せざるべからず。外部の感覺
 活動は、原人に於ては文化人に比し量よりすれば強く、質よりすれば弱し。こは
 特に吾人が美的感覺と呼び、藝術及び詩歌の根源をなす繊細にして複雑なる感
 覺官能に就いて然りとす。原人に於て最も強度に(文化人に於けるよりも遙に
 鋭敏に發達せるは、客觀的の遠距離感覺、視覺、聽覺、嗅覺の鋭さなり、蓋し此等は彼
 等と關係する利益、若しくは危険を有する外部の物體を遠距離よりして示すも
 のなればなり。されど物體との直接の接觸に依りて惹き起され、主として感覺
 的享樂の用を爲す主觀的の近距離感覺に於ては之と反對なり。即ち味覺、性慾
 感覺、感情若しくは接觸感、温度の感覺等に於けるが如し。然れども感覺活動の
 此の兩範圍に於て、文化人は野蠻人に比し、其の繊細なる階段、殊に美的發達に於
 ては無限に勝れたり。加之、現代文化は、其の豊富なる發見に依り、人類に對し彼
 が自然の感覺活動を著しく増加し、且、完全ならしむる方法を供したり。茲に吾
 人は、唯、顯微鏡及び望遠鏡が吾人の眼に供したる廣き認識の領域、並びに調理術

の繊細に涉れる科學的方法を想起せば足れりとす。高等に發達したる藝術が吾人に供する繊細なる美的享樂即ち建築彫刻が眼に對し、音樂が耳に對し、香料等が鼻に對し、調理術が舌に對して與ふる快樂の如きは、大部分原人の理解せざる所にして、而も彼等は文化人よりも遠距離に於て視、聽き、嗅ぐことを得るなり。又接觸感覺、味覺、性慾、感情の享樂に於ても、彼等は單に粗雑なる質量的作用を考ふるのみにして、繊細なる美的作用を考ふるものにあらず。

文化的感覺方法の社會的價值 各文化人の個人的生命の價值より觀たる場合と等しく、又其の國家的組織の社會的價值より觀たる場合にも、國民の繊細なる感覺活動並びに之と關係せる美的享樂は、甚だ重要なるものなり。就中、高等に發達したる藝術及び科學の無限の價值は、其の主要なるものにして、國家は此の兩者を大に尊敬し、獎勵し、且、青年を教育するが爲めに夙に之を利用するなり。従つて將來、高等なる文化人は、今日に於けるよりも幼年者の教育に於て悟性と等しく感覺をも遙に鋭敏にし、小兒をして自然の物體を鋭敏に觀察し、自然を欺く繪畫により其の形態を表し得るやう教育することに意を用ひざるべからず。

更に藝術感覺を教育するが爲めに美術作品を示し、美的練習を進め、又、現實の知識を習得する以外に藝術を味はんが爲めの教育を施し、遠足及び旅行に依りて、自然の美に對する感覺を夙に覺醒せしめざるべからず。されば文化人の子供は、粗雑なる原人等が未だ何等の豫想をも有せざりし、最も繊細にして最も高尚なる生活享樂の不盡の源泉を既に有するものなりとす。

文化的精神生活の個人的價值 文化人が今日「精神生活」と名づけ、全く人類にのみ附與せられたる「生命の不可思議」なりと屢認むる高等なる心靈活動は、吾人が遙に低度の自然人の間に發見し、且、自然人が高等脊椎動物と共有する心的活動の高等なる發達階級に過ぎず。比較心理學は、吾人に教ふるに余が「宇宙の謎」第七章に設定したるが如き長き「心靈の階段」を以てす。こは原生生物の簡單なる細胞心靈よりして、下等なる有組織動物の無意識的なる反射心靈並びに本能に至り、是等よりして高等なる後生動物並びに人類の意識せる心靈に至るなり。神経系統の比較解剖學並びに個體發生學は、吾人に證するに、高等動物の中樞神経系統に於て、此の意識ある心靈活動の器官を以てし、腦髓の比較組織學及び病

理學は吾人に教ふるに此の特殊なる箇所は大脳皮質の思考叢即ち觀念聯合中樞にあるを以てせり。此處にフロネマ中に生ずる觀念聯合(ドケーゼンの聯合感覺知覺の印象、思考活動及び意志の衝動の結合は、又長き階段の發達を示すものなり。此の階段に於て、高度に發達したる文化人(例へばダーウィン、ラブライス、カント等の如き)と粗雜なる原人(例へばアッカ人、ウニダ人、濠洲人の如き)の間に存する智能上の差異は、後者と之に最も近き類人猿(猩々、黑猩猩、ギボン)若しくは高等に發達したる文化動物(犬、馬、象等)の距離よりも遙に大なり。最下等の原人の精神的要求及び活動は、是等動物の程度を越ゆること極めて少きも、吾人の最大なる精神上の英雄哲學者、自然研究者、詩人及び藝術家の不滅の事業は、之を凌駕すること九天の高きに似たり。殊に特徴とすべきは、自然人の感覺的、具體的思考と文化人の概念的、抽象的思考との間に存する相反なり。フリッツ・シュルツェは、其の『自然民族の心理學』(第三六一—三八頁)に於て、此の意味深長なる差違を特に指示したり。之に依りて教養ある各人の精神活動に對する、文化生活の高き個人的價值を更に此所に論ずるの必要なきなり。唯、第十九世紀の末葉に於て、吾

人の各個が如何に量るべからざる精神的財寶を左右し得るかを考ふれば足れりとす。此の財寶たる、實に其の廣さと深さとに於て、吾人が祖父母の第十九世紀の當初に於て、何等豫想せざりし所なり。

文化的精神生活の社會的價值 第十九世紀に於て、各文化人は文化の進歩に依りあらゆる方面に於て、其の個人的生活の豫想せざりし向上を見たと等しく、吾人が現代の文化國は、多くの點に於て偉大なる進歩を爲せり。自然の認識及び工藝のあらゆる方面に於ける、多數の發見と發明との結合、交通、及び收入財源、あらゆる藝術及び科學に於ける進歩の聯合は、現代文化國の全精神活動の高き發達を自然に招致したり。

地球の生成以來、眞の科學と其の基礎たる自然の認識とが、今日第二十世紀の始めに於けるが如き、驚くべき高處に立ちたること未だ曾て之あらず。今日の如く人類の精神が、自然の最奥なる祕密に、斯くも深く浸入し、其の統一に就いて、斯くも高き理論的確信を懷き、此の認識を人類生活の方法と實際とに、斯くも多方面に利用せしことあらざるなり。然れども文化人の此の赫々たる勝利は、

深刻なる分業に依り、種々なる力が相協力し、又最も強大なる文化國民等が賞讃すべき競争に依り、其の豊富なる手段を共通なる大目的に使用し得るに至りて、初めて可能となれるなり。

然れども吾人は、今日此の目的より隔たること實際尙甚だ遠し。吾人の文化國家の社會的組織は、一部分にのみ甚だしく發達し、他の部分に於ては尙未開の狀態にあり。余が『宇宙の謎』の第一章第八頁に引用したるアルフレッド・ウーレスの言は悲しくも常に眞理なり。曰く、『吾人の統治、司法乃至國民教育等の系統及び全社會的、道德的組織は理學及び其の實際上の應用に於ける刮目すべき進歩に比して、尙野蠻の狀態にあり』而して高等なる文化民族が第二十世紀の間に於て純粹理性を以て、行動の最高の規矩となし、之を盲目なる信仰及び傳說的權威に換へ且、『人類の自然に於ける位置』を正當に理解し得るに至りて、始めて斯かる狀態より徐に免るゝことを得べきなり。

人類生命の評價 吾人が若し文化の進歩に由りて生ずる人類生命の價値の騰貴に關する吾人の短き瞥見より得たる總ての點を總合せば、現代文化人の個

人的價値は其の社會的價値と等しく、其の野蠻なる祖先の價値に比して無限に向上したるは疑なし。吾人の現代の文化生活は、高度に發達したる藝術及び科學に伴ふ最高の精神的興味を無限に所有す。吾人は人身及び財産に就いて心配なき確實を保證する、秩序ある社會的、國家的聯合の間に、平靜に而も愉快に生活す。吾人の個人的生命は、野蠻なる自然人の生命に比して百倍以上美しく、長く、且價値あるものなり。是れ其の多種多様な興味、經驗、見聞及び享樂等に於て百倍以上も豊富なればなり。されど勿論、文化生活の裡にも生命の價値の階段の差は著しく大なり。そは文化國に於ける必然的分業の結果、地位及び階級の分化の進むに従ひ、國民中高等に教育せられたる者と無教育なる階級との間に於ける差違益甚だしく、従つて其の興味、要求、並びに其の生命の價値も亦、相異なるに至るを以てなり。此の差違は、吾人が視線を先づ高く文化人類の最高處に立てる時代の『指導的精神』に注ぎ、亞いて之を單調にして勞苦多き世路の深き谷間に、呆然と徘徊せる下級なる一般人士に比較せば最も著しく現るべし。

生命の個人的及び社會的評價 國家は其の一員たる思考力ある文化人が自

己の生命並びに其の同胞の生命の個人的價值に關して判斷する所と全く異なりたる判斷を下す。現代の國家は、自己を防禦せんが爲めに、國民よりして一般の徵兵義務を要求し、又、國家の個人的存在に對し、各人より均等なる犠牲を要求す(獨逸國に於ては、唯、加特力僧侶のみ此の犠牲を免るゝの特權を有す)。吾人の法律に於ては、各個の人命の價值は同一にして、それが七ヶ月の胎兒たると初生兒(未だ意識を有せず)聾啞のクレチン(白痴の類)たると、將た又、豊富なる天才なるを問はざるなり。個人の場合と社會の場合とに於ける此の生命評價の相違は、倫理の總ての根本法則に於ても亦存在す。戰爭は今日尙、多くの文化國民に於て避くべからざる害惡として行はるゝは、野蠻人間に個人的殺戮及び殺人的復讐の行はるゝが如し。而も文化國家が之を行はんが爲めに、其の最大の手段を盡す、此の大規模の虐殺は、國家が僧侶を任命し、彼等をして毎日曜日、に儀式堂々と説かしむる基督教の愛てふ柔和なる教義と相容れざるものなり。

新文化國の重要な任務は、人命の社會的評價と個人的評價との間に自然的の調和を齎すにあり。之が爲めには、就中、學校教育、國民教育、法律及び社會組織

の根本的改良を必要とす。茲に吾人は始めてウオレスが正しくも言明したる、中世紀の野蠻に打ち克つことを得るなり。今日、此の野蠻は、吾人の刑法、吾人の階級の特權、教育上の悲しむべき煩瑣主義、教會の神聖、政治等に於て尙、到る處に其の力を示せり。

生命の主觀的及び客觀的價值、生命の個性的及び一般的評價(各箇の生物體に取りては、先づ其の個的生命は、最も直接なる目的にして、又、最も高貴なる價值を有す。従つて多くのものは、自己保存の爲めの努力をなす、是れ無機界に於ては、理學的の「慣性の法則」に歸し得べきものなり。然れども此の生命の主觀的價值に對して、各個人の外に對する意義如何に基く客觀的價值あり。後者は有機體が高度に發達し、普遍的活動に立ち入ること深ければ深きに從つて大なり。此等の關係の中、最も重要なものは、同等なる個體間に於ける分業と各個體の高等なる全體の聯合、即ち結合に基く所のものなり。こは吾人が組織及びベルゾーと名づくる細胞國家に於ても、高等植物及び下級動物の群體に於ても、將た上級動物及び人類の群並びに國家に於ても同様なり。此等の關係が漸次進歩す

る分業に依りて發達し、分化せる各個體の要求密接となるに従つて、個體が全體に對する客觀的生命の價值愈高まれども、之と同時に個體の主觀的價值は益低下するなり。之よりして自己獨特の生活目的を追ふ、各個生物の利益と國家の目的の爲めには個人を以て單に一機械の部分としての價值あるに過ぎずとなす國家の利益との間に不斷の争闘を生ずるなり。

第十八章 生命の風習

適應と習慣 本能と道德 流行と理性

『カントを以て眞理の權化なりとする評判は當らず。彼は虚言の權化にして、而も彼の虚言は、正當なる領域に動けるにあらず。虚言は生活に屬するもの、生活は虚言を要す。されど虚言は哲學に屬せず。カントは其の生活に於ては尊むべきも、哲學に於ては欺けりき。人若しカントの不透明なる所、其の尊むべからざる所を擧げんとせば、彼が全著作を引用せざるべからず。道德哲學者たるカントは、半ば詐欺者にして半ば判斷に缺けたり。彼は戦々兢兢として哲學的研究の深く暗き源泉より、彼が茲に祕密の裡に置きたる所のもの、即ち國家と教會との要求を汲み出だしたる點に於て、詐欺者と稱すべく、彼は或程度まで、自己自身と撞着せる點に於て判斷に缺けたりと謂ふべし。彼の結果は、尊敬すべき哲學的事業の域を脱せるものなりとす——カントの倫理學は、種々なる點に於て、攻撃せられ得べく、それは各攻撃に依りて全滅せらるべし。木乃伊は其の如何なる點に觸るゝも、微塵となる——無上命法は、カントが讀む能はざりし略符にして、彼は略字を完全なる文章なりと思へり。』

二元的倫理學 無上命法 一元的倫理學 風習と適應 適應と變異 習慣 習
 慣の化學性 プラスマの營養的刺戟 無機物の慣熟 本能 社會的本能 本能
 と風習 權利と義務 風習と道德 善惡 風習と流行 雌雄淘汰 流行と羞恥
 感 流行と理性 儀式と禮拜 ミステリーとサクラメント 洗禮 聖餐 化體
 說 救濟の奇蹟 法王教のサクラメント 結婚 現時の流行 名譽 風習の系
 統發生學

總ての社會的高等動物と同じく人間の實踐的生活は、慾と習慣とに支配せらるゝものにして一般に之を風習と名づく。此の行儀(Mores)即ち道德又は倫理の科學は、廣く世間に行はるゝ二元論よりして、所謂一箇の「精神科學」と看做され、一方に於ては宗教と、他方に於ては心理學と密接なる關係を有するものとせられたり。第十九世紀に於ては、蓋し此の二元的解釋は、一般に其の價値を保ちたり。カントの偉大なる權威は其の「無上命法」と共に之に見掛け上、絶對的なる基礎を供し、且此の解釋は直接、基督教の信仰論に結合したればなり。されど吾人の一元論は、倫理學總ての科學と同じくをも「自然科學」と看做す。而して此の解釋は

風習が超自然的起原を有するものにあらずして、社會を爲す哺乳動物の自然的生存要約に對する適應に依りて獲得せられ、従つて物理學的法則に歸せらるべきものなりとの確信に基けり。故に現代の科學は風習を形而上學的「生命の不可思議」と做さずして、有機體の生理學的活動の作用なりと做す。

二元的倫理學 吾人の現代生活は、總て今日に至るも尙「啓示」に基き、且宗教の信仰論と密接なる關係を有する傳說的道德が課したる誤謬に囚はる。基督教は古き猶太の宗教よりモーゼスの「十誡」を採り、之をプラトーン派の神祕的形而上學と結合せしめて、一の強大なる道德組織となせるなり。近代に至り、之に其の「實踐理性の批判」に於て、有力なる形而上學的基礎を附與し、且形而上學の三大獨斷即ち人格的神、不滅の心靈及び意志の自由を動かすべからざる支柱として示したるは實にカントなり。此等三大獨斷の相互間の内部的關係と其の道德論の實踐理性に及ぼす一定の影響とは、カントが道德論に對して更に無上命法なる獨斷を設けたるが爲め、殊に重要となれり。

無上命法 カントの二元哲學の今日尙、非常に重要なるは、主として實踐理性

の意義を理論的純粹理性の首位、即ち上位に置きたるに基く。カントが普遍的に行はるべきものと主張したる絶對道德律は、其の『無上命法』に於て次の如き表式を以て表されたり。曰く、「常に格言即ち汝の主觀的原則が、同時に一般法律の原理として價值を有するが如くに行爲せよ」と。余は已に余の『宇宙の謎』第十九章に於て、此の『無上命法』は『物其物』の說と同じく、獨斷的基礎に立つものにして、批判的基礎を有せざることを指摘せり。故に他の點に於て、屢、カントと相接觸するショーペンハウエルが此の重大問題に就いて云ふ所を見るは興味あり。彼曰く、「カントの無上命法は、今日に於ては美しからざれども、而も平易にして、且、通俗的稱號、即ち、道德律なる名稱の下に輸入せられたり。日々の書記は、若し彼が單に吾人の理性中に存すと謂はるゝ、道德律に訴へ而して其の上に冗長にして、混亂せる文句を欣んで加へ、以て簡明なる生活關係を不可解的に爲す時は、彼は非理性の沈着なる確信を以て、倫理學を建設し得たりと考ふ。此の際、彼等は實際斯かる道德律が道德の重寶なる法典として、吾人の頭、胸或は心臓に書かれたるや否やを問ふことなし。此の廣き休息の枕は、カントの實踐理性の無上命法

が全く不當にして根據なく、腦中より考へ出されたる假定なるを證明せば、則ち道德より取り去らるべし。カントの『實踐理性』の全教義は、批判的にあらずして、獨斷的なる基礎を有する如く、彼の無上命法も亦純粹の獨斷たり、即ち公平なる純粹理性の實踐的認識と反對する詩歌的信仰箇條なり」と。

無上命法が先天的に人類の心靈に刻み込まれたる無制限なる律法なりとする義務の戒律は——義務的本能として——實際、大腦皮質のフロネマの系統的變化の長き連鎖に歸し得べし。義務其の物は、後天的に個體の利己主義と社會の愛他主義の複雑なる相互關係より歴史的に發達したるものなり。義務の觀念、即ち良心とは、意志が義務の自覺に依りて規定せらるゝ事にして、こは個性に依り甚だ其の階段を異にするなり。

一元的倫理學 道德律に關する吾人の自然科學的解釋は、比較解剖學、進化論、人種學及び文化史等に支へられて、吾人に教ふるに道德律が生理學的基礎の上に立ち、且、自然的道程を経て進化したるものなる事を以てす。吾人の現今の道德、國家制度及び法律制度等は、第十九世紀の間に古き下等狀態より發達せるも

のにして、今日吾人の大多數は、此の下等状態より脱却したるものと考ふ。第十
八世紀の古き文明道德（フレイモワール）は、更に之に先行せる第十七世紀及び第十六世紀の倫理
より、是等は又、中世紀の野蠻道德、其の専制主義と教會の狂信、異端審問、魔術者に
對する審問等より誘導せられたるなり。近代の人種學と「自然民族の比較心理
學」（フリッツ・シュルツェ）著、一九〇二年は、又吾人に教ふるに、野蠻民族の道德は原人の下
等なる社會状態より階段的に發達し、且、後者と社會的猿類及び他の社會的脊椎
動物の本能との差は、程度の問題にして種類の問題にあらざる事を以てす。更
に公平なる比較生理學は、吾人に哺乳動物と鳥類との社會的本能は爬蟲類及び
兩棲類の下等なる階段より、後者は又、魚類と他の最下等なる脊椎動物の階段よ
り發達したるものなる事を示す。最後に脊椎動物の系統發生學は、又、吾人をし
て上記の如き、最も高等に發達せる系統は、無脊椎、有組織動物、脊索動物、蠕形動物、
腔腸動物の長き祖先列より、而して後者は一列の原生生物より徐々たる變化に
依り進化したるものなることを信ぜしむ。原生生物なる單細胞生物（最初は原
生植物、後に原生動物）中に已に「教化」（シャトラン）の最も重要なる原體即ち成群若しくは「細胞

連合（フレイム）の形成を見る。合一せる細胞個體の相互に對する適應及び外界の共通生
存要約に對する適應は、原生生物に於ける道德の原始的發端の生理學的基礎た
り。孤獨なる獨棲生活を捨て、細胞群落即ち細胞連合に結合したる總ての單細
胞生物は、之に依りて其の自然的利己主義（エゴイズム）を制限し、社會的利害の共通せるが爲
め、他愛主義（アルトリスム）を承認せざるべからざるに至れり。ウォルウックス及びマゴスフェラの
游泳する球狀細胞群落は、箇々の細胞の利己的本能と細胞の他愛的要求とを調
和せる結果、特別なる形態と、運動法と生殖の「風習」とを生ぜり。

風習と適應 所謂「風習」は、其の狭き意味に於けるにもせよ、又は其の廣き意味
に於けるにもせよ、常に營養に依る有機體の自己保存と最も密接なる關係を有
する適應の生理學的官能に歸すべきものなり。營養的刺戟に依りて決定せら
るゝプラスマ内の變化は、物質代謝の化學的エネルギーに基くを常とす（第九章）
故に茲に先づ適應なる概念を明瞭にするは、最も目的に適へるものなるべし。

余は一八六六年「一般形態學」の第十九章に於て之を次の如く定義せり（第一九一
頁）。即ち「適應」（Adaptatio）即ち變異（Variatio）は、營養なる根本的官能と直接の關係を

有する有機體の一の普遍なる生理學的官能なり。而して適應は各個體的有機體が外部なる生存要約の影響に依りて變化し、其の祖先の有せざりし性質を獲得し得るの事實に現出す。——變異性の原因は、有機體の部分と之を取り圍む外界との間の物質的相互作用に存す。——故に變異性(Variabilitas)即ち適應性(Adaptabilitas)は、何等特別なる有機的官能にあらずして、營養の物質的、物理化學的過程に基くものなり。適應に關する此の器械論的解釋は、余が三十八年前上記の書に記載し、而も餘り世間より顧みられざりしが、『自然造化史』の第十講に於て簡単に繰り返し置きたり。

適應と變異 適應の概念と其の變異に對する關係とは、屢、上記の定義と異なる解釋の下さるゝ事あり。殊に最近ルー・ドウィヒ・プラターは、適應の概念を制限して、有機體に必要な變異にのみ限定せり。其の際、彼は余の概念の廣義の解釋を以て『明瞭なる誤謬』なりと非難し、且、余を以て少しも人の教へを聽かざるが故に此の概念を廣くしたる者なりと考へたり。余にして、若し斯くの如き非難に答へんと欲せば、余は余の生物發生學的根本法則がプラターに依りて偏頗

にして、而も誤れる取り扱ひを受けたるを指摘し得べし。蓋し人類の生活中にも他の有機體の生活に於けると等しく、有機體に取りて必要なるにあらざるのみならず、或は之と關係なきか若しくは不利益なる多數の習慣と本能とを有す。然れども是等は、適應の概念の下に入るべきものにして、遺傳に依りて永續し、其の形態を改むるものなり。殊に人間、家畜及び作物の養成の場合に於ては、あらゆる種類の斯くの如き適應——必要なるあり、無關係なるあり、又有害なるあり——(教育、鍛鍊、馴養、惡癖、惡風感染等の結果)の種々雜多なるを見得べし。而して之が爲めには唯流行と學校との感化を想起すれば足れり。更に不必要にして加之、屢、有害なる退萎せる器官の生成も亦、適應に基くなり。

習慣 習慣は第二の天性なり(Consuetudo est altera natura)とは拉丁の古諺なり。こは實に深遠なる真理にして、其の全體の意味は、ラマルクの進化説に依り始めて吾人が満足に意識せらるゝに至れり。箇々の有機體の簡單なる習慣は、その社會に承認せられ、且、模倣せらるゝの結果、強力なる風習となるなり。習慣は同一の生理的活動を屢、繰り返すことに依りて形成せらるゝが故に、其の原理に於

ては、累積的、集積的若しくは官能的適應に歸すべきものなり。斯くの如くブラスマの記憶と密接なる關係を有する同一の行爲を屢繰り返す結果、能働的若しくは受働的意味に於ける永續的變化を惹起す。即ち能働的には、器官は發達し、且、練習に依りて鞏固となり、之に反して受働的には、退化し且、不練習に依りて軟弱となる。それ自身に於ては重要ならざる變異も、斯くの如く累積即ち集積する時、適應作用は非常に進行し、遂に漸進的變形に依りて、新なる器官を生じ、退嬰的變態に依りて、既存の器官は不用となり、且、衰萎して遂に消失するに至る。

ブラスマの營養的刺戟 下等有機體に於ける慣熟の簡單なる過程を深く探究する時、吾人は此の過程が、他の總ての適應と同じく、ブラスマに於ける化學的變化に基き、且、營養的刺戟即ち物質代謝上に働く外部的作用に依りて惹起せらるゝものなることを確信し得べし。オストワルトが正當にも指示したる如く『有機體の最も重要なる業蹟は、種々の化學的エネルギーの相互間の變化なり。蓋し彼等が食物として攝取する化學的エネルギーは、一般に直接彼等の目的に使用せらるゝに適せず、爲めに更に加工するを必要とすればなり。各細胞は一

箇の化學研究室にして、其の裡に於て種々の反應が爐もなくレトルトもなく遂行せられ、此の際、最も普通に適用せらるゝ方法は、恐らく有用なる反應の接觸的促進と不必要なる反應の接觸的阻滯となるべし。總ての有機體中に此の種の酵素必ず存在するは、此の事實を證するものなり、『自然哲學』第三六六頁。此の際最も重要なるは、記憶にして、實に余がヘリングと同じく總ての生活物質の普遍なる性質と解釋するものなり。而してこは『生物内に於ける其の一定せる過程に依りて作用を其の後に殘し、此の過程の反復を促進せり』。余はオストワルトの如く、實に次の如き見解を懷く。即ち『此の性質の價値は、如何に高く評價するも猶其の足らざるを覺ゆ。こは其の更に一般的なる形式に於て適應と遺傳とを成就し、其の最も高き發達に於ては、意識ある記憶を完成す』、『自然哲學』第三六七頁、又リヒャルト・ゼーモンの重要なる近著『ムネメ』を參照せよ。意識ある記憶と同じく、一般に意識は、文化民族の精神生活に於て、系統的適應列の長き梯子に於ける最高階段に達し、モネラの適應は其の最低階段に止まる。モネラの中、殊に解剖學的構造を缺けるに拘らず、他の有機體に對し、多様にして重要なる關係

を有する細菌は此等の多方面なる適應がプラスマの習慣及び其の化學的エネルギイ即ち其の見るべからざる分子構造に基くことを示すものなり。此の點に關しても、モネラは有機體と無機物との直接なる連絡を媒介するものにして、『心靈を有する』生物と所謂『生命なき自然物體』との間に存在すと思はるゝ間隙を充たすものなり。

無機物の慣熟インテリジェンス 廣く行はるゝ解釋に従へば習慣ハビットは、純粹なる生物學的過程なれども、無機自然の領域に於ても亦、廣き意味に於て此の概念に適合すべき過程は存するなり。之に對しオストワルトOstwald『自然哲學』第三六九頁は、次の如き例を引證せり。『稀薄なる硝酸の同量を二箇の試験管に取り、一方に少量の金屬銅を溶解せしむる時は、之に依りて其の硝酸は二度目に加ふる銅片を他の變化せしむるに殘れる硝酸よりも早く溶解せしむるの能力を得るに至るべし。此の現象の原因は、水銀又は銀に硝酸を作用せしめて、同様に觀察せらるゝ現象と同じく、金屬の溶解に際して生ずる窒素の下級酸化物が新鮮なる金屬に對する硝酸の作用を接觸的に促進するに基くなり。之と同様の作用は、酸中に上記の酸化物を少

量輸入する時に得らるべく、此の際、酸は純粹なる物よりも遙に速に作用す。故に此處に反應中、一の接觸的促進を形成することに依り、『慣熟インテリジェンス』が生成せるなり。』吾人は『無機的慣熟』を吾人が習慣及び練習と名付けたる有機的適應と比較し得るのみならず、更に又『模倣イミテーション』及び社會的に結合せる生物に於ける習慣の接觸的傳達に比較するを得べし。

本能 往時、世人は、本能を以て主として、動物を其の目的に適へる行爲に導く無意識の衝動なりと解釋し、動物の各種類は其の創造に際して、特殊の本能を附與せられたるものなりと假定せり。世人はデューカルトDescartesに従ひ、動物を以て無意識にして感情を有せざる機械なりとし、其の行爲は『神の理性』が彼等に賦與したる一定の形式に於て、必ず確實に生じ來るものなりとせり。此の舊式の本能説は、今日尙二元的形而上學者及び神學者が種々唱導するに拘らず、一元的進化論に依り已に久しく否認せられたり。ラマルク Lamarckは已に本能が主として慣熟と適應とにより成立し、後、遺傳に依り確保せらるゝものなることを主張せり。後ダ Darwin及ビロマネスは、是等の『遺傳的』となりたる習慣ハビットも、亦他の生理學的活動

と等しく變異の法則に支配せらるゝことを指示せり。されど此の説は、ウアイスマンの『生殖質の説』と一致せざるが故に、ウアイスマンは、近時其の進化論講話第二十三に於て、此の假説及び一般に『官能的變異の遺傳の臆説』を否認せんと努めたり。エルンスト・ハインリッヒ・ツィーゲレルは、近來一九〇四年『本能の概念の過去及び現在』を精密に分析し、『總ての本能は全然淘汰に依りて成立し、其の根柢は、個體生活の練習に存せずして生殖質の變異に存す』とのウアイスマンの見解に贊せり。されど此の『生殖質の變異』の原因は、直接及び間接なる適應に存せずして、果して何處に存すべきぞ。余の確信する所に據れば、之と正反對に注目すべき遺傳の現象は、ラマルク及びダーウインの主張と全く同一の意義に於て、漸進的遺傳に對する決定的の證明を多數に供するものなり。

社會的本能 總ての有機體の大多數は、群居的生活を營み、従つて共通の利害なる帯に依りて互に結合せらるゝものなり。種の生存を決定する總ての關係の中、最も重要なるは箇々の生物を其の種スベツトの他の個體と結合せしむる關係なり。此の事實は、有性生殖の法則よりして多言を俟たずして明らかなるべし。種に

屬する多數の個體が群居的結合を爲すことは、生存競争に於て多大の利益あり。ベルゾーンの成群は、更に高等動物に於ては個體の深甚なる分業と關聯して特別なる意義を有す。節肢動物、蜜蜂、蟻、白蟻の『國家』に於ては、自己保存の欲望は、兩箇の形態、即ちベルゾーンの利己主義及び群體の他愛主義として發現し、人類の國家に於ては、理性が此等の兩衝動の共に正當なることを知れるが爲め、その相反は、益、重要なるものとなれり。社會的習慣は、確乎たる風習となり、其の法則は、亞いで神聖なる義務として教へられ、而して法律制度の基礎を形成するに至りしなり。

本能と風習 多様な心理學的及び社會學的現象を決定する民族風習とは、大部分適應に依りて獲得せられ、遺傳即ち傳承に依りて代々傳へられたる、社會的本能本能に外ならず。昔は動物の本能を其の理學的體制に基ける定着の生活活動と看做し、之に反し人類の風習をば精神的傳來に依りて永續する形而上學的力なりとして、兩種の習慣を區分せんとしたり。されど此の區別は、人類の風習も總ての他の心靈活動と同じく、生理學的に其の腦の體制に基けるものなりと

の現代生理學的認識に依り價值少くなれり。個人的生存要約に對する適應に依りて獲得せられたる箇々の人類の個人的生活習慣は、其の家庭に於て遺傳的となり而して此の家庭の習慣は、民族風習が教會の義務、戒律及び國家の法律より區別せられ難きが如く、民族風習と判然區別し難きものなり。

風習と法律 團體の總ての會員の一風習が重要にして且價值あるものと認められ、其の服従が獎勵せられ、其の侵害の罰せられる、時は、其の風習は進んで法律となるべし。此の事實は、社會的哺乳動物の群(猿類、群棲的肉食獸類、有蹄類)及び社會的鳥類(鷄、鶩、吊筆鳥)の群に於て已に然り。茲に社會的本能の高等なる發達に依りて生じたる法的秩序は、若し二三の勝れたるベルゾーン(年長にして且強壯なる牡が群の指揮者指揮獸)として一種王者的の權力を得、以て善良なる風習即ち法を維持するを得るに至りて、特に自然民族の群と同價たるものなり。此の組織ある群の中、幾多のものは多くの點に於て、家族が箇々分住し、若しくは他の少數の家族と一時粗鬆なる共同生活を營める、かの原人の最下等なる群よりも寧ろ高等なり。比較心理學、民族學、文化史及び歴史以前の研究が第十九世

紀の後半に於て示せる重大なる進歩は、吾人をして法的秩序の最初の聯絡ある中間状態の長き連鎖は、社會を爲す猿猴類及び他の哺乳類より野蠻なる原人に至り、之よりして野蠻人及び文化人に及び、更に高度の發達を遂げたる現代文化民族の『法律學』に至ることを信ぜしむ。

風習と宗教 法律學に於ける法律の如く、宗教の命令も亦、自然民族の遺傳的風習より、從つて更に猿猴類、即ち靈長類の社會的本能より之を誘導することを得べし。吾人總ての祖先たりし先史時代の自然民族間に於て、夙にかの吾人が宗教なる概念の下に總括する精神活動の重大なる領域は發達したり。若し吾人にして、宗教の起原を實驗心理學及び一元的進化學の今日の見地よりして公平に研究せば、吾人は宗教なるものは多系的にして種々異なる起原より生じたるものなることを信ずるに至るべし。即ち祖先崇拜、個性不滅の願望、自然現象の根本的解明及び宇宙觀の必要、各種の迷信、並びに神的立法者の權威に依りて道德律を確定すること等是なり。原人及び野蠻人の空想が宗教的詩を建設せる方向の異なるに從ひ、數百の相異なる宗教形態は生じたるが、生存競争の結

果、残存して現代精神生活の上に少くとも外面上權威を有するものは、是等の中の少数に過ぎず。輒近「假定なき」獨立科學の進歩著しくなれるに従ひ、宗教は益々古き迷信を除去せられ、従つて其の主なる價值は「道德論」の教に置かるゝに至りたり。

風習及び道德（宗教が信者に要求する「神の命令」への服従は、屢々人類社會に依りて低級の社會習慣より生じたる任意的の法律にまでも及ぼされたり。斯くして屢々風習と道德と即ち便宜上の外形と價值大なる内部の道義とは混交せらるゝに至りぬ。善惡、正不正、道德的、不道德的等の概念は、最も任意的なる意義を附せられたり。此の際、當時の社會に行はるゝ觀念に依りて、此の社會に屬する人々の行爲の方法及び行動に加へらるゝ道德的強制は、最も大なる關係あり。縱し高等の教育ある文化人が實際生活の重要な問題に於て明瞭に且、合理的に考ふるとするも、彼は社會を支配する全然、非合理的なる「風習」に従はざるべからず。實際文化生活に於ては、自然に於けるが如く、カントの明らかに要求したる彼の實踐理性が理論的純粹理性よりも優位を占むるものなり。

風習と流行 人類の實際生活に於ける風習の主權は、單に社會的習慣の權威に依るのみならずして、又、淘汰の力にも依るものなり。動植物の種の成立に際し、自然淘汰は種の形態の比較的不變なる原因なるが如く、又、民族生活に於ける鞏固なる風習及び習慣の形成に強く作用するものなり。此の際、模倣的適應即ち擬態換言すれば種々なる動物に依りて一定の形態又は習慣の「模倣」即ち眞似せらるゝことは重要なものなりとす。殊に此の模倣は、各種の目に屬する多くの昆蟲、蝶類、甲蟲類、膜翅類等に依りて行はるなり。一定の科に屬する昆蟲類が其の外形、色彩及び斑紋に於て他科の昆蟲と紛らはしきまでに相似する時は、後者と同じく是等外部の特徴に依りて、生存競争上の保護若しくは其の他の利益を受くるに至る。ダーウィン、ウオレス、ウアイスマン、フリッツ・ミューラー、ベリッ及び其の他の人々は、是等の欺瞞的類似が自然淘汰に依りて、如何に説明せらるべきか又そが種の形成に對して、如何に重要なかを示したり。されど之と同様に、一部分は無意識的、一部分は意識的模倣に依りて人類の種々なる道德と生活形態とは生じたり。此の中、實際生活に取りて特に重要なものは、變化する外部の形態

にして、こは人々が流行と稱し、文化生活に於て極めて大なる勢力を有するものなり。『流行猿』なる名稱は、それを科學的意義に用ふれば、決して輕蔑的なる嘲弄語にあらずして、深き二重の意義を有するなり。蓋しこは第一、流行が模倣に依りて生ずることを正當に示し、第二、此の點に於て人類と其の最も近き親類なる猿との間に存する特殊の類似を示すものなればなり。之に對し靈長類の雌雄淘汰は重要な部分を占むるものとす。

流行と雌雄淘汰　ダーウィンが其の名著『人類の起原及び雌雄淘汰』に於て兩性相互間の審美的淘汰に附與したる高き意義は、高等にして美的の感情を有する脊椎動物、殊に羊膜類、哺乳類、鳥類、爬蟲類に於けると等しく、人類にも亦適合す。雄が雌に勝る美しき色彩、斑紋又は特殊の裝飾を有することは、雌がそれ／＼注意深く且、雄を選択すと言ふことに依りてのみ説明せらるべし。斯くて吾人が男子及び雄猿に於て見るが如き、各種の毛髮裝飾、即ち鬚、頭髮、潑刺たる顔色及び唇、耳、鼻等の特殊の形態も説明し得べし。更にコリブリス、極樂鳥、鷄類等に於ける美麗なる雑色の羽翼等も亦然り。されど余は心理學と進化學とに等しく重

要にして且、興味ある此の『雌雄淘汰』を『自然造化史』の第十一講に詳細に論述したれば、茲には之を省略すべし。余は唯、ダーウィン説の此の一説が、一方種の形成に他方、人類の流行の形成に如何に重要なかを指示すれば足れり。實際、後者は一般に行はるゝ風習問題と生理學的に最も密接なる關係を有す。

流行と羞恥感　流行の完成は、文化人に於て美の感覺の發達及び兩性の雌雄淘汰に取りて甚だ重要なのみならず、又、羞恥感及び之に關聯する纖細なる心理學的關係の形成に取りても亦重要なものなり。下等なる原人は、動物及び小兒以上に羞恥感を有せず、彼等は全く裸體の儘にて横行し、犬同様に何等羞恥の痕跡もなくして性的行爲を營む。中等原人の間に出現する衣服の初歩は羞恥感に依りて惹起せらるゝにあらずして、一部分氣候の強迫に依り、極地方に住む民族一部分、自己を飾らんとする虚榮心に依りて生ずるものなり、例へば介殼、木片、花、石等を以て耳、唇、鼻、陰部等を飾るが如し。其の後に至り始めて羞恥感の萌すと共に、葉、帶、前掛、其の他に依りて二三の身體局部を被ふ。多くの民族にありては、先づ生殖部を覆へども、二三の民族に於ては、顔面を覆ふに重きを置く。

今日尙多くの東洋の殊にイスラム教を信ずる國民にありては、顔面個體に對し最も特徴ある身體の部分として、を被ふは婦人の貞操の第一の義務たり。之に反し、身體の他の部分は裸體なるも妨げなし。一般に兩性の美的、心理的關係は、『醇化する』風習の發達するに際して大なる任務を有するものなり。『風習』及び道徳的生活てふ概念は、屢、正常に認めらるゝ性的關係と同一の意義に於て用ひらる。

流行と理性 文明生活の多種多様な關係の發達するに従ひて、一方に於て理性の勢力は益増し、他方に於て、遺傳的傳説及び之と關聯して傳來したる風俗の勢力増大し、兩者の鬭争は、屢、激甚となる。理性は總ての關係を自然に適ひて判斷せんとし、現象の原因を認識し、從つて實際生活を目的に適するが如くに整備せんとす。之に反してかの『神聖なる仕來り』若しくは『善き風俗なる傳説』は、此の關係を祖先の見地より、又彼等の尊敬すべき法則及び宗教的命令の傳來したる見地より觀察し、理性の獨立せる考量及び眞の因果的關係は、其の關知せざる所なり。此の傳説は、各個人の實際生活が民族又は國家傳來の風俗に従はん

ことを求む。之よりして必然的に理性と傳説と科學と宗教との間の永續的鬭争を生じ、今日尙、連續せるものなり。此の際、屢、古き『神聖なる傳説』に代りて任意の新流行即ち其の新しき事又は奇なる事に依りて、人間を惹く一時的の風習の入り來ることあり。されど若し此の新流行にして、相當の熟練と力とを有し、以て出來心に滿てる『輿論』の許可を得る時、或は國家乃至教會の權威に依りて十分に助けらるゝ時、そは屢、茲に放棄せられたる『古き善良なる風習』と同様なる尊敬を博するなり。

儀式と崇拜 現時の最下級なる自然人(例へば猩々に似たるビグマイン、錫蘭のウツダ、中央亞弗利加のアカ)の如きは、其の精神生活に於て彼に最も近き猿類祖先たる類人猿類の上に出づること僅かにして、又、其の生活上の習慣及び道徳に於ても然りとす。彼等の觀念の最大部分は、具體的な感覺的見解より成立せるを以て、彼等の抽象的な概念形成は屢、低き程度に止まるものなり。宗教的觀念に就いては殆ど云ふに足るものなし。然れども已に中等原人に於ては原因を認識せんとする欲求の發生するあり、從つて感覺現象の背後に存する精

神の觀念も亦生ず。此の精神の恐怖及び尊敬は、かの宗教の初まりなる庶物崇拜及び魂魄崇拜に導く。神に仕事すること、即ち崇拜の此の前階に於て、已に之と密接に聯關せる一定の道德を生じ、之に象徴的或は神祕的意義の附せらるるものなり。此の儀式は、高等なる自然民族及び野蠻人間に於て、大なる宗教的祭禮の端緒を爲し、希臘人に依りて「ミステリー」と呼ばれたるものなり。各種の感覺的幻像は、高等なる超感覺的觀念及び迷信と結合す。崇拜と結合する祭禮行列、舞踏、唱歌、各類の犠牲等は、多少神祕的なるものと關係し、從つて「神聖」なるものと認めらる。屢こは感覺の満足に變生し、遂には粗野なる暴行及び厭ふべき饗宴となるなり。

「ミステリー」と「聖式」^{サクラメント} 古代の異教徒及び猶太教徒の宗教的習慣よりして、後に基督教會に於て聖式と稱し、特に崇高にして神聖なりとする崇拜の部分を生じたり。神祕的なる作用に依りて、人類の再生と復活とを齎すとする聖式の奇蹟は、已に教會に於ける最も尊敬せられたる恵みの力となり、神學に於ける最も重要な争論の問題となれり。特にグレゴール大帝が、淨罪火及び供養供物の教

理を輸入して以來然りとす。トーマス・アクィナスに據れば、聖式とは神の神聖なる恵が罪ある人類に注がる、溝渠を爲すものなりと。第十二世紀に於て、其の數は法王に依りて七箇と定められたり。洗禮、晚餐、懺悔、確信式、結婚、僧侶の任命及び最後の油禮式。聖式の外面的なる儀式の切り賣りに於ては、其の迷信的内容は多少看過せらるるを常とすれども、其の神聖なる權威は維持せらるるなり。新教に於ては、宗教改革以來、單に基督自身に依り宗教の根柢者として定められたる二箇の最も重要な儀式を存するのみ、即ち洗禮と聖餐と是なり。

洗禮の聖式^{バプティズム} 基督教の洗禮は、基督より數千年以前已に東方に於ける多くの古代國民並びに希臘人の間に普及したる洗ひ及び淨めの儀式の繼續なり。沐浴の衛生上の價値は、身體の洗清として、其の際、屢、心靈の再生及び精神的洗清の觀念と結合せり。ルーテルに據れば、洗禮は罪よりの宥し、死及び惡魔よりの救濟を行ひ之を信ずる者に永久の幸福を與ふと。かの「原罪」の困難なる教理を建設したるアウグスティヌスは已に小兒の洗禮を以て靈魂の救済に必要なものとなし、爾來之を一般に實行せしめたり。こは其の後、迷信的觀念及び不幸な

る家族關係を多數に生ぜしめたるが、而も今日まで神聖なる儀式たるを失はず。今日尙篤信なる多數の基督教徒等は、洗禮に依りて小兒の不滅の心靈は洗禮の際には猶何等の意識をも有せざるに救はれ、惡魔に奪はれざるやうに保護せられ、罪の淵より解放せらるゝを信ず。福音の記者なる馬可は曰く(第十六章十六節)「信じて洗禮を受くる者は救はれ、信せざる者は罪に墮さる」と。

聖餐の聖式 ルーテルに依りて維持せられたる基督教會の第二の聖式たる聖餐は、福音並びに其の解釋に従へば「我等の爲めに與へられ、我等を罪より救はんが爲めに流されたる我等が主、耶穌基督の眞の體と血とにして我等基督信者は之を麵麩と葡萄酒とに依りて食ひ且飲み以て主を記憶するやう基督自身に依りて定められたるものなり。殊にこは彼の死の前夜、彼の弟子との最後の晩餐に於て踰越節なされたるなり、斯くて基督は、之を猶太人の踰越節と結び着けたるが此の祝に於て家長は、彼が割きたる麵麩と葡萄酒の杯とを一定の祈禱と宗教的儀式との下に家族に分配したるなり。此の踰越節は、元來イスラエルの國民が、埃及奴役を脱したる事並びにそが選ばれたる同盟國民に選定せられた

るを祝するものなり。基督は彼の聖餐を外面的には猶太人の此の傳說的儀式と結合せしむる事に依り、内面的には一方神よりの新しき結合を(彼の贖罪の死に依り鞏固にし、他方には彼の弟子相互間に於ける其の結合の祝を基督教の愛すべき式として、^{コンムニオン}聖餐式又は^{アガペ}愛餐繼續せしめんと欲したるなり。是等儀式の各種の解釋は、其の後、聖餐に於ても、洗禮に於けると等しく、神學者間の最も激烈なる爭論を生ぜしめたり。

化體説 中世紀に於ける聖餐の相異なる見解は、其の後兩箇の宗教改革家ルーテル及びツウイングリの相反に依りて絶頂に達したり。ツウイングリは、自由なる改革教會の建設者として聖餐を單に象徴的行爲なりとし、基督の共同的の記念宴なりとせんと欲したり。之に反しルーテルは、一二一五年、化體説聖餐式中の要素の變化の教理に依り儀式的に確定せられたる神祕的なる不可思議に固着せり。信仰を以て聖餐を食すれば麵麩と葡萄酒とは實際基督の血と肉とに變化せらるべしと。斯くて余が基督教の信仰教育を受け、余が個人として甚だ信仰したる牧師は、一八四八年に於ても尙斯くの如く教へたり。我等信仰に

入れる者にして、若し『眞の信仰』を有したりとせば、初めて聖餐式に列せる日に於て、かの不思議なる變化を實際、肉體的に感覺すべき筈なりしなり。而して余は眞の信仰を有すと正當に意識したりしを以て、余は非常なる注意を以てかの不可思議の生ずるを待ちたり。されど余が此の神聖なる晚餐を初めて味ふに際し、『信仰』の要求したるが如き肉及び血の味にはあらず、麴と葡萄酒との良く知りたる味を感じしかば、心苦しくも興醒めたり。従つて余は自ら僅か十四歳にして已に墮落せる罪人と考へざるを得ず、而して余は、余が兩親よりこは余が『信仰』の足らざるが爲めなりとして、納得せしめらるゝまでには甚だ困難なりき。

贖罪の不可思議　基督教の最も重要な儀式たる聖餐並びに洗禮に於て、其の神祕の本來の中心——同時に全基督教神學の中心——は、贖罪 (Redemption) の概念なりき。信心深き基督教信者は、基督(神人として)永久より生れたるに依り、人間の罪を怒れる神と和合するものにして、基督教の『犠牲の死』は、吾人の罪惡に對する償ひの犠牲なりとす。基督は『神の子として』又、人の子として『將た眞の贖罪者 (Saviour)』として彼自身の犠牲に依り、吾人に『罪の償』を與ふるのみならず、又吾人を

あらゆる『害惡』罪の結果乃至『死及び惡魔』より救済するものなりと謂はる。此の信仰に對する報酬として、永久の生命及び天に於ける永久の幸福とは約束せらる。此の『救済』の生物學的作用並びに贖罪の不可思議の因果的意義に關しては、幾百萬の信心深き基督信者及び神學者は一九〇〇年以來徒に頭を痛めたり。人若し基督教神學の此の主要なる問題を『純粹理性』の見地よりして批判的に研究するときは、此の中には古代猶太の傳説救主の信仰及びプラトインの形而上學(不滅説)政治上の自由の願望、猶太國民の他國の支配より脱せる事及び各種の人類中心的迷信の種々雜多なる色彩を認むべし。

法王崇拜の聖式　現代の歴史的及び人類學的科學が吾人を導きたる法王崇拜即ち法王權論者ウルトラモンダニストの公平なる評價に關しては、余は已に『宇宙の謎』の第十七章に於て愚見を開陳せり。多少なりとも文化史及び文化史中に於ける宗教の變態に就いて知れる者は、法王教が元來純粹なりし基督教の憐むべき戯畫にして、單に基督教の名稱と商號とを有し、其の道德的根本原理に於ては正さに、其の反對と化せることを疑はざるべし。第四世紀より第十六世紀に亘る其の主權の經

過中、法王崇拜は、羅馬加特力の宗教政治の大袈裟なる大伽藍を驚くべき高さに達せしめたるが、其の最も内部の性質に於ては、絶えず基督教の本來の出發點より離れたり。法王崇拜者即ち法王全權論者の目的は、今日猶數千年前と等しく、單に盲信的なる人類を支配し、之より財貨を絞り取らんとするにあるなり。之が爲めには、毀損すべからざる、神聖なる性質を有すとせらるゝ神祕的の聖或は最も勝れたる手段を供す。生誕より墳墓に至るまで、洗禮より最後の洗禮式に至るまで又確信式に於ても懺悔に於ても、信者は單に羅馬教會の從順にして犠牲を辭せざる小兒としてのみ生存の價値あるなり。僧侶任命、即ちオルディナティ、オインの聖式は、唯、僧侶のみが崇高なる靈感を得たる結果として、人類及び神の間の神祕的媒介をなすものなることを彼等に示す。此の聖式と結合せる多くの象徴的習慣は、是等の聖式を神祕の魔力を以て被ひ、其の説明中に理性の來り加はるを遮斷するの用を爲すなり。こは殊に人類の實際生活に於て、最も重要な聖式即ち結婚に就いても然りとす。

結婚の聖式 家族生活が人類生活に於ける社會的及び國家的關係の基礎と

して極めて重要な意義を有する爲め、人類の婚姻を生殖の整頓せられたる形態として生物學的見地より、合理的に觀察するは甚だ重要な事なり。茲に吾人は又總ての社會學、上並びに心理學上の問題に於けると等しく、吾人が現代文化生活の今日の關係を判斷の一般的規準なりとするを避けざるべからず。寧ろ吾人は、特に今日尙野蠻人及び原人の間に存する其の劣等なる前階を比較觀察せざるべからず。茲に公平なる比較に依りて、吾人は直に生殖なるものが純然たる生理的過程にして、其の目的は種の維持に存し、自然人に於ては其の最も近き親類たる類人猿に於けると正しく同様に行はるゝことを知る。加之、多くの高等動物殊に一夫一婦なる哺乳類及び鳥類は、其の婚姻に於て劣等なる原人よりも完全なる精神活動の階級に達せるものなりといふを得べし。即ち其の兩性の優しき心靈的關係、彼等が生める子の共同養育及び一般的家族生活は、高等なる性的及び家族的本能の發達を招致し、而して吾人は之に正しく道德上の性質を與へ得るなり。ウイヘルム・ベルシエは其の著『自然に於ける戀愛生活』(一九〇〇年)に於て、動物界に於て最も注意すべき風習の長き列が生殖の各種の形態

に對する適應と關係して生じたことを説明したり。ウエスターマルクは、其の『人類婚姻の歴史』(一八九三年)に於て、自然民族間の婚姻の粗野にして動物的な形態が、向上して徐々に且、漸次に文化民族間の更に完全にして醇化せる形態となれることを示したり。交接の際に於ける性慾快感の感覺的享樂が同情及び精神的傾倒の醇化せる心理的感情と結合するの大なるに従ひ、後者は益、前者よりも重んぜられ且、醇化せられたる愛情は益、高尚なる心靈的事業、殊に繪畫彫刻、音樂詩歌の豊富なる源泉となるなり。されど最も高度に發達したる文化人に於ても、婚姻其のものは、一の生理的行爲にして、其の最も深き根柢は依然として一般の有機的性慾衝動にあるなり。結婚は人類生活に於ける最も重要な行事たるを以て、已に多くの下等なる自然民族に於ても、之を象徴的儀式及び祝祭的習慣を以て飾りたり。結婚式の種々なる形態は、此の重大なる行爲が人類の想像を刺戟したるの正當なることを證明するものなり。僧侶は夙に結婚の重要なことを認め、之をあらゆる種類の教會的儀式を以て飾り、同時に其の教會の利益の爲めに利用したり。加之、加特力教會は結婚を聖式に進め、之に侵す

べからざる性質を與ふることに依りて、教會の儀式に従つて行はれたる結婚は分離すべからざるものなりと説明せり。此の法王崇拜の醫すべからざる影響、結婚が教會のミステリー及び儀式に隸屬せる事並びに離婚の困難等は、今日尙繼續す。法王廳の勢力の下に立てる獨逸帝國議會が、新しき民法書に離婚を容易ならしめずして、寧ろ之を困難ならしむる箇條を加へたるは實に最近の事なり。之に反し純粹理性は教會權力の強制より結婚を分離せんことを要求し、結婚は相互の愛情、尊敬犠牲に基かざるべからざると同時に亦、社會的同盟條約なりと解釋し、民法結婚として法律の規定に依り、法律上保護せられざるべからざるを求むるなり。されど屢生ずる如く夫婦が結局其の性格を相互に誤解し、互に融合せざる事を知るに於ては、直に彼等の不幸なる同盟を解く自由を有すべきなり。今日尙、行はるゝ強制(即ち之に依りて結婚を聖式なりとし不幸なる結婚を何處までも維持せんとするなり)は、單に不道德なる性的關係及び犯罪を増加せしむるのみ。

野蠻的並びに文化的風習

結婚及び家族生活に於けるが如く、吾人は又今日

多くの他の社会的關係に於ても、純粹理性の自然に適へる要求と現代文化が下等の地位にある文明民族及び一部分古代の野蠻人及び原人より傳來したる傳説的風習との衝突を見るなり。國家及び國民團體の公共生活に於て、此の衝突は家族及び箇々の人類の私的生活に於けるよりも更に著し。後者に於ては基督教の溫和なる教義、同情及び博愛、忍耐及び犠牲等が種々行はれて利益あるに反し、國民及び國家相互の交通に於ては、之を云爲すること能はず、茲には唯、純然たる利己主義の行はるゝを見るのみ。各國民は、好手段若しくは權力を以て他國民の上に利益を得んとし、出來得べくんば之を支配せんとす。而してそれが無効なる時は、戦争てゝ粗暴の力を用ふ。醇化せられたる文化が若干の方向に益發達するに従ひ、あらゆる種類の社会的不幸は益増加す。アレキサンダー・スーザイランドは『歐洲の列強及び其の子孫』(亞米利加合衆國に於ける)を以て下等なる文化民族としたるは正當なり。吾人は一部分尙野蠻人なり。

現時の流行 今日、文化國民の民衆が如何に高等なる文化の理想的狀態及び純粹理性の權力より遠ざかれるかは、『歐羅巴の列強國』(即ちゲルマン種族)獨逸及

び英國)並びに羅馬人(佛蘭西人及び伊太利人)の社会的、法律的、教會的、狀態等を公平に觀察することに依りて之を知り得べし。人若し到る處、傳説及び流行の勢力が、純粹理性の正當にして自然に適へる要求を排斥することを知らんと欲せば、單に議院及び法廷に於ける決定、政府の命令、社會關係等に關する日々の新聞記事を公平に比較すれば足れり。外面上には衣服の形色、其の他の性質を定むる流行の強制に於て最も明らかに現る。世人が常に流行の暴威を慨嘆するも亦故なきにあらず。假令、衣服の新形態が非實際的にして、非合理的に醜く且、又高價なりとも或權力が之を懲通するか、若しくは利益に渴する製造者が蠱惑的なる廣告に依りて、其の承認と其の隨從とを得るときは、廣まり行くなり。吾人は唯、茲に五十年前に於ける婦人の呪はれしクリノリン、二十年前に於ける之より更に惡しきザッテルキッセン鞍布圍及び四十年前に於て『高尚なる風俗』たりし婦人の不行儀にして性慾刺戟を目的とする背部及び胸部の裸出を想起し得るのみ。數百年以來の最惡なる流行の『狭き、ルセット』なり。美術的見地よりすれば厭ふべく、衛生的見地よりすれば健康に有害なること證明せられたり。毎年數

千の婦人は此の尊敬すべき『風俗』の犠牲となり、肝臓病を惱み肺の病の爲めに死亡す。之にも拘らず、人々は尙依然として婦人の身體の砂時計形の美に狂ひ適當なる改良服は、極めて緩漫として進み來るに過ぎず。此の衣服の偉大なる習慣の例は又家政、社會の風習、交際の規則、並びに國家の法律に於ける、無數の流行中に之を見る。純粹理性の自然に適へる要求は、到る處かの傳説の神聖なる風習寧ろ惡習と稱するを可とすを追ひ拂ひつゝ、あれども、そは徐々且漸次的なるに過ぎず。

名譽と風習 外國に於て衣服の誤りたる風習と等しく、内部の社會生活に於て誤れる名譽感は、吾人の甚だ有名なる文明生活を内部より支配するものなり。男子並びに婦人の眞の名譽は、人類内部の道德的尊嚴に存するなり、換言すれば自己が最良の確信に従つて、善及び正なりと認めたる所を爲さんと欲し、又爲すに在つて存し、彼が愛する同胞の外面的認識若しくは便宜的の社會が彼に拂ふ價値なき賞讃に存せざるなり。されど吾人は此の點に於て、悲しくも尙多く下級なる文化人或は粗笨なる野蠻人の愚かなる臆斷に囚はれたるものなるを自

白せざるべからず。こは例へば吾人の『修養ある社會』に行はるゝ誤れる名譽の概念の明らかに示す所なり。若し或士官若しくは士官學校生徒が無分別なる取り扱ひ、若しくは不都合なる言語を以て侮辱せられたるときは、相手が決して惡意を以て爲したるにあらずとするも、此の侮辱を相手の血を以て洗ひ落す義務を有するなり。斯くて獨逸に於ては、決闘なる野蠻的惡風が今日尙存在し、其の國法に明らかに違反せるに拘らず、多くの君主及び勢力大なる官吏に依りて獎勵せらる。此の點に於て獨逸は他の文化國の後に立てり。吾人が大學に於てあらゆる種類の時間の勞費と亂暴とを招致するメンゾールを保護することも、亦決闘の中世紀的惡風に對する傾向を増進せしむるなり。決闘は多くの點よりして憎むべきものなるは、純粹理性の要求する所なれど、而も此の要求は常に無効に終るなり。即ち之を以て『神の判斷』なりとするは、單に粗野なる信仰に於て認めらるゝに過ぎず。而して機會は屢、罪なき者を殺し、罪ある者に勝を與ふ。決闘者の一方が他方を殺し、又は重傷を負はしむることに依りて、名譽の毀損が如何に醫せらるべきか、理性の解釋に苦しむ所なり。其の他決闘は粗暴なる復

警の行爲として基督教の優しき同胞の愛に反すると等しく、法律の概念に悖るものなり。全家族の幸福は、拳銃の一弾又は太刀の切尖に依りて破壊せらるれども、而もこは偶然の支配する所なり。而も專制的なる風習は、此の法律に違反する殺人を希望す。而して此の殺人者が數ヶ月の輕禁錮を申し渡さるゝや、通常誤れる名譽の概念より決闘に賛成し、之を保護する王侯に依頼して赦免せらるゝなり。

風習と惡風 名譽及び風習の誤れる概念に於けるが如く、現代文化社會の多くの他の關係に於ても亦社會的習慣の巨大なる勢力を見る。多くの尊敬すべき習慣と「醇良なる風習」とは、單に野蠻の原始時代の稍改良せられたる殘物にして、多くの尊敬せられたる風習は、純粹理性の見地よりすれば有害なる惡風なり。而して是等も亦「適應」なる概念の下に來り、且同一の習慣も或時期に於ては有益善良にして且適切なるも、他の時期に於ては有害凶惡にして且不適當なりと判斷せらるゝが故に、茲にも亦「適應」なる概念を有用なる變化にのみ制限するの不可能なるは明らかなり。こは、教育、訓育、交際、立法等の規範の變化するに就いて

も亦然り。理想の標的は、總て是等の領域に於て「純粹理性」の權力を得るにあれども、而もこは教會派の迷信、政府の保守的傾向の偉大なる保護を受くる流行の偏見及び風習に打ち克つは、單に漸次的にして徐々たるものとす。獨逸帝國に於ては、特に第十九世紀の最後の十年以來、此のこと甚だ盛んにして國民の狀態向上すると共に、外面の光輝及び華麗の益重ぜらるゝに至れり。祝辭に於て、祝宴に於て、觀兵式に於ては、光り輝く空なる外面に重きを置き、之に反して内部の價値は重んぜらるゝこと少し。幾百萬馬克は單に變化常なき制服の飾に浪費せらるれども、こは國民の防禦に對しては價値少し。「神の畏れ」なる外套を以て飾る此のビザンティン的惡風の下に、實際的唯物論は榮え、同時に純粹一元論は理論的唯物論として恐怖せらるゝなり。

風習の系統發生學 吾人若し現代の一元的科學が道德の起原並びに發達に關し、吾人に教ふる所を總て簡單に包括せば、略次の如き系統發生的階段を見るべし。(一)各種の生存要約に適應して、最古の有機體なる原生的モネラの簡單なるプラスマは若干の變化を受けたり。(二)生活プラスマは此の影響に對して反

應し又此の反應が繰り返さるゝことに依り、こは或無機化學作用の接觸作用に於ける如く習慣となりたり。(三)此の習慣は、單細胞生物にありては慣されたる印象の細胞核カオソリスに固定する事に依り遺傳的となりたり。(四)此の遺傳的移行は、多くの世代の間繼續し、累積的適應に依りて鞏固となり、本能となるに至れり。(五)已に原生々物の細胞群落群生原生植物及び原生動物の細胞聯合に於て、細胞の聯合に依り『社會的本能』を生じたり。(六)個性保存慾及び社會保存慾即ち利己主義と愛他主義との相反は、動物界に於ては精神活動及び社會生活の完成大なるに従ひて、益甚だしきを加ふ。(七)高等なる社會動物に於ては、斯くの如くにして一定の風習を生じ、而して社會が之に従ふ事を要求し(獸群、鳥群、國民之に違反せる事を罰する時は、權利及び義務となる。(八)其の最下等なる状態にありて、猶何等の宗教を有せざる野生の自然人にありては、其の道德的關係に於て、高等なる社會動物と異なる所なく行動す。(九)高等なる自然民族は、宗教的觀念を得、其の迷信的風習(庶物崇拜、及び魂魄崇拜)を倫理的原則と結合し、實驗的の道德律を宗教的戒律に變じたり。(一〇)野蠻人及び更に文明人に於ては、かの遺傳的宗教的道

徳性の概念を聯合せしむる事に依りて、一定の道德律を生じたり。(二)高等なる文明民族及び下等なる文化民族に於ては、教會は宗教的戒律を握り、法律學は常に一定の束縛的形態に於て法律的規則を司る。然れども向上的理性も尙屢、教會及び國家の權力に従はしめらる。(三)高等文化民族に於ては、純粹理性は愈實際生活に勢力を振ひ、傳説の權威を追ひ退け、生物學的認識の基礎に立ちて、自然に適へる道德學即ち一元倫理學は發達す。

第十八表

一元的及び二元的道德論の相反

一元的倫理學(理學的道德)

- 一 人類の風習は、其の哺乳動物の祖先の社會的習慣と本能とより高き發達に依りて成立したる自然的起原のものなり。
- 二 故に道德律は、實際的基礎の上に立ち、後天的に發達したるものにして、實體界の生理學的生産物なり。
- 三 無上命法(カント及び其の學徒の)は、高き文化人の理性の偏したる内省的分折より抽象せられたる維持し難き獨斷なり。自然人に於ては義務と良心とは全然異なれり。
- 四 故に善惡の概念は關係的にして、大部分唯、便宜的なり、而して教育の程度と時代の嗜好とに隸屬す。
- 五 粗野なる自然人の^{下等道德は}、吾人が原人祖先の原始

二元的倫理學(形而上學的道德)

- 一 人類の風習は^{神的戒律若しくは無上命法に依りて}、絕對的に決定せられたる超自然的のものなり。
- 二 故に道德律は、先天的と認むべく後天的に發達したるものにあらず。實に精神界の賜物なり(「^{神の戒律}」)。
- 三 無上命法(カント及びカント崇拜者の)は一般規準として、絕對的の價値を有す。且こは實際理性の生産物として、總ての人間は之を所有し、全く人類に特異なるものなり。
- 四 故に善惡の概念は絕對的にして、決して便宜的のものにあらず。而して移り變る文化の狀態と教育の程度とに左右せらるゝものにあらず。
- 五 粗野なる自然人の^{下等道德は}天國の人類(「^{罪の墮落}」

- 的風習の遺跡物なりと判斷すべきものなり(進歩的倫理學)。
- 六 罪惡は^{そが、便宜的戒律を故意に唯、社會及び之に屬する個人との福趾と正常なる狀態とを害する時に限り罰せらるべきなり。}唯、合理的改善に依る「^{罪の救濟}」はあれども、決して「^{罪の赦し}」はあることなし。

- 七 人類の風習は、高等脊椎動物の社會的本能より當達し且、自由意志は總ての脊椎動物に存在せざるが故に、從つて倫理學は^{限定せらる}。

以前)が有せし本來の純粹なる風習の墮落せるものと判斷すべきなり(後退的倫理學)。

- 六 罪は^{神の戒律の故意なる違反にして、そが遺傳(此の世の罪)に基くにせよ、或は適應(習慣)に基くにもせよ、同様に無條件に罰すべきものなり。}されど罪は「^{救ひ}」に依りて贖はれ、而して後、教會(神的力量として)に依りて「^{赦さる}」。

- 七 人類の風習は高等脊椎動物の社會的本能とは絕對的に異なり、自由意志に歸せらるべきものなるが故に、倫理學も亦、限定せらるゝことなし。

第十九章 一元論

實體界と精神界 實在論と唯心論 デイテとシルレル 反カント 物質の三位一體

『カントに於けるは猶、歳の市に於けるが如し。此處にあらゆるものを購入するを得。意志の非自由もあれば、意志の自由もあり。唯心論もあれば唯心論の排斥もあり。無神論もあれば又、愛に富める神もあるなり。——恰も手品師の空なる帽子に於けるが如く、カントは義務なる概念よりして、神、自由、不滅を引き出だして讀者を驚倒せしめたり。勿論、斯く道ならず生れたるカント哲學の此の混血兒は、公然、白晝の光に出づべからず。是等三者は、實際存在するや否やをも自ら知らざるものにして、其の存在を自ら恥づべし。然れども彼等は、神と人間とに取りて特に深切にして快きものなるが故に存在せざるべからざるなりと。——カントは其の生活に於ては尊ぶべくも、其の哲學に於ては不透明にして尊むべからず。』

ポール・レル（一九〇三年）

カント 第一世及び第二世の二元的宇宙觀 彼の二律背反 宇宙學的二元論 二箇の宇宙 實體界と精神界 眞理と詩 ゲーテとシルレル 實在論と唯心論 反カント 物質の法則 物質の屬性 感覺的エネルギー 受働性及び活動性 エネルギイ 物質の三位一體 物質、力及び感覺 感覺の不滅 心と物 原理の調和

哲學史は吾人に教ふるに思考する人類の精神が已に二千年以上の昔に於て、種々なる方法に依り、眞理の認識に努力したることを以てす。されど此の思想の結果、多數の哲學者の系統中に於て、甚だ多種多様な表現を得たりと雖、而も吾人は高き一般の見地よりして、總ての相異なる系統を兩箇の相對する列に分つ事を得。即ち一元論を一元的哲學として、二元論を二元的宇宙觀として分ち得べし。一元論の著名なる模範的代表者は、ルークレティウス及びスピノーザにして、二元論の指導的主張者は、プラトーン及びデカルトなり。此等兩方向の終始一貫せる思考家以外に尙、兩方向の間に動搖し、或は其の生涯の各時期に於て、相反對したる考を代表したる多數の哲學者あり。されど此等の矛盾は、之を主張する思考家の確信が個人的二元論なることを現すものにして、其の最も

興味ある例をインマヌエル・カントとなす。批判哲學に於ける彼の系統は、今日尙最大の勢力を有し、余は『宇宙の謎』並びに『生命の不可思議』の重要なる問題に於て余が一元的確信をカントの二元的見解と對せしむるの必要ありしを以て、此の相反を此處に再び明らかにし、且、設立するの適切なるを見る。尙余は拙著『宇宙の謎』の惹起したる多數の反對文書中、最も有力なるもの、一にしてキールの形而上學者エーリッヒ・アディクスの著書が『カント對ヘッゲル、認識論對自然科學的獨斷說』(伯林、一九〇一年出版)なる表題を有するを以て、一層此の義務あるを感ずるなり。

兩カント 余が一九〇三年、『宇宙の謎』の跋として公表したる『純粹理性の信仰告白』中に余はアディクス及び他のカントの二元論の防衛者に對して、卒直に『一元的自然哲學者たるカントの偉大なる發展的思想が神祕說に味方し、而して此の神祕說は其の後二元的の形而上學者となりしカントが其の全認識論の基礎と爲し、今日尙最高の尊敬を博せるものなることを示したり。吾人は彼の教義を考ふるに方り、先づ問はざるべからざるは、そが何れのカントを意味せるかは

なり。即ち一元的宇宙創造說の建設者及び純粹理性の批判的建設者なるカント第一世なるか、或は判斷力に關する二元的批判の論者にして、實踐理性の獨斷的發見者たるカント第二世なるかはなり。カント第一世は、ニュートンの根本法則に従つて、全宇宙の編成並びに其の機械的基源を主張し、機制說のみが總ての現象の現實的説明を有すとす定理を設定したり。之に反してカント第二世は、機制論の原理は事物を自然の目的として説明するに際し、目的論的原理に必然、従はざるべからざることを主張せり。批判的自然哲學者たるカント第一世は、形而上學の三箇の中心獨斷即ち神、自由及び不滅が純粹理性と相容れざるものにして、證明すべからざることを斷乎として證明したり。之に反し、獨斷的信仰の英雄たるカント第二世は、此の神祕的幻影は實踐理性の缺くべからざる公準なることを證したり。此の二箇の調和すべからざる原理の間、即ち理論的純粹認識と實踐的信仰箇條との間に於ける深刻なる相反は、カントの長き全思考事業を通じて、終に平均に達することなかりき。此の相反は、殊に進化論に對するカントの位置に就いて、最大なる意義を有することを、余は已に拙著『自然造化

史』の第一版一八六八年出版第五講に示したり。其の他のカントの兩宇宙觀に於ける根本的矛盾は、已に屢説明せられ、彼の超絶的唯心論のあらゆる公平なる批評者に依りて認められたり。最近特にポールレーは、其の『批判哲學』一九〇三年に於てそれを甚だ明らかに説明したり。従つて吾人は是等の事實に就いて贅言するを要せざれども、尙其の原因に就いては少しく問ふ所なかるべからず。

カントの二律背反 カントの如き慧眼にして包括力ある思想家は、勿論其の二元的哲學の深刻なる矛盾を良く自覺し居たり。彼は之を彼が二律相反の教義を以て説かんと試み、主張して曰く『理論的純粹理性は、自然現象の全體を總和トータル即ち自己の裡に限られたる全體として思考せんとする時は、自家撞着に陥るものなり』と。統一あり完全なる宇宙觀を得んとする終始一貫せる努力に際しては、常に斯くの如き不可解の二律相反を生ずるものにして、此の内的に相矛盾する定理は、同様に良好なる理性の基礎に立ちて、説明することを得るなり。斯くて物理及び化學は、物質が其の最後の最も簡單なる原子より成立せざるべからざることを主張し、之に反して論理學は物質が無限に分たれざるべからざる事

を主張す。一見解に據れば、時間と空間とは、境界なく無限なるが他の見解に據れば、是等は有限にして境界を有す。カントは此の矛盾を其の超絶的唯心論、即ち事物と其の關係とは、單に吾人が想像裡に存し、其の本性は認識すべからずとの假定を以て解決せんと試みたり。斯くて彼は『批判』として崇拜せらるゝ、誤りたる認識説に達したるが、こは實際、獨斷説の新しき形態たるに過ぎず。二律背反は、之に依りて何等説明せらるゝことなく、單に片付けられたるに過ぎず。尙又正アインツァイニツと反ゲゲンとが同等に良く説明し得べしと主張する説も亦、誤れり。

宇宙學的二元論 カントの有名なる青年時代の著述たる『一般博物學及び天空の説』一七五五年は、其の大膽なる根本思想に於て純粹に一元的なり。蓋しこは『全宇宙構造』の變性と器械的起原とをニュートンの根本法則に依りて説明する雄大なる企圖を包含すればなり。此の企圖は、四十年後、始めて佛蘭西の偉大な數學者ラプラスの『宇宙系統の説明』一七九六年に於て嚴密なる數學的基礎を得たり。此の大膽なる一元的思想家は、徹底無神論者にして、ナポレオン第一世に對し、彼が『天體機制』一七九九年に於ては神を容るべき餘地なきことを説明

したり。之に反してカントは、後に至り神の存在に對しては何等合理的證明の存せざるに拘らず、人は道德的基礎よりして神を信ぜざるべからざることを發見せり。彼は又、心靈の不滅及び意志の自由に關しても、同様の主張を爲せり。此等三箇の信仰の對象を假定せんが爲め、彼は遂に一箇特別なる理知世界を構成せり。即ち道德的自覺は、吾人をして吾人の合理的純粹理性は之に關して認め得べき觀念を作ること全然、不可能なるに拘らず、超感覺的宇宙の存在を信ぜざるを得ざらしむ。無上命法其の支持すべからざるものなることは、吾人が已に第十八章に説明せし所なり。は吾人が道德的意識即ち「善惡」の區別を無制限に決定すべきものなりと。彼の倫理的形而上學を更に建設するに際し、カントは明らかに實踐理性は純粹理性に對して優位を占めざるべからず、換言すれば、信仰は知識の上に立たざるべからざることを説明せり。是を以て各神祕的の神學、各非合理的の信仰は、宇宙觀に關係することを得、あらゆる理性的の自然の認識に勝りて無制限の優位を確保せり。

兩箇の宇宙 古代希臘の自然哲學者は、驚くべき程、明瞭に一元的に思考した

るに反し、又アナキシマン드로ス及び其の弟子アナキシメネオスは、紀元前六世紀に於て、宇宙を吾人が今日の萬物有生論的意義に於て、全然統一的に理解したるに反し、其の後、二百年にしてプラトンは始めて二箇の異なる宇宙の二元的觀念を科學的に形成せり。物質界は、實在の吾人が感覺的經驗に訴ふることを得る物質的現象にして、變化し得べく、又、經過し去るものなり。之に對して精神界即ち觀念の世界は存在し、こは唯、思考し得べきものにして、感覺を超越し、理想的にして、又、經過し去ること能はず、又、變化し去ることなきものとす。具體的事物は理學の對稱にして、事物の眞の原始たる永久の觀念の一時の物質的具象たるに過ぎず。之に反して、事物の原始は、經驗に訴ふること能はずして、形而上學の對照たり。人類は又あらゆる事物中、最も完全なるものとして、此等兩箇の相異なる世界に屬し、其の不滅にして不可視なる心靈を藏する肉體のみ死すべく、且、經過し去るなり。永久の觀念は、單に一時物質界、即ち此の地上に宿るものにして、彼等は絶えず彼の世、即ち見るべからざる精神界に棲み、此處には最高の觀念、神若しくは善の觀念として、完全なる統一の下に萬物を支配するなり。人

類の心霊は、自由意志を興へられて、其の三箇の根本能力、即ち思考、勇氣及び渴仰を完成することに依りて三箇の主徳、即ち知慧、勇敢、熟慮を發達せしむべき義務を有す。プラトインの此の根本原理は、彼の弟子アリストテレスが更に系統的に完成したる所にして、こは四百年後に出現したる基督教の根本教義と極めて善く結合し得たるを以て、最も廣き社會に益、一般的に認めらるゝに至れり。下に掲ぐる哲學的宗教的系統の大多數は、同一の二元的徑路を取れるものにして、カントの形而上學も亦、單に其の新しき形式たるに過ぎず。唯此處には、其の獨斷的性質は批判的といふ眩惑的看板の掲げられたるが爲め、覆はれたるに過ぎず。

物質界 (Mundus Sensibilis) 第十九世紀に於ける自然認識の刮目すべき進歩は、吾人に現實界の量るべからざる領域を開きたるが、其の現象は、吾人の感覺的觀察及び吾人のフロネマの理解に達することを得るなり。然れども此等の唯一の事實と雖、非物質世界の存在を指示するものを教へたることなし。寧ろ所謂『彼の世』—プラトインの觀念世界、カントの現智世界—は、純粹の妄想的結構にし

て、單に詩の對象として價值を有するに過ぎざること漸次、明らかとなれり。に物理及び化學は、總ての觀察が達し得べき現象は、物理學的並びに化學的法則に基くこと及び萬事は、單一にして普遍に行はるゝ物質的法則に歸し得べきことを確實に示せり。人類發生學は、人類が漸く第二紀の後期に至りて一列の哺乳類の祖先より發生したることを確信せしめ、比較解剖學及び發生學は、人類の心霊が腦髓の一官能にして、其の意志は自由ならず、其の精神は大腦皮質に於けるフロネマの活動なることを證したり。此の心霊の生理的官能は、其の器官と結合し、器官と共に死滅するものにして、他の哺乳類の心霊と同様に『不滅』にはあらず。最後に現代宇宙學及び宇宙發生學は、個人的の超宇宙的の神の存在及び活動に就いては、一の痕跡をも見出だし能はざること示せり。吾人が科學的認識の到達し得る所は、總て物質界 (Mundus sensibilis) の一部を爲すものなり。

精神界 (Mundus intelligibilis) 精神界即ち超感覺界に關する形而上學的所論に於て、カントは特に此の世界が、經驗に依らずして信仰に依りてのみ、達し得べきものなることを力説せり。吾人の『道德的意識』は、吾人に此の世界の存在を確信せ

しむれども、之に就いて何等かの感覺的見解、或は取り扱ひ得べき想像を爲すことを許さざるなり、之に據れば、『形而上學の三箇の大なる中心神祕』即ち人格的神不滅の心靈、自由の意志は、内容も範圍をも有せざる空なる概念なり、本來、見神者の不明瞭なる夢なり。然れども此の空なる言語を以てしては、何等の捕ふる所なきを以て、多くのカント祖述者及び學徒は、彼の三箇の中心概念に何等かの積極的内容及び範圍を一概ね傳說的神話及び宗教的獨斷に因みて與へんとしたり。單に正統カント派のみならず、シュライデンの如き甚だ批評的なる自然哲學者すら、カント及び其の學徒の『心靈の自由及び神』なる三箇の超自然的觀念を確立したることケブレル、ニュートン及びラブラースが星の運行の法則を確立せると異なる所なしとする獨斷的主張を明らかに代表せり。シュライデンは、此の獨斷的態度に依りて、『新獨逸自然科學の唯物論』を排除したりと誤信せり。之に對して已にランゲは其の名著『唯物論の歴史』第二卷第二頁に於て斯かる獨斷説は、純粹なる理性批判の精神が全然關知せざる所なること並びにカントは彼の三箇の觀念を以て、積極的及び消極的に證明すべからずとなして、實踐理性の領域

に放逐したることを示せり。されどランゲは又更に曰く、『カントはプラトーンが透察するを欲せざりしことを透察せんとするの意なかりき、即ち精神の世界は、詩の世界にして、其の價值と其の尊嚴とは、正に此處に存することを知らざりき』(第二卷第一六頁)と。されど若し此の詩歌的空想の結構にして、『信仰歌』なりとし、吾人は之に就いて何等積極的及び消極的の觀念を作り得べからずとせば、吾人は將に問はんとす、此の建設せられたる精神界は果して真理の認識とは何の交渉する所ありやと。

真理と詩 此の機會に於て、吾人は真理及び詩の領域と觸れたるが故に、吾人は之と同時に、此の兩觀念界が一定の世界觀の構成に對する意義を説明すべし。勿論、吾人人類の知識は限られたるものにして、吾人が真理の認識は、吾人の腦髓及び吾人の感覺器官の生れながらの體制(一列の猿類祖先より遺傳したる)に依りて一定の限界を有するなり。カントは其の批判的認識説に於て、吾人は常に事物の現象のみを認識することを得、彼が『物其物』として表現したる、最も内部なる未知の世界を認識することを得ずと稱したるは至當なり。然れども彼が之

を以て外界の現實なることを疑ひ、外界は單に吾人の想像に於てのみ存在す、換言すれば吾人の生命は夢なりとしたるは不當にして、且、吾人の自然認識を誤らしめたり。吾人が吾人の感覺及び吾人のフロネマの助を以て事物の性質の一部を多少不完全に認識するに過ぎずと謂ふ事實よりして、吾人は其の時間及び空間に於ける存在を疑ふの理由なし。此等は寧ろ吾人に取りて缺くべからざる直觀の形式なり。吾人の理性の因果律的要求は、吾人をして吾人の此の實驗的知識の間に存する間隙を、吾人の想像力を以て補充し、斯くて全體に對する真相に近き觀念を得ざるを得ざらしむ。吾人は此の想像の活動を廣義の詩と稱し、科學的認識の領域に於ては、臆說宗教の領域に於ては信仰と稱するを得べし。唯、此の想像の産物は、常に具體的の形式を取らざるべからず、即ち觀念として現れざるべからざるなり(ドケーゼン「宇宙の謎」第一三六頁)。従つて理想的世界を構成する詩は、決して單に其の存在を假定するのみ(カントの欲する如く)を以て満足すべからず、之に就いて何等かの「觀念」を作らざるべからず。ズウボゾ(前出)が其の無限の形態に於て巧に集聚したるが如き此等の「信仰」の形態は、之が

科學的に得られたる認識と衝突せざる時に於てのみ、宇宙觀に對し理論上價值を有するなり(即ち一時的なれども認容すべき臆說として)。然らざる場合に於ては、實際上、即ち倫理的關係に於て有用なりとも、真理の認識に對しては價値なし。斯くて吾人は詩歌、傳説、神話の高級倫理的殊に教育的意義を認むるものなれども、吾人が真理の探求に際し、經驗的認識に由るよりも優れたる認識を得ること不可能なり。余は個人としてアルバート・ラングが其の「唯物論の歴史」(第二卷第一—六三頁)に於てカントの宇宙觀に對する卓抜なる批判に同意すれども、而も彼が此の際カントの唯心論を實踐的の理性領域より理論的領域に移し、之より導かれたる誤れる認識説を一元論及び實在論と交換したる點に同意する能はず。ラングが「カントは可想界詩の世界として」を斯く理解すべき知覺力を有せざりしにあらざれど、彼の全構成路及び彼の精神生活の根柢となれる時代は、此處に彼をして完全なる破壊を爲す能はざらしめたり。其の思想の偉大なる建設に際し、かの中世紀の唐草模様より脱したる、尊き形態を見出し得ざりし如く、又彼の積極的哲學は完全にして、自由なる形成を得るに至らざりき。

彼の哲學はヤリヌスの顔貌の如く兩時代の境界に立てるなり。——彼自身は、彼が演繹のあらゆる誤謬に拘らず、理想界に於ける偉大なる教師となりたり。就中、シルレルは、其の神の如き精神力を以て彼が教義の最奥に達し、之を煩瑣的の鑛滓より脱せしめたり。——カントは信ぜらるる「精神界は人單に思考し得るのみにして、認め得べからず」と。然れども彼が之に就いて考へたる所は「客觀的現象性」を有せざるべからず。——シルレルは、理智世界を詩人として取り扱ふことに依りて、此の世界を見得べきものとなしたるは至當なり。斯くて彼はプラトーンと同様なる立場に立ち、而してプラトーンは、彼自身の辯證法と矛盾して、其の神話に於て超感覺的のものを感覺的ならしめたるは、是れ其の時、最高事業を成就したるものなり。自由の詩人シルレルは、明らかに自由を、夢の國、影の國に置きたり。蓋し彼の手に依りて夢及び影は理想となりたればなり。——シルレルの詩に於ける唯心論は、カントの實踐的倫理哲學の廣く行はるゝに對し、高き意義を有するを以て、吾人は此處に彼が唯心論的宇宙觀をゲーテの實在論的宇宙觀と比較して論ぜんとす。

ゲーテとシルレル 吾人が古典的獨逸文學時期に於ける此の兩箇の偉大なる詩人の宇宙觀に存する根本的相反は、深く彼等の天性に基せるものなり。こゝは極めて屢、且詳細に指示せられ、又同時に此等兩箇の偉大なる精神的英雄の相互を良く補綴することは、甚だ屢、切言せられたるを以て、吾人は茲に唯、簡單に述ぶるを以て足れりとす。ゲーテに關しては、余は已に一八六六年、拙著「一般形態學」に於て、彼が吾人の現代進化論並びに之に基く一元論に對する歴史的意義を説明せんと努めたり。此の偉大なる獨逸の天才は驚くべき程、多方面なるにも拘らず、有機體の形態學的研究に貴重なる歲月を費すの餘裕を有し、且、此の實驗的基礎の上に立ちて、生物學上の包括的學說を建設するを得たるなり。彼の植物の變態及び頭蓋骨の脊椎説は、吾人が彼を以てダーウインの最初にして、且、最も重要な前驅者なりとするを得べし。余が此の關係を「自然造化史」の第四講に於て説明せし時、同時に彼の形態學的研究が進化的觀念を結合して、ゲーテの實在論的宇宙觀に對して有する深き意義を指示したり。此等の研究は、彼をして直接一元論及びスピノーザの一元的汎神論を歎賞するに至らしめたり。シル

レルは此等の研究に對して、深き興味をも透徹せる理解をも有せざりき、彼の唯心論的哲學は、寧ろ彼をしてカントの二元的形而上學を深く研究せしめ、其の三箇の中心神祕なる神、心靈及び自由を認めしむるに至りたり。シルレルもゲーテも共に人類學、及び心理學には根本的知識を有したるも、倫理學的、美學的要素の全然、優勢なるシルレルの超絶的唯心論に對して、彼が軍隊附の外科醫として修業せる解剖學及び生理學上の研究は、殆ど影響を及ぼすことなかりき。之に反し、ゲーテの實驗的實在論に對しては、彼が偶、シュトラースブルクに於て爲せる醫學的研究及び其の後、イェーナ及びウイマールに於て爲したる比較解剖學及び植物學の研究は、最も偉大なる意義を有したりき。

實在論と唯心論 ゲーテとシルレルとの宇宙觀の生物學的根據に於て、甚だしく出現する哲學的相反は、或程度まで、此の獨逸國民の哲學的天才が今日に至るまで尙示す所のヤミヌスの顔貌を再び反映す。此の兩箇の大詩人中、實在論者なるゲーテは、深く物質界の經驗的研究に浸入し、スピノーザと共に宇宙の單一なることを説明せんと試みたり。之に反してシルレルは、主として精神界に

住し、カントと共に其の倫理的理想即ち神、自由及び不滅を「人類の教育」に利用せんと試みたり。此の思想の兩方向は、獨逸の天才—二千年前に於ける希臘の天才の如く—をして精神生活の意義高き多數の想像を作らしめたり。ゲーテは其の生涯に於て、カントが理論的に發見したる所を實際的に實現し、シルレルは之を將來努力すべき目的として表したり。

されどゲーテの二三の言説よりして、彼も亦偶、シルレルの二元論を其の宇宙觀に採用したりと結論するは不當なり。此の點に關してエッセルマンがゲーテとの會話よりして遺したる若干の報告は、之を採用するに方りて非常なる注意を要す。

此の屢、利用せらるゝ文學的典據は、概して醇真なるものにあらず、即ちエッセルマンがゲーテの言と做したる所は全然、彼の品性と矛盾し、且、多少毀損せられたる點あり。然れども之に關し、最近伯林に於ける地位高き演說者が、ゲーテはシルレルと同様に神、自由及び不滅に關する高き理想を救済したるものにして、又之を以て彼が基督教的教會信仰に對する證明を興へたりと誤り傳へたるは、單

に彼等が此の兩詩人の宇宙觀に區別あるを知らざることを示すに過ぎず。ゲーテは自ら明らかに「斷乎たる非基督教徒」なりと言へり。彼がファウスト及びプロメテウス神と宇宙及び其の他、幾百の流麗なる詩中に記したるかの「大なる不信仰者」ゲーテの信仰告白は、純粹なる一元論にして、吾人が唯一の自然に適へりと思はる其の汎神論的傾向は、明瞭なる萬物有生論なり。彼がホルバナー及びカール・ウーグットの偏頗なる唯物論と異なるは、猶、ライブニッツ及びオストウアルトの極端なる物力論と異なるが如し。之に反して、シルレルは、此等の實在論的宇宙觀をば全然、知る所なく、彼の唯心論的感覚は自然を逃れて精神界に入りたり。吾人の理論的萬物有生論が實踐的唯心論を排斥するものにあらざること、ゲーテが其の全生涯を通じて示したる所にして、之に反し位地高き王侯僧侶は、屢理論的唯心論が如何に良く實踐的唯物論、即ち快樂説と結合せしめ得べきかを示したるものなり。

反カント 一九〇四年、文明世界を通じてカントの百年祭は最も仰々しく行はれたり。多くの大學演説及び著作に於て、彼は獨逸の最大なる思想家として

崇められたり。インマヌエル・カントは一八〇四年二月十二日に歿し、チャールズ・ダーウインは、其の後五年にして同月同日を以て生れたり。カントの影響が、獨逸哲學の全形成上に最大の關係を有せしは疑ふべくもあらず。彼の稀代の天才を認むるに吝ならざる人も、彼が二元的宇宙觀の著しき矛盾及び缺點に對しては眼を閉づべきにあらず。加之、現今の自然認識の一元的見地より觀れば、第十九世紀全體に於ける彼の絶大なる識權は正に頽廢のものなり。カントが其の哲學的思索に對し、將た其の深き思考及び複雑なる觀念の形成に對して非凡なる才能を有し、此の天才的素質を其の瑕瑾なき性格及び生涯に於ける曇らざる知慧の感覺と結合せしめたるは、確に眞なりと雖、其の思想に於ては然らざるなり。カントの教育的徑路は、彼をして實際社會の根本的知識及び自然に適へる見解を有する能はざらしめたるは、カント及び之に追隨する哲學學派の不幸なり。彼は一生其の生地ケーニッヒスベルヒの狭き障壁内に蟄居し決して普魯西國境を越えしことなく、嘗て旅行して廣き世界を學びたることもなかりき。自然の研究に於ては、彼は無機界の理學に限り、人類の研究に於ては不滅の心霊

にのみ限りたりき。カントは其の大學教育を終りたる後、二十二歳より三十歳に至るまで九年間、引き續き家庭教師として麵麩を求めざるを得ざりき。是れ實に青年の最も重要な時期にして、此の時こそ大學教育を受けたる後の全生涯に對する個人的、科學的、性格の獨立的發達を決定すべき時なれ。

此の精神的適應の不利益なる外圍の裡にありて、更にカントの性格に深く神祕的特性の加はるあり、こは彼が其の信心深き兩親より傳へられ、最も幼年の頃より嚴格なる宗教教育を受けて益、強められたるものとす。斯くて殊に其の晩年に及んで、三箇の中心神祕に對する信仰益、現れ來りぬ。彼は吾人が此等三箇の神祕に就いて、積極的にも消極的にも、觀念を構成し得ざることを承認しつつ、尙、純粹理性のあらゆる認識よりも、更に優越なる地位を與へたり。然れども若し人が此等三箇の根本的觀念に就き、一般に何等の認め得べき觀念を結合せしめ得ずとせば、如何で神、自由及び不滅に對する信仰は實踐理性の最高標準として全宇宙觀を決定し得んや。

實在論 其の名に背かざる各哲學は、第一、其の思索事業の根柢に對して透明

なる觀念を有し、此の根本概念を一定の見解に結合せざるべからず。従つてカントの後繼者等は、概ね單に彼の處方即ち三箇の中心不可思議を單に信ずるのみを以て満足せず、神、自由及び不滅なる空虚の概念に一定の觀念を附せんと努力したり。是を以て彼等は、宗教の幻影と結合し、現實なる宇宙の認識の領域よりして詩の超絶の世界に踏み込みたり。吾人が實在的宇宙の認識に基く一元的宇宙觀は、此の二元主義を拒み、純粹なる萬物有生論的一元論に向へるなり。

カントの批判 本行はれたる百年祭に現れたる顯著なるカント崇拜は、カントの超絶的唯心論が、現代の一元論的自然哲學の進歩に對して與へたる最大の妨害を知られる多くの自然研究者等に取りて不思議の感ありしなるべし。然れども、こは多くの明瞭なる理由よりして容易に説明せらるべし。第一、茲に根本的に相對抗せる見解の間に於ける内的相反は、最も意味重大なり。蓋し各人はカントの著作よりして、其の確信に照應するものを容易に見出だし得べく、一元的理學者等は、認識し得べき全世界に於て、自然法則は機械的に支配するものなることを知り、二元的形而上學者は、非物質的精神界に於て神の目的が自由

に支配するものなることを認めればなり。醫師及び生理學者等は、カントが其の純粹理性に於て神の存在、心靈の不滅、意志の自由に對し何等の證明をも發見し得ざるを見て満足し、法律家及び神學者等は、カントが其の實踐理性に於て此等形而上學の三箇の大中心獨斷を缺くべからざる公準として確立したりと主張して等しく満足す。カントの宇宙觀に於ける相容れざるの矛盾が「心理學的變態」に依りて一部分説明せらるべきことは、余が已に「宇宙の謎」の第六章に示したる所なり。

然れどもカントの哲學に於て、終始存在する此の絶對的矛盾は、最も廣き階級に於て、カントの哲學の最も愛せらる所以なり。蓋し宇宙觀を得て喜ぶかの教育ある公衆は、カントの理解し難き「屢恐ろしく曲折せる」著作を原文にて讀むこと稀に、又は之を以て不愉快なりとし、或は其の拔萃を以て或は哲學史の著者よりして、此の「ゲーニヒスベルヒの老人」に於て幸にも全圓周の四分の一、即ち自然の認識と形而上學の三箇の中心獨斷とが圓滿に調和したりとの記載を得て全く満足するなり。又、就中、此等の獨斷を救済せんと主張する「高等官憲」は、そが

眞箇の解明を妨害し且眞乎の獨立せる思考を脅迫するを以て殊にカントの獨斷教を保護するなり。特にこは獨逸聯邦中、二箇の最大にして最勢力ある普魯西及び巴威國の文部省に於て然りとす。彼等は學校を以て教會の權力の下に置かんと欲したり。故に彼等は、學校が將來の國民に一定量の積極的知識を與しめんと欲したり。故に彼等は、學校が將來の國民に一定量の積極的知識を與へんことを望めども、學生等に獨立して思考するやう教ふることを望まざるなり。而して獨逸の大學に於ては、「カントの信仰」は今日尙哲學の研究を始むる入場券たり。然れども此の官僚的カント信仰が、自然に適へる宇宙觀の進歩に及ぼす腐敗的勢力を知らんと欲する者は、宜しくパウレンーが遺したる有名なる著作「哲學」(柏林、一九〇三年出版)に於ける之が破壊的批評を讀むべし。

物質の法則 今日尙、官僚哲學特に獨逸國に於ける講座に勢力を有する二元的見解と根本的に相反して、吾人は吾人の一元的宇宙觀を物質の法則の普遍性の上に立てざるべからず。此の眞の宇宙的法則は其の裡に何等矛盾なくして物理的なる彼のエネルギーの法則、力の不滅、及び化學的なる彼の物質の法則、物

質の不滅を結合す。余は已に『宇宙の謎』の第十二章に於て、此の大なる自然の根本法則に關し余自身の見解を説述したるを以て、余は此處には單に其の普遍性が「力及び物質」即ち「エネルギー」と物質との間に存する關係に就いての特別な見解と相關せざるものなることを言はんと欲す。吾人若し力と物質とを以て普遍的物質の分つべからざる屬性なりと理解せば、吾人はスピノーザ及びゲーテの宇宙觀に於て、吾人が見る如き純粹の一元論に到達せん。然らば吾人は物質なる概念を以てヘルマンクレルの如く「力學說」なる文字を以て換ふるを得べし。されど吾人は現代物理学の力學的物質概念を以て正當と做すべきか、或は最近ヨット・ケ・フォーグトが賢明にも發展したる如きビクノタイク物質概念を以て正當と做すべきかの問題は、以上の事柄とは關係なし（宇宙の謎第十二章參照）。物質の屬性 人類の認識し得べき物質の唯、二箇の屬性、即ち其の分つべからざる根本性質にして之なくんば其の本性の考へ得ざる物としてスピノーザは先づ「擴がり」と「思考」とを提出せり。是れ吾人が現代の語を以てすれば「力」と「物質」となり。蓋し擴がりたる物即ち空間を充たす物は正に物質にして、之に反し、

スピノーザの所謂「思考」は、今日の生理學者が「思想の構成」なる言語の下に解釋する人類のフロネマの腦髓官能にあらざりて、最も廣き意味に於けるエネルギーなること自ら明らかならざらばなり。吾人の萬物有生論的一元論は、此の意味に於て人類の「心」を單にエネルギーの特殊の形態として認むるに反し、現時行はる二元論及び活力説は、カントの識見を味方として、心的及び物理的エネルギーは二箇の根本的に異なる概念にして、前者は非物質的精神界に屬し、後者は物質的の感覺界に屬するものなりと主張す。最近殊にゼント（一八九二年）が發達せしめたる心身平衡論は、此の二元的相反を最も甚だしく切言す。本説はあらゆる心的出來事には何等かの理學的過程は照應すれども、兩者は相互に全く獨立し、其の間に自然的の因果的關係の有するものにあらざることを主張す（宇宙の謎第六章參照）。

感覺する物質 一般に感覺の過程を運動の過程と結合せしむることの困難なるは、此の廣く分布せる二元論に對する最強なる支持たり。即ち此の際、前者はエネルギーの心的形態、後者は其の理學的形態なりと認めらる。外界の刺戟

例へば光線、音波の如きが内部に於ける感覺、即ち視覺、聽覺等に變化するは、一元的生理學に依りては、力の變化の過程、即ち光學的又は音樂的エネルギーが特殊なる「神經エネルギー」に變化するものなりと認めらる。ヨハンネス・ミューラーが設立せし如き感覺神經の「特殊エネルギー」てふ重要な學説は、此の兩界の間に結合の橋を架するものなり。唯、かの感覺を惹起する觀念、即ちかの印象を自覺に齎す思考器官フロネマに於ける中樞作用は、多くは尙理解すべからざる「生命の不可思議」として認めらる。然れども余は已に余が「宇宙の謎」の第十章に於て意識も亦神經エネルギーの特殊なる形態に外ならざることを示さんと試み、最近オストワルトは其の自然哲學に於て、此の考を更に敷衍せり。

感覺エネルギー 一のエネルギー形態が他のエネルギー形態に變化するに際し、又位置のエネルギーが現實のエネルギーに變化するに際して、吾人が觀察する過程は、一般に重學の法則に従ふ。かの二元的形而上學が「機械論的宇宙觀」に反して之に依りて、各運動の内部の原因を發見する能はずとなし、之を「心的力」に求めんとしたるは宜なり。然れども、吾人の一元的確信に據れば、こは何等の

「非物質的力」にあらずして、吾人のブシコーマと稱し、物質の第三の屬性としてエネルギー及び物質マッテリーに對せしむる物質マッテリーの普遍的感覺に基くなり。

物質の三位一體 吾人の一元論をスピノーザの物質の法則と結合せしむる上の困難は、若し吾人にしてエネルギーの觀念を感覺と分ちて重學にのみ限り、運動は之を物質の第三の根本性質なりとして物質マッテリー擴がりたる物及び感覺、思考する物に對せしむるときは、之を排除することを得べし。吾人は又エネルギーの觀念を以て活動エネルギーシヨープンハウエルの意義に於ける「意志」及び受働性エネルギー最廣義に於ける感覺に分つを得べし。現代勢力學があらゆる現象を統合せしむるかのエネルギーは、實にスピノーザの物質説に於ては感覺以外に何等の位置をも有せざるものなり。彼にありては、思考なる即ち精靈精神或は力屬性に於て感覺とエネルギーとは結合せるものなり。余は感覺は運動の如くあらゆる物質と結合し、而して此の物質の三位一體は、吾人が現代の一元論に對して、最も確實なる基礎を與ふるものなりと確信す。従つて此處に余は、下の三箇の根本法則を表式せんとす。(一)力及び感覺なくしては何等の物質マッテリーな

し。(二)物質及び感覺なくしては何等の力なし。(三)物質及び力なくしては何等の感覺なし。全宇宙に於ても、其の微細なる一小部分に於ても、原子に於ても、將た分子に於ても、此の物質の三箇の根本的屬性は結合して離るゝこと能はず。此の見解が吾人の一元論の萬物有生論的系統に對し、根本的に重要なが爲めに、余は再び此の三箇の屬性の各をそれ自身並びに物質の法則と關係して觀察するの適切なるを覺ゆ。

イ)物質 『擴がりある物質』(Extensive)は、無限の空間を満たし、各箇の物體は現實の物質として此の宇宙の一部分を占有す。物質不滅の法則(ラヴェアジエー、一七八九年)は、物質の總和は永久にして不變なることを吾人に知らしむ。こは吾人が化學的原素として區別する質量即ち濃縮せられたる物質(Ponderabile)の總ての種類に就いても亦、エーテル即ち質量を構成する原子及び分子の中間を充たす、かの『緊張したる物質』なる『宇宙エーテル』(即ち所謂 Imponderabile)に就いても同様に眞なり。通常物質を輕視し(同然に之と關係して唯物論を輕蔑するは)之を『精神』に比して劣れりと做すは一方粗雑にして死せる物質てふ習慣的文句を

明らかにして他方、吾人が野蠻なる祖先より得て之を脱却するに困難なる其の根柢固き遺傳的神秘教よりして明らかなり。

(ロ)エネルギー(力)・吾人は動かされたる物質(Dynamis)として、『無限の空間のあらゆる部分』が永久不斷の運動を爲すものなりと想像す。各化學作用、各物理現象は、物質が構成する部分の位置の變化と聯結せるものなり。エネルギー不滅の法則(ロバート・マイヤー、一八四二年)は吾人に教へて曰く、宇宙到る處あらゆる時期に於て活動と、總ての現象を惹起する力即ちエネルギーの和は不變化なりと。各化學的化合物の形成若しくは分解に際し、物質の部分は相互に運動するものにして、こは各機械的、溫熱的、電氣的作用等に於ても亦、然り。此の際生ずる變化は、有機的物體に於ても無機的物體に於けると等しく不斷の力の變化に基き、一形態の力は他形態の力に變化し、此の際嘗て其の總和の最小なる部分と雖、失はるゝことなし。最近此の根本的にして一般に認識せられたる『力の不滅』の法則は、エネルギー不滅の法則或は簡單にエネルギーの原則として表示せられ、之に依り現代の物理學に於て吾人は、力とエネルギーとの概念を更に明確に分

ちたり。今日世人は、通常、エネルギーを以て力と距離との積なりと做す。然れども茲に注意すべきは「エネルギー」なる概念が「物理學的意義に於ける「仕事」と同意義なり」今日尙種々なる意義に用ひらるゝ事にして、こは昔時の力の概念に於けると同様なり。斯くて屢、位置のエネルギーに對して張力テンションなる名稱を用ひ、現實のエネルギーに代へて動力トリブナラフ即ち「活動力」なる名稱を用ふ（宇宙の謎第二六五頁参照）。他の人々は又エネルギーを以て「仕事若しくは仕事により成立し、仕事に變化し得る萬事」と定義し、主情ヴォレンヤ論ヴェントなる特殊の學派は、エネルギーの運動を意志に歸するものなり。已にクルシウスは、一七四四年「意志は宇宙を支配する力なり」と言ひ、斯くてショーペンハウエルは、宇宙（物質）を「意志と現識」と定義せり。

(ハ) 感覺 (Psychonmi) 余は感覺最廣義に於けるを以て物質の第三の屬性と做し、「感覺する物質」を概念上「動かされたる物質」としてのエネルギーより區別せり。之に就いては、余が第十三章に於て、有機界及び無機界に於ける感覺に就いて與へたる説明の参照を乞ふ。余は物質的物質の部分の運動の意識なき感覺に依

りて生ぜらるゝものなりと考へずしては、最も簡單なる化學的及び物理學的作
用をも想像すること能はず。此の意味に於て、斯く化學者は常に「鋭敏なる反應」
なる言語を用ひ、各寫眞師は「鋭敏なる乾板」なる言語を用ふ。親和力即ち化學的
選擇力の概念は、各化學元素が他の元素の質的區別を知覺し、其の相觸るゝや、「快
と不快」とを感覺し、之に依りて一定の運動を成就するに基く。プラスマがあら
ゆる種類の刺戟に對して有する感應性は、世人が高等動物に於て心靈と稱する
ものなるが、そはあらゆる物質の普遍なる刺戟性の高等なる階級に過ぎず。之
に似たる意義に於て、已にエンペドクレース及び汎心論の代表者等は、萬物に「感
覺ドウケンと努力ノトレイブ」とを賦與したり。最近ネーゲリ（一八七七年）は曰く、「若し分子にして感
覺と甚だしく遠ざかれるも尙、之に似たる何物かを所有せりとせば、彼等は牽引
或は排斥、即ち彼等の傾向或は反方向に従ひ得るときは、愉快を感じ、其の反對の運
動を強めらるゝときは、不快を感ぜざるべからず。斯くて文字の示す如き精神
の帶は、あらゆる物質的現象に傳播するものにして、人類の精神は自然の到る處
を活かし動かす精神的作用の最高等なる發達に外ならざるなり」と。此の思想

の豊富にして批判的なる植物學者の見解は、余が已に一八六六年、「一般形態學」に於て發表したる余が萬物有生論の一元的原理と合一す。

感覺の不滅 最も廣義の感覺即ちかのプシコーマ (Psychonema) は、物質の第三の屬性として物質 (Matter) 及びエネルギー (運動すべきもの) と對峙すとせば、吾人は不變の宇宙的法則即ち物質不滅の法則を總ての三箇の屬性と等しく適用せざるべからず。斯くて吾人は、又宇宙に於ける感覺即ち「靈化作用」の量は、永久にして不變なる大さなり、且、感覺の各變化は一の心的形態が他の心的形態に變化するに基くものなることを確信し得べし。吾人若し始めて吾人自身の直接なる感覺及び吾人の思想界より出發して、人類の全精神生活を觀察せば、吾人は其の連続せる發展に於て、到る處かのあらゆる各個體の感覺に其の根柢を有するプシコーマの不變なるを見るべし。人類の腦髓に於けるブラスマ作業の此の最高等なる發展は、下等動物の感應官能より初めて發達したるものにして、後者は又、長き一列の發達階級を通じて無機元素の更に簡單なる感應形態と結合し、而して、此の感應形態は化學的親和力として表る。已にアルブレヒト・ラウは、其

の『感覺及び思考』(一八九六年、第三七二頁)に關する名著に於て切言すらく「知覺即ち感覺は、自然界に於て全然一般的の作用なり。斯くて思考自身をも此の一般的過程に歸し得べき希望は與へられたり」と。最近殊にエルンスト・マッハは、彼が『感覺の分析及び物的なる物の心的なる物に對する關係』に於て、「感覺は總ての生じ得べき理學的及び心理學的體驗の共通の要素にして、是等の體驗は、是等の要素が結合の狀を異にし、其の相互に關係するが爲めに生ずるものなり」と言へり。マッハは更に此の主觀的感要素を偏頗に切言して「フェルウォルン・アヴェナリウス及び他の新しき力學者に似たる心理的一元論に達したりと雖、而も彼の宇宙觀の根本性質は、オストワルトの勢力學と同様に全然一元的なり。

心と物 吾人は感覺を以て物質の不變的の根本性質なりとして、力並びに空間を充足する物即ち物質と對立せしむることに依りて一元論の純粹なる三位一體に達し、斯くて二元論が、心的の物と物的の物と又、物質的の實體界と非物質的の精神界との間に頑強に存在すと稱する相反を満足に平均せしめ得るなり。一元論の三箇の主なる方向中、唯物論は物質なる屬性を偏頗に主張するものに

して、宇宙に於ける總ての現象を分子の重學即ち最小なる物體部分の運動に歸せんとするものなり。之と同様に唯心論は、スピリトゥアリズム、エネルギーなる屬性のみを偏頗に主張するものにして、此の説は總ての現象を運動する力、即ちエネルギーの形態よりして説明するか(勢力學)或は是等の現象を心的官能即ち感覺若しくは心靈活動にのみ歸せんとす(汎心論)。吾人のヒロニスムス即ち萬物有生論は、極端なる此等兩方向の誤謬を避け、スピノーザ及びゲーテの意義に於て、心的なる物と物的なる物とが同一なることを主張す。本説は『思考』即ちエネルギーなる屬性を二箇の對立せる屬性即ち感覺(Psychoma)と運動(Mechanik)とに分つことに依りて、此の古き『同一論』の困難に打ち克てるものなり。

第十九表

一元論及び二元論より觀たる三位一體

一 物質の一元論的三位一體

汎神論的哲學

(實在論的科學の一般的结果として)。

宇宙と神とは離すべからず(神の精神は萬物に活く)宇宙は客觀にして同時に主觀たり。

物質(宇宙)は、無限の宇宙的本體として、全く不變的に三箇の分離し難く、人類に認め得べき根本性質(屬性)を有す。

一 物質

擴がりを有し且空間を充たす物質(唯物論に依りて偏頗に主張せらる。ホールバツハ、ビュヒナー)

二 エネルギー(力)

動き得べき或は動かされたる物質。
位置及び現實のエネルギー、張力及び動力(勢力學に依りて)

二 神の二元論三位一體

唯神論的哲學

(唯心論的信仰の一般的结果として)。

宇宙と神とは主觀と客觀として相分れたり。(夜の精神は作品として宇宙を作り、之を維持す)。

神は無限の宇宙の本體として三箇の異なる、ベルゾーニ、となりて人類に現る(人類は第三紀の後期に猿類より發達したる地上の哺乳動物なり)。

一 神創造者

基督教の教理及び福音の聲言に従へば、基督の第一の父なり(印度のトリムルテのブラーマは宇宙の創造者なり)。

二 神教精神

基督教教理の『聖靈』にして福音の誓言に據れば、基督の第二の父なり(印度のトリムルテのウイシュヌ Wischnu)

偏頗に切言せらる。ライブニッツ、オストワルト)。

三 ブシコーマ(感覺)

感覺あり刺戟せられ得べき物質(汎心論の意味に於ける
ビレンズブスタツ「心靈物質」ネーゲリ、ラウ)。

(肉感論ホイエルバッハ、コンデアアック及び心的一元論エ
ルンスト・マッハ、マツクス・フェルワオルンに依りて偏頗に
主張せらる)。

にして宇宙の維持者なり)。

三 神の子

基督教の教理に據れば、『ナザレの耶蘇』にして前の兩神
並びに『處女』マリアの子なり(印度のトリムルテのシャア
第IIIミにして宇宙破壊者なり)。

第二十表

インマヌエル・カントの二律背反

一 カント第一世即ち物理學者にして一元論者

(「萬物の分析者たるカント」)。

一世には唯一の宇宙存するのみにして、此の裡に於ては
萬事は引力の法則に於けると同じく嚴格なる法則に従つ
て生ず。其の『最後の根柢』は、何處に於ても認識するを
得ず。

二 全宇宙に於ては、普遍的に嚴格なる自然律の行はれ、何
處に於ても、絶對的に自由なる意志の作用することなし。

三 『經驗に於てのみ眞理は存す。』「物質の内部の物、即
ち物其物は、單純なる氣紛れに過ぎず、一の消極的にして
内容なき限界概念なり。」

四 非物質的の精神界は、吾人の經驗に全く達すること能
はず。想像より生じたる空中樓閣なり。

五 神の存在に關し積極的にして純粹理性に達し得べき何

二 カント第二世即ち形而上學者にして二元論者

(「萬物を覆ひ隠すカント」)。

一世には二箇の宇宙存在し、一は認識し得べき自然(Mun-
dus Sensibilis)にして他は認識し得べからざる精神界な
り(Mundus intelligibilis—*Ipseus a non facendo*)。

二 自然に於ては絶對的な必然支配し、精神界に於ては
絶對自由支配す。

三 自然は經驗に依りて單に現象として認め得べし。其の
内部の固有の本性を爲す物其物は、吾人に隠れたる所に
して、又認め得べからず。

四 信仰(吾人の衷に於ける道德的意識)は、非物質的なる
精神界の存在を吾人に確信せしむ。

五 神に就いて吾人は積極的にも消極的にも觀念を作るこ

- 等の證明存することなし。内容空虚なる神の信仰は（一のあり得べき觀念なくして）單純なる詩なり。
- 六 心靈の不滅に關し積極的にして純粹理性に可能なる何等の證明存することなし。
- 七 意志の自由に關し積極的にして純粹理性に可能なる何等の證明存することなし。無上命法は一の獨斷なり。
- 八 余は知識（批判的理性の）に場所を與へん爲め、信仰（獨斷）を棄てざるべからず。

カント第一世即ち純粹理性を有する無神論者

- と能はず。然れども吾人は其の存在を信ぜざるべからず（一定の理性的觀念なく）。
- 六 心靈は不滅ならざるべからず。是れ吾人の意識（豫想）の吾人に確信せしむる所なればなり。
- 七 吾人の裏に於ける道德律（無上命法）は、吾人をして意志の自由を確信せしむ。
- 八 余は信仰（實踐理性）に地位を與へんが爲め知識（純粹理性）を棄てざるべからず。

カント第二世即ち純粹非理性を有する有神論者

第二十章 一元論

普遍的科學としての哲學 二元論及び一元論より觀たる純正科學と應用科學

自然の統一

汝は僧侶の口よりして説話を聞く。
 そは混亂して雜色なる夢幻の像なり。
 かの麗しき傳説は粉々となりて沈み行き、
 眞理は清く輝きて現れ出でん。

汝がかの日輪が蒼空に懸るを見るや。
 星辰は永久に彼の周圍を廻るを見るや。
 彼は永劫より空間に光放てるもの、
 其の王國には、暗黒の住するを得べきか。

汝は太陽の光を逃るとも、
 いかで之を滅するを得ん。然り、そは不可能なり。

太陽の光の夜を破りて清く輝くがごと、
眞理は其の高き勝利に達せざる能はず。

嗚呼、かの詩の美しき言語を信ずるなかれ。

汝は眞箇の幸福を決して茲に見出だす能はず。

汝はかの尊き人々が偉大なる眞理に身を捧ぐる、

傲然たる列次の中に、之を見出だすべし。

宇宙が構成せらるゝ處は唯一あるのみ。

汝の眼の見る總ても亦一あるのみ。

而して吾人が死せる物質に精神をも認むとせば、

物質と精神とは永久に一なりと謂ふべし。

ユリウス・ゴンベルツ(チューリッヒ、一九〇四年)

一元論の正當なる所以 純正科學と應用科學(理論的理性と實踐的理性) 純正(理
論)科學—物理學、化學、數學、天文學、地質學—生物學、人類學、心理學、語學、歴史 應用(實
踐)科學—醫學、精神病學、衛生學、工藝學、教育學、倫理學、社會學、政治學、法律學、神學 科
學の二律背反 合理的及び獨斷的原理 科學の相關 分科大學 教授の改革
理想の世界 一元論の調和

今や吾人は、『生命の不可思議』なる廣き領域を通ずる長き道路の終りに達した
るが、此處に吾人は、吾人が經過したる道程に一般的の回顧を與へ、以て吾人が一
元哲學に依りて是等の認識の那邊に達せるかの問題に答ふる所あらんとす。
此の際、吾人は再び吾人が統一ある宇宙觀の正當なる所以を證明し、同時に生物
學が他の科學に對する關係を明らかにせざるべからず。更に此の一般的結論
を爲すべき必要は、『生命の不可思議』に關する本書は、一八九九年、拙著『宇宙の謎』に
關する必要缺くべからざる補冊たるのみならず、又余が最後の哲學的事業たる
を以てなり。今や余が第七十歳の終りに方り、『宇宙の謎』に存する二三の重要な
る間隙を充たし、同書に對して加へられたる最も激烈なる攻撃を排し、以て余が
半世紀以來、其の建設に努力したる統一ある宇宙觀を出來得る限り終結せしめ
んと欲するなり。

一元論の正當なる所以 余は讀者等に對し、余と共に一元的哲學の廣き領域
を再び踏まんことを請ふに就いて、余は此處に到る狭き入門の謙讓なる指導者
として之に對し、科學的に正當なる所以を證明し、或程度まで眞理の研究に對す

る入場券を指示せざるべからず。蓋し今日猶獨逸の大學を支配する學校哲學は、疾視以て己が門檻を防ぎ、殊に現代生物學に對して其の入門を拒まんとすればなり。吾人の官僚的獨逸哲學は、尙大部分中世紀の傳說的形而上學及びカントの二元論に囚はれ、其の明らかなる獨斷的性質を批判なりとして賞讃する故なり。余はイェーナに於ける動物學の正教授たりし四十年間に、余はドクトル教授等の數百回の試験に列するの機會を有したり。此の際哲學の最も著名にして一般に認められたる代表者等は、試験を行ひたるが、余は殆ど常に其の主要なる點は巧みなる概念の輕業及び内觀的自己省察或は新舊の哲學の主として二元的なる首領等（フレイム）が、莫大なる學術的文獻に加へたる種々雜多なる誤謬を嚴密に知る點に置かれたることを確信し得たり。されどカントの認識論は最も重要な根柢として、重きを置かるゝものなるが、其の誤謬にして偏狹なる事は、余が第一章及び第十九章に明らかにしたる所なり。心理學に於ては、内觀的方法に基ける二三の精神活動の廣汎なる知識は歡迎せらるれども、之に反し「心靈」の生理學的分析及びフロネマ即ち此の官能を成就する腦髓領域の解剖學的研究は、

周到なる注意を以て回避せらるゝこと比較及び發生學的心靈研究と同様なり。加之、吾人の形而上學者の多くは更に一步を進め、哲學を以て獨立せる専門學科なりとするのみならず、一般の經驗的自然科學とは全然關係なき崇高なる精神科學なりと考ふ。此の考へに對して吾人は「シーペンハウエルの問ふ所を想ひ起さざるを得ず。『世には哲學者たるの特徴あれども、哲學の教授なるものなし』と。余の解釋に従へば、一定の宇宙觀を得んと努むる各教育あり思考力ある人類は、哲學者たり。哲學は『科學中の女王』として、あらゆる學術的研究の一般的結果を己が中に結合し、恰も凹面鏡の如く、其の光線を焦點に集むべき高尚なる任務を有するなり。されど其の際多種多様な形態を取りて現るゝ思想の各種の方向は、總て科學的注意及び討論を受くるの權利あるものにして、こは少數の一元論に於ても、將た又多數の二元論に於ても異なる所なし。余は一元論が科學の主なる若干の領域に於て堅固なる立脚地を得べきや否やを研究するに方りて、吾人は先づ科學を純正理論科學と應用實踐科學とに分たんとす。

純正科學と應用科學 宇宙觀としての純正哲學は、元來其の最近の目的とし

て純粹理性に依れる真理の認識のみを目的とすべきものにして、此の任務は、余が第一章に於て説明せし所の如し。唯此の純粹理論哲學のみが、多くの箇々の科學に於て吾人の實際生活と直接にして、最も重要な關係に入るものにして、應用的の『宇宙の智慧』として人類文化を左右するの意義を有するなり。此の際、科學的に設定せられたる學說の理想的認識に反して、實際生活を現實に進捗せしむること甚だ屢なり。此處に吾人の確信に據れば、純粹なる智識の探求は、應用的生活の智恵よりも勝れたるものなり。此の點に於て、吾人は明らかに實踐理性に優位を與へ、其の純粹なる理論的理性よりも重きを置けるカントとは根本的に相反するものなり。カントの此の誤謬は、國家及び教會の勢力ある權威が熱心に之を抱き、其の助けを藉りて批判的純粹理性の認識に對して、獨斷的實踐理性の信仰箇條に無上の權力を與へんとするが故に、最も不幸なるものなり。

一 一元的物理學 吾人の自然科學者的一元論の見地よりすれば、吾人は最廣義の物理學を根本的科學として、總ての他の科學に先んぜしむべきなり。蓋しフィジスなる概念は、ナトゥラと同意義にして、其の本來の純粹なる意義に於ては

認識し得べき全宇宙即ちカントの感覺界(Mundus sensibilis)を包括するものなり。其の超感覺的世界即ち理智世界(Mundus intelligibilis)は、其の本來の定義に據れば、單に信仰の對象にして、知識の對象にはあらず。而してカントの如き斯くも著名なる思考家が、此の兩宇宙を根本的に相分つことに依りて、自身と矛盾に陥りたるは、甚だ注意すべきことなりとす。若し純粹理性に依りて、人類が超自然界を認識すること能はず、且又之に就いて何等積極的及び消極的觀念をも作り得ざること證せられたりとせば、吾人はかの三箇の中心神祕即ち神、自由及び不滅なるもの、住する『彼の世』の超感覺的世界を如何で可想イマージュ即ち認識すと稱するを得んや。Lucius a non lucendo! 斯くて吾人は此の超自然的形而上學的宇宙を信仰と詩歌とに任せて、吾人は吾人が宇宙觀を現實の理學的世界、即ち自然に限るものなり。初め希臘國の古典的古代に理解せられしが如き萬物を包括する自然哲學としての理學の概念は、次第々々に狭めらるゝに至れり。今日、吾人は物理學なる概念中に、主として無機自然の現象に關する學問、觀察及び實驗に依る其の實驗的説明(實驗物理學)及び是等を數學的基礎に立てる普遍的の固き

自然法則に歸する事(理論的若くは數學的物理)を入るゝに至れり。物理學の二箇の主なる領域として、最近質量物理及びエーテル物理の區分を見たり。質量物理とは、質量量り得べき物質即ち固體、液體及び瓦斯體の重學、運動、平衡、靜學及び動學、引力、音聲學、氣象學を論じ、之に反してエーテル物理學は、エーテル量り得べからざる物質としての現象、並びにそれが質量に對する關係(電氣學、化學、電氣學、磁氣學、光學及び熱學)を論ずるものなり(宇宙の謎第十二章、第九三頁)。此の無機的物理學の全領域に於て今日、一元論は一齊に認識せられ、かの二元的の企圖は排除せらるゝに至れり。

二 一元的化學 原子の物理學 今日一元的自然認識及び實際生活に取りて斯くも量るべからざる程、重要なものとなりたる化學の巨大なる領域は、本來物理學の一部に過ぎず。近來の物理學は、物體の物質的差別に關係なく、無機的のエネルギー形態及び其の變化の研究に限られたるに反し、化學は物質の學問として、量り得べき物質の種類、此の質的區別の研究に努むるものなり。「分析術」として化學は總ての量の得べき物體を七〇乃至八〇の元素に分ちたるが、

其の相互間の興味ある關係は、最近元素の週期律に確定せられ、之が一箇の原素(Prohyl)より來ると謂ふことは甚だ事實らしくなれり(ラヂウム及びヘリウム)。元素の分析及び合成に依りて證せられたる如く、化學的化合物に於ける固き關係、特に一八〇八年に發見せられたる整數比例の定律及び倍數比例の定律は、各元素の原子量の實驗的確定を招致し、同時に新しき化學分子説を生ずるに至れり(宇宙の謎第十二章、第二五八頁)。斯くの如き原子の假定(空間を充足し、箇々獨立せる「質量の部分」)其他、人が如何なる性質を之に歸するにもせよ、は、化學に對し缺くべからざる根本的憶説なること、恰も分子の假定が物理學に對するが如し。現代の物力論(ポインティング)勢力學(第九七頁及び第三八〇頁)は、此の憶説を省き、非物質的にして空間を有せざる力點の概念を以て物質的原子に明らかに代へ得べしとするに於て誤謬に陥れるものなり。其他、此の物力論學派に依りても、又かの物質的學派に依りても、化學の全領域部分に於て、一元論は一般に認識せらるるなり。

三 一元的數學 抽象的物理學 現代自然科學は、量及び數に依り、總ての現

象を正確に決定すること即ち總ての一般的認識を數學的に表式したる法則に歸することを以て總ての研究の最後の目的とす。大ラブラースが、全宇宙の系統を數學的に建設してより最近萬物を包括する理想的のラブラース的精神は宇宙の全過去全現在及び全將來を一箇の數學的巨式に縮め得べしとの考を提出するに至れり。カントは、此の過度なる數學の尊重を下の定理に表したり。『あらゆる科學は、數學と相容るゝ範圍に於て正當なり』と。而して彼は此の誤謬に更に第二の誤謬を附加して曰く、『數學的根柢は必然的にして普遍的に行はるるものとして人類の『純粹理性』に先天的に存在し、總ての經驗(後天的)と關係なく存するものなり』と。之に反し、ジョン・ステュアート・ミル等は、數學の根本概念も亦總ての他の科學と同様に、元來、經驗よりの抽出に依りて得らるゝものなるを證し、吾人の現代の理性の『系統發生』は此の實驗的見解を確めたり。又、數學は、單に空間及び時間に於ける、大さの關係(量的)を判斷するのみにして、物體の質的性質に全然關係せざることは記憶すべき事なり。其の他、カント自身は示して曰く、數學は與へられたる假定より導かるゝ結果の實際に形式上正確なるに於ては眞

なれども、其の前提には何等の影響をも與ふるを得ずと。斯くて吾人若し數學的思想の作用に際し、フロネマの抽象的理性を生理學的又は、系統發生學的に判斷せば、吾人は此の嚴密なる『根本科學』が單に純粹一元論にのみ到達し得るものにして、かの二元論を總て排除するものなることを確信するに至るべし。數學が純粹科學として、知識の全分派に於て受くる高き尊敬は、主として其の式の確實なると、空間的及び時間的大さの關係を數と量とに於て過りなく表出し得るの能力に存するなり。

四 一元的天文學(宇宙結構の物理學) 天文學は已に數千年以前に於て一定の形態を採り、數學的認識に依りて固き基礎に達したる最も古き科學なり。遊星の運動及び日蝕に關する觀察は、已に基督より數千年以前に於てカルデア人及び埃及人に依りて試みられたり。基督自身(來世に眼を向けたる「神の子」)は、此の重要な宇宙學的發見に就いて何等の豫想をも有せざりしこと、恰もかの偉大なる希臘の自然哲學者等が彼の出生より三百年乃至六百年以前に於て確定したる、重大なる宇宙の系統に於けるが如くなりき。一五四三年、コペルニクス

が地球を中心とする宇宙系統を破り、一六八六年ニュートンが其の引力説に依りて太陽を中心とする新しき宇宙系統に固き數學的基礎を與へたる後、カントの『天體の一般的歴史』及びラプラスの『天體機制』に於て宇宙の發生は其の確實なる一元的基礎を得たり。爾來天文學の全領域に於て、神の意識ある創造活動に就いて語る者なきに至れり。加之最近天體物理學は、吾人に他の天體の物理學的關係を又、天體化學はスペクトル分析に依りて其の化學的性質を説明せり。之に依りて宇宙の一元なるは確立せられたり。

五 一元的地質學 今日大學に於て地質學として教授せらるゝが如き最も廣義なる『地球の歴史』は、第十八世紀の終りの頃、始めて獨立せる科學となりたるものにして、一八三〇年以來、即ち地球の發達の連續せる事並びに『現實的原理』の確定して以來、前に行はれたる地球の『創造史』を排除することを得たり。此の科學の最も古き部分は、礦物學なり。岩石殊に金屬の實際的に甚だ重要なるは已に數千年以前、人類の興味を惹起し、石器時代にも、青銅器時代にも、鐵器時代にも、石及び金屬は人類の武器及び他の器具に對し、第一の材料を供給せり。其の後

鑛山採掘の實際上重要となりたる爲め、是等鑛物に關する正確なる知識の進歩を見たり。されど中世紀の終りに至り、始めて化石即ち死滅したる動植物の石に化したる殘留物に注意せらるゝに至れり。第十八世紀に至り始めて人は是等の化石の『創造の記念牌』として、重要なることを理解し、第十九世紀の始めに於て、化石學は獨立せる科學となり、地質學及び生物學に取りて最も重要となれり。此の分科と等しく、地質學他の分科殊に結晶學は、最近五十年に於て現代物理及び化學に依り、最大の進歩を爲せり。地質學の是等總ての分科、殊に地球の自然的發達の歴史として地球發生學は今日、疑もなく純粹なる一元的科學なり。

六 一元的生物學 上記の五箇の科學の領域に於ては、之等が無機の自然に關する限り已に第十九世紀の前半に於て、純粹の一元論は一般に認識せられ、又一元論のみが行はるゝに至れり。有名なる造物者の智慧及び全能に就いては、最早茲に語る者なきなり。こは地質學、天文學並びに數學、化學、物理學に於ても亦、然り。されど下に掲ぐるが如き有機自然が甚だ豊富なる形態を取りて現る

る科學に於ては、其の關係は、異なれり。此處には未だ總ての現象を物理學的に説明し、數學的に表式し得るに至らず。従つて活力説が其の二元的要求を携へて現れ、科學を二箇の異なる領域即ち自然科學、最も廣義に於ける物理學及び精神科學(形而上學)に分つ。鞏固にして永久なる自然の法則は、前者に於てのみ行はれ、後者に於ては精神の自由及び超自然的の自由が行はると謂ふなり。こゝは先づ最も廣義の生物學(人類學及び總ての之に屬する人類に關係ある科學を含む)に就いて然りとす。吾人は生物學的哲學に對する以下の研究に於て、如何なる形態に於ても活力説を排斥し、一元論及び機制論が生命科學のあらゆる領域に於て行はるゝことを説明せんと欲するなり。

七 一元的人類學 人類學なる概念は、今日猶過去二千年間に於けると等しく、其の内容と範圍とに於て種々様々に限定せらる。最も廣義に於ては、本科學は人類に關する全知識の量るべからざる領域を包括すること猶余の個人的の解釋に據れば、動物學なる概念が動物に關する知識のあらゆる部分を其の裡に含むが如し。而して余は(一八六六年以來)至人類學を動物學の一部分なりと考

ふるものなるが故に、純粹一元論の要求は、前者に於ても後者に於ても、同様に行はるゝこと自ら明らかなり。されど此の人類學の一般的一元的解釋は、今日まで單に甚だ狭き社會に於て認めらるゝに過ぎず。通常人類學なる概念は「人類の本來の自然的歴史」に限られ、此の際、人類なる有機體の解剖學、生理學並びに其の胎生學、前歴史及び其の心理學の小部分も亦、考の中に入れらる。之に反し、今日多くの「人類學會」が殊に獨逸の「」が代表する如き官僚的人類學は、通常系統發生源、心理學の最大部分、並びに狹義に於て形而上學と認めらるゝ總ての精神科學を除外するなり。余は已に三十年以前拙著「人類發生學」に於て、人類なるものは、猿猴目に屬する有胎盤の哺乳動物として、他の總ての脊椎動物と同様に、肉體と心靈とを有する統一ある有機體にして、従つて又、其の本性の總ての方面を一元的に判斷すべきものなるを示さんと試みたり。

八 一元的心理學 心理學が科學の系統に於ける位置に關しては、其の有名な代表者の意見も亦、素人の意見と同様に今日尙全然相反するものあるは人の熟知する所なり。所謂「専門心理學者」及び「教育ある人々」の大多數は、今日尙宗

教理の支ふる舊式の信仰に固着し、人類の心霊は不滅にして、此の魂魄は獨立の非物質的本體なりと做す。此の二元的解釋は、哲學に於ては就中プラトーン、デトカルト及びカントの識權に依り、宗教に於ては基督、保羅、及びモハメットの識權に依り、學校及び國家に於ては、多くの政府の權力に依り、生理學に於ては古代の多くの生理學者及び多くの新しき生理學者に依りても支持せらる。従つて心理學は、特殊の精神科學なりと認められ、其の自然科學との聯絡は、外見的なりと考へらる。此の二元論に對し、比較及び發生的心理學、即ち腦の解剖學及び生理學の進歩は、最近四十年間に於て、心理學は腦髓生理學の一分枝にして、心靈研究の總ての箇々の領域並びに其の應用は、生物學の此の部分に屬すべきこと確定せられたり。人類の心霊は、フロネマの生理的官能なり。余は此の心理學の現代の一元的解釋を『宇宙の謎』の第六章乃至第十一章に説明し、『人類發生學』に於ては、生理學、解剖學、個體發生學及び系統發生學のあらゆる所論を以て説述したるが、故に、余は今之に就いて更に論ずる所なかるべし。

九 一元的言語學 言語學は其の姉妹たる心理學と運命を同じうし、其の著

名なる一群の代表者は、斷然、一元的意義に於て自然科學の一分派なりとし、他の一群の學者は、二元的解釋に於て精神科學の分派なりと判斷せり。古代の二元的形而上學的研究に據れば、言語は或は恵み深き神の賜物なりとして、或は社會を爲す人類自身の發見物なりとして、人間にのみ限れる所有物なりと認められたり。之に對し、第十九世紀中、言語は有機體の一官能にして、他の總ての官能と同じく、時間の經過中、次第に發達したるものなりとの一元的、生理學的確信は次第に確定せらるゝに至れり。即ち高等動物の比較生理學は、種々なる動物の網に於ても、社會學に結合せる動物の思想、感情、希望等は、或は符牒接觸に依り、或は音聲、蟋蟀及び蟬類の鳴聲、蛙鳴聲、爬蟲類の笛聲、鳥及び歌猿の囀聲、食肉類及び有蹄類の唸り聲に依りて傳へらるゝことを明らかにしたり。言語の個體發生學は、小兒に於ける言語の階段的發達が、生物發生學的根本法則に照應して、其の系統發生的方法を反復するものなることを示し、言語の比較研究は相異なる人類の言語は多系的にして相互に關係なく、發達したるものなることを教へたり。更に實驗生理學及び腦髓病理學は吾人に示すに、大脳皮質中、一定の小部分、プロ

イカの脳髓彎曲は言語中樞を爲し、此の言語の中樞器官は、フロネマの他の部分及び喉頭並びに舌末稍言語器官としてと結合して有節言語を生ずるものなることを以てしたり。

一〇 一元的歴史 歴史學も亦言語學及び心理學と同様に今日猶種々様々なる哲學的判斷を受く。尙屢、人類の文化發達中に生じたる出來事の科學的記述を以て直に歴史最も狭き人類中心の意義に於てなりと教へらる。即ち民族及び國家の歴史、文化史、道德史等の如し。此の際、真正の人類中心の確信に依りて、純粹に科學的意義に於ける歴史なる概念は、單に人類、道德的世界にのみ用ひらるべきものなりと主張せらる。歴史は自然と相對して立たざるべからず、即ち歴史は道德的に自由なる現象(高等なる前提目的を有する)を包括し、自然は自然の法則の範圍(豫め考へられたる目的なく)を包括するものなりとし、恰も世には一の「自然の歴史」なく、宇宙發生學、地質學、個體發生學及び系統發生學は、一の歴史的科學にあらざるが如く考へらる。歴史の此の二元的人類中心の見解は、今日尙、吾人の大學に行れば、又國家及び教會は聯合して此の「神聖なる傳説」を

保護し、進歩せしめんとすと雖、是等は早晚、純粹なる歴史哲學ガレヒツフイロソフイに依りて放逐せらるべきは明らかなり。現代人類發生學は、人類個體の發生の歴史と全人類の發生の歴史との間に存する密接なる關係を明らかにし、是等は全歴史的及び系統發生學的研究に依りて所謂、世界歴史を脊椎動物の系統史及び有胎盤の哺乳類の歴史と連接せしめたり。

一一 一元的醫學 吾人は醫學を實際科學即ち應用科學の列の先頭に置き、而して其の興味ある長き歴史に於て、一元的自然認識のみが眞正の科學の健全なる根柢を爲し、且、其の結果多き應用が實際屢、人類生活の最も重要なる關係に寄與し、二元的の名のみの精神啓示は、之に與らざることを明らかにするものなり。元來、醫學は僧侶の手にありしが、數千年以來、主として廣く流行する宗教教理と密接に關係したる神祕的及び迷信的觀念に影響せられたり。實に二千年以前に於て、已に古典的古代の偉大なる醫師等は、人類身體の根本的なる解剖學的及び生理學的知識を患者治療の鞏固なる基礎たらしめんと熱心に試みたり、(宇宙の謎第二章及び第三章參照)。基督教的中世紀に於て、獨立的科學の研究が

一般に退歩したると共に、不可思議の信仰及び迷信は再び勢力を得、世人は基督自身の模範に従ひ、疾病に於て人が「逐ひ出ださるべからざる」悪鬼を見たり。斯かる悪鬼を逐ひ出すと稱する禁厭は、今日尙篤信なる信者を有するのみならず、之が教育ある上層の文化國民にも存することは人の知る所なり。吾人は單にマルペンゲン及びルールド「祕密藥の奏效したりとの稱讚」現代の「禁厭」及び祈禱、磁氣療法及び有名無實なる自然療法の山師醫者を擧ぐれば足れり。第十九世紀に於ける自然科学の急速なる進展、殊に其中葉に於ける生物學の驚くべき進歩に依り、實驗的治療は稱讚すべき一元的科学たるに至り、今日文化人類の多くの苦痛と闘ひて、赫々の功を收めたり。爾來病理學は、批判的疾病学として、治療學は合理的治療學として、物理及び化學の確實なる方法並びに吾人が進歩したる解剖學及び生理學に合する人類有機體の根本的知識の上に築かれたり。疾病は今日最早吾人の身體を悪鬼或は公然たる悪鬼として攻撃する特殊の本體にあらずして、正規の生活活動の有害なる障害たるに至れり。病理學は單に生理學の一分枝たるに過ぎずして、こは特殊の危険なる状態の下に組織及び細

胞中に生じ來る變化を研究するものなり。若し是等の障碍の原因にして毒素若しくは外部より侵入したる有機體例へば細菌、アメリバなるときは、治療法は是等を除き、官能の正常なる平衡を再び生ぜしむるを以て任務となすものなり。

一二 一元的精神病學 精神病の科學は、元來、單に醫學の一専門分科に過ぎざるものにして、其の醫學に對する關係は、恰も心理學が生理學に對する關係の如し。唯、知學は病的心理學即ち心理病理學として特別の考量に値するは、單に其の實際的に極めて重要なのみならず亦、其の大なる理論的興味に依るものなり。最も古き時代より、精神生活に關する觀念をも、今日まで支配したる身體と精神との誤りたる二元論は、精神病を以て全然、特殊なる現象なりと認めしむるに至れり。即ち或は外部より人體に導き入れられたる悪魔或は悪魂として、或は獨立せる「魔物」或は神祕的なる「魂魄」身體より獨立せるが加ふる不可思議なる力學的現象なりとせらる。此の二元的にして今日、尙、廣く分布せる憂ふべき誤謬は、憫むべき精神病患者の取り扱ひに於て、最も甚だしき誤謬と殘酷にし

て誤れる所置とを生ぜしめたり。即ち彼等は其の法律上並びに社會上の判断に對し、多くの他の生活關係に對すると等しく、最も悲しむべき結果を生ぜしめたり。現代の心理學は、總ての精神病が腦髓の障害に依りて、惹起せらるゝものにして、殊にあらゆる精神病患者(精神の障害、氣分上の疾病及び狂想等)が大腦皮質に於ける變化に根柢を有すとの確實なる認識に依りて、此の非合理的なる觀念を根本より覆すものなり。而して吾人は此の「精神の中樞器官」をフロネマと名づけたるが故に、又吾人は次の如く簡單に言ふことを得、即ち精神病學とはフロネマの病理學及び治療學なりと。精神病患者の或多くの形態に於ては、已に心靈細胞即ちフロネマ細胞(フロネマの神經細胞)に微妙なる變化あるを解剖學上、又化學上、證明し得たり。フロネマの病理解剖及び生理學に關する此の知識は、そが一般の精神生活に關する吾人の一元的解釋に明らかなる光明を與ふるが故に、大なる哲學的興味を有す。精神病の大多數は、遺傳的(六〇乃至九〇%の間)なるが故に、又此のフロネマの異常なる状態は、患者の祖先により次第に誤りたる適應に依り獲得せられたるものなるが故に、是等の事實は、同時に前進的遺傳

即ち後天形質の遺傳に對して顯著なる例を供するものなり。

一三 一元的衛生學 已に數千年以前に於て、野蠻國民等が文化に向ひ、高等なる文化の豫備を爲さんとするに際し、彼等は其の健康及び身體の強壯を維持することに注意せり。古典的古代に於ては、洗滌、沐浴、體操運動等に依る身體の衛生は大に發達し、一部分宗教的儀式と結び着けられたり。ヘラス及び羅馬に於ける巨大なる水道並びに公設浴場は、彼等が純粹なる水を身體の内外に用ふる事に如何に重きを置きたるかを示す。基督教的中世紀は、此の重要な領域に於ても有害なる退歩を招致せり。蓋し基督教は此の地上の生活を尊ぶと少く、之を「彼の世」に於ける更に高尚なる生活に對する豫備と認めたるが故に、彼は文化を以て自然と同様餘り尊敬せざらんことを求めたり。而してその人類の肉體を單に其の不滅の心靈の一時的宿所なりと認めれば、そは身體の衛生に何等の價值を置かざりき(宇宙の謎第十九章第一四二頁參照)。中世紀に於て數百萬の人類の生命を奪ひたる、最も厭ふべき疾病(ペスト、黒死病其の他は、之を合理的の衛生及び衛生行政的手段に依りて豫防することなく、祈禱、行列及び

其の他の迷信的儀式に依りて豫防せんと試みたり。高等なる文化人が、此の二元的迷信より脱せんとしたるは、徐々、且漸次的なるに過ぎざりき。而して第十九世紀の後半に至り、始めて有機體の生理的官能及び生存要約を深く透察せしむる結果、身體の衛生に再び大なる注意を拂はしむるに至れり。現代衛生學が今日衛生法に對して行ふ所、殊に下等階級の住居及び營養の改良に對し、又健全なる生活方法、沐浴體操等に依りて疾病豫防の爲めに爲す所、總て是等現代文化の偉大なる進歩は皆純粹理性の一元的綱領に基くものにして、基督教の『全能なる豫察』及び之と結合せる二元論の信仰に反對す。衛生學の現代的格言は、神は自ら助くるものを助くと、謂ふにあり。

一四 一元的工藝學 吾人の『機械時代』に刻印を與ふる第十九世紀工藝の驚くべき發展は、自然知識の大なる理論的進歩の直接の實際的結果なり。吾人が、現今の文化生活に於て、高く發達したる工藝に負ふ所の總ての特權及び享樂は、自然科学、殊に物理及び化學の發展に依りて生じたるものなり。吾人は之に蒸氣機械、電氣工藝、鑛山採掘並びに農業等の現代工藝の量るべからざる意義を考

ふれば足る。若し其の助を藉りて現代の工業、國際的世界貿易、商業及び工業等が以前能くせざりし繁榮に達したりとせば、彼等は之を實驗的、自然科学的認識の實際的應用より得たるものにして、此の際、形而上學的思索は何等の效なし。従つて總ての工藝的科學は、其の純正の源泉たる物理學及び化學と同様に、全然一元的性質を有することは、他言を俟たざるなり。

一五 一元的教育學 青年訓育の科學的完成は、文化人類の最も重要なる任務に屬す。蓋し、最も早き青年時期に於て、子供らしき精神に堅く感銘せられたる觀念は、最も長く執著して、概ね其の後の全生涯に對し、思考の方向及び道德的行動方法は決定すればなり。是を以て、文化領域に於ける哲學の兩主方向の永續的戰鬥は、正さしく最高の實際的意義を有す。僧侶は數千年以前、文明の始めて起れる際に生長し行く精神生活の唯一の保護者にして、且指導者たりしを以て、彼等は學校を醫學と同様に己の勢力範圍となせり。宗教は教育の最深の根柢なりと認められ、其の信仰教義は、全生涯に對する道德的準繩たりしなり。古典的古代の一元的哲學が、有神的迷信より離れんが爲めに行ひたる箇々の努力

は、青年訓育上に何等の永續的作用を及ぼさざりき。寧ろ訓育に於ては、プラト
 ン及びアリストテレスの二元的原理行はれ、其の形而上學的原理は、基督教
 の教義と融合したり、而して是等は中世紀に於て羅馬法王の宗教政治に依り、世
 界の支配權を贏ち得たり。其の後、宗教改革に依り、其の勢力の大部分は支配權
 を失ひたりと雖、教會の學校に對する偉大なる勢力は、今日尙、到る處に保持せら
 る。此の際、教會の精神的壓制は、多くの政府の保守的傾向を以て有力なる同盟
 者となせり。王冠と祭壇とは、互に相倚らんことを欲し、兩者は科學的開業の進
 歩を恐るゝなり。此の偉大なる二元的結合は、民衆の不活潑なる精神生活に依
 り、將た權威を盲目的に信仰するの便利なるに依りて、甚だしく促進せらるゝも
 のにして、之に對して吾人の一元的説明は困難なる位置にあり。こは學校が教
 會と分離し、純粹理性の自然知識が宇宙觀の根柢たるに至りて、始めて堅き地位
 を得るものと謂ふべし。此の際、學校改革が教會及び國家の勢力に對して執る
 べきものと思はるゝ規準は、余が已に『宇宙の謎』の第十九章の終りに掲げたる所
 なり。

一六 一元的倫理 吾人は已に第十八章に於て、生命の道德及び其の習慣と
 適應とよりする起原を詳細を述べたれば、此處には唯、純粹の理論的理性の一元的
 的要求と實踐的應用理性の二元的的要求との間に存する衝突に就いて言へば足
 る。こはカントの理性論の二律背反に於て最も明らかに記述せられ、其の高き
 識權に依りて最も廣く分布せるものなり。されど、今や彼の無上命法の有名な
 教理も、現代の比較人種學及び心理學に依りて否定せられたること、猶、其の自
 由意志論が生理學及び系統發生學に依りて否定せられたると同様に否定せら
 れたり。従つて『自由意志』に依る道德の形而上學の建設及び先天的の(a priori)
 道德的意識に代ふるに一元的心理學に立てる生理學的倫理學を以てせざるべ
 からず。而して後者は國民生活中の一の『道德的宇宙の秩序』を認め得ざること
 各人の個人的生活に於て『愛情に富める神意』を認識し得ざると同様なるを以て、
 一元的倫理は將來全然、生物學、殊に進化學の自然の法則に頼らざるべからず。

一七 一元的社會學 最近社會學なる若き科學が要求する重要な位置は、
 一方、理論人類學及び心理學に對し、他方、實踐的國家學及び法律學に對する密接

なる關係に依るものなり。廣義に解釋せば、人類の社會學は、之と直に接する哺乳類の社會と連續す。哺乳類の家族生活、結婚及び仔獸の養育更に肉食類及び有蹄類の群隊の形成、並びに群居を爲す猿類の群は、直に原人及び野蠻人の下級なる團結に至り、之よりして直に文明の始めに及び、遂には其の最高の絶頂に達す。團結の文化史は、茲に大小團體の交際を整頓する社會的規範と聯結す。社會の規則を生物學的に遺傳及び適應なる自然の法則に歸する點に於て、吾人の動的社會學(レスタ・ウオードの名付けたる如く)は、全然一元的に考ふるものなり。之に反し多くの教育ある人の社會的交際に於ては、今日尙多くの二元的臆測は行はるゝなり。醇化し高等教育を有せる吾人の社會に於て、眞理と自然とが行はるゝこと如何に少きか、到る處僞善と虚偽とが行爲の規準を定むること如何に甚だしきか、是れマックス・ノルダウが『文化人類の便宜的虚偽』なる名著に於て明らかに示したる所なり。

一八 一元的政治學 政治學は一方社會學と他方法律學と最も密接に關係す、こは内國政治としては、憲法に依りて文化國の組織を整備し、國家の外的政治

としては國家相互の國際的關係を整理す。吾人の一元的解釋に據れば、兩領域に於て純粹理性のみが規準を與ふべきものにして、國民相互の關係及び國民全體に對する關係は、各國民の個人的交際に於て行はるゝと同一の倫理的法則に依りて支配せらるべきものとす。されど吾人は明らかに吾人が今日の國家的生活に於て、此の理想的標的を去ること遠きものなり。一方に於て外的政治には今日尙野獸的利己主義の行はるゝあり、各國民は單に自己が利益のみを考へ共有する財源の大部分を戰爭の準備に使用す。他方に於て内國政治は尙大部分、中世紀の野蠻的臆斷に囚はる。憲法上の爭鬭は主として一方政府と、他方民衆との權力の爭奪を中心とし、政黨は何等の效果なき爭論に相軋す。而も國家の特殊なる形式如何は、寧ろ其の生活活動に於ける理性如何よりも、遂に少なる問題なり。『王國なるか、共和國なるか、貴族政治的憲法なるか、或は民主的憲法なるか、或は現代文化國家が精神的なるか、或は世俗的たるべきかの主要なる問題に比すれば、小なる問題なり。國家は非合理的信仰箇條及び僧侶の我儘に依りて祭政一致的に支配せらるべきものなるか、或は合理的の立法及び國民の權

利に依りノモクフライク法政に支配せらるべきものなるか」(宇宙の謎第一頁—懸賞論文新蒐集「自然と國家」イェーナ、一九〇三年)。

一九 一元的法律 政治學に於けるが如く法律學に於ても、今日尙、中世紀及び古代の傳説に依りて傳はり、教會の信仰箇條として融合し、神聖視せらるゝ二元的原理は行はる。「法律と權利とは永久の疾病の如くに遺傳し行く。されど吾人の生得の權利に就いては然らず。」カントの實踐理性説の二元論は、此處に行はれて最も大なる不利益を生ず。即ち人類心靈の不滅、其の意志の自由、人格的神、法律を與ふるもの及び最高の裁判官としての謬りたる觀念は立法及び司法學に於て法律家と政治家との見解を決定す。更に吾人が現代の法律書を毀損する、中世紀以來、注意して保存せられたる多くの殘物あり。宗教の教理及び教會の教理の偉大なる勢力は、屢、有害なる作用を爲す。従つて尙、毎週新聞紙に於て、吾人は上級及び下級裁判所の奇怪なる判決を見る。健全なる常識は之を見て甚だ驚嘆せざるを得ざるなり。此の主要なる領域に於ても亦、根本的なる人類學的並びに心理學的教育が法律家に生命の法則を更に明らかにする時に、

始めて根本的なる改良は行はるべし。

二〇 一元的神學 神學は神及び宗教の科學として數十年以來、吾人の大學の四箇の尊むべき「分科」の最上に立つ。此の名譽ある地位は、實踐神學の機關たる教會が、今日尙、全文化生活に最大なる勢力を及ぼせる限り之に歸屬すべきものとす。實際今日、尙、應用科學の多くの領域、就中、法律、政治、倫理、教育は、宗教的觀念及び懺悔的臆斷に依りて多少支配せらるゝものとす。此の際、概ね何等かの形態を採れる「最高の本體」として、神の觀念は最上に位するものなり。されどあらゆる宗教に於て、人格的神が總ての存在の根柢なりと謂ふべからず。寧ろ最も廣く分布せる亞細亞の三宗教、即ち佛教、波羅門教及び支那の宗教たる孔子の教は、元來全く、無神論的なるものにして、前二者は、之と同時に理想的にして、且、厭世的なるが故に、シローペンハウエルは、之にあらゆる宗教中、最高の地位を與へたり。之に反し、人格的神即ち理想化せられたる人類の性質を有する最高の本體は地中海沿岸の三箇の宗教の中心點を爲す。假令、此の人類の形態を有する神が、モーゼ教、基督教及びマホメット教の多數の宗派に於て、種々の形態を採り、多種

多様な形態に於て人格化せられたりと雖、人格的宇宙生物としての其の存在は、純粹なる信仰箇條たるなり。此の神の存在を證明すべきものは何處にも發見せられず。此の事はカント自身が、實踐理性は神の存在の信仰を要求す(此の際、何等積極的或は消極的觀念を作ることなくして)と稱しつゝ、而も尙、最も鋭く指示したる所なり。世の所謂「啓示」が之に就いて教ふる所は、かの篤き信仰(素朴なる輕信性)を強むと稱する奇蹟(ウツダ)と同様に詩の空想領域に屬す。此の神的全領域就中、其の中心點たる信仰教義、即ち其の獨斷教及び之に依りて支配せらるゝ全教會學説は、二元的形而上學及び傳說的迷信に基くなり。従つて彼等は、吾人の科學的所論に於ては、更に問題となるべきものにあらず。然るにかの理論的科學の重要な領域は、比較宗教學なり。こは現代の人類學、人種學、心理學及び歴史の二元的基礎の上に宗教の發生、發達及び意義を研究す。人若しかの各種の學科の多數にして多様に、互に相關聯する結果を純粹理性の公平なる見地よりして、統一的に集成せば、一元的神學は、スピノーザ及びゲーテの意義に於て汎神論たるに至るべし。神(ゴット)即自然(ナチュア)、茲に於て、吾人の一元論は、實際宗教と科學との

連鎖を爲すものなり(余が一八九二年のアルテンブルクの講演及び「宇宙の謎の第十八章を參照せよ」)。

科學の二律背反 上に掲げたる人類の二十の科學の主要領域及び彼等を一
方一元論、他方二元論との關係に對する瞥見は、今日尙、相互に最大の相反を示し、吾人は此の最高の精神事業の統一あり、正當なる解決を遠ざかること甚だ遙なるを知るべし。此の顯著なる相反は、一部分、カントの意味に於ける理性の眞實の二律背反、即ち觀念の法的相反(アポステリオリ)に基くものにして、此の際、積極的の正(アポステリオリ)は、一見其の直接の反對たる消極的の反(アポステリオリ)と同様に良く證明せらる。されども科學のかの醫すべからざる二律背反は、大部分其の歴史的發達に基するなり。かの純粹理性は、文化人類の最高の所有物として、野蠻人及び原人の悟性活動より徐々且、漸次に發達し、是等は又、猿及び下等なる哺乳類の本能より發達したるものなるを以て、後者の多くの下等なる殘物は、今日尙、維持せられ、所謂「實踐理性」となりて科學に有害なる影響を及ぼすなり。斯くの如き二元的臆斷及び理性に反する獨斷――人類の原始歴史及び系統史の智能上の殘留物、化石せる觀念及び退化せる本

能は、尙甚だしく吾人の現代の神學、法律學、政治學、倫理學、心理學及び人類學に浸潤す。吾人若し此の關係に於て再び第二十世紀の初めに於ける吾人が現代科學の全領域に眼を注ぐときは、吾人は其の二十の主分派を三箇の屬に分つことを得。即ち合理的、純粹一元的、半合理的、半一元的及び獨斷的、専ら二元學的學科是なり。

合理的及び獨斷的科學 今日其の根本的の素養を有し、且、判斷力ある代表者等をして、二元的所論を全然排除せしめたる理論的、即ち純粹一元的科學として吾人は、純粹即ち理論的學科の下に次の(一)物理學、(二)化學、(三)數學、(四)天文學、(五)地質學を認め、更に應用即ち實際學科の下に、(六)醫學、(七)衛生學、(八)工學を認むるものなり。之に反し、吾人は、半獨斷的科學に於ては、今日尙、一般的問題及び目的の哲學的判斷に際して、一元的觀念と二元的觀念との雜色の混合を認む。其の代表者等の黨派的及び個人的位置に従ひて、或は前者を主とし、或は後者を主となす。斯かる例は生物學的分科の大部分に於て認むべく、(九)生物學(最廣義に於て)、(一〇)人類學、(一一)心理學、(一二)言語學、(一三)歴史學及び應用學科に於ては、(一四)精神病學、(一五)教育學及

び(一六)倫理學是なり。後の兩學科は、下の四箇の獨斷科學に至る中間を爲す。此の獨斷科學に於ては、傳說的二元論が最も重んぜられ、中世紀よりの口碑が其の最大の勢力を振ふ、即ち(一七)社會學、(一八)政治學、(一九)法律學、(二〇)神學是なり。是等多くの官僚的代表者等は、各稱の臆斷と迷信とに囚はれ、最近、一元的人類學及び心理學が吾人に與へたる純粹理性の認識に適應すること漸次的にして、且、徐々たり。第十九世紀の初めに於ては、今日、第二十世紀の初めに於けるよりも、遙に大なる開明ありしなり。

化學の相關 最も重要な知識の領域の、あらゆるものを包括する「一般的のもの、科學」としての「哲學との關係に於ける分類は、勿論、此の二の總ての排列と同様に主觀的の價値を有する當座の企圖たるに過ぎず。これは特に、各科學が多く、の點に於て互に關係を有し、其の概念及び任務が其の歴史的發達に於て大に變化したるを以てなり。唯、余は茲に次の事を指示せんとす、即ち科學の大部分―而して殊に嚴密に完成したる、數學的基礎に基く八箇の合理的分科―は、今日已に全然一元論に歸したること是なり。八箇の半獨斷的分科に於て、一元

論は、日々勢力を増加す。されば早晩又四箇の獨斷的分科、即ち二元論の偉大なる牙城たる社會的及び政治學、法律學、及び神學が一元論に依りて攻略せらるゝことは期待し得べきなり。蓋し總ての統合せられたる科學の最後の目的は、單に各原理に於ける其の一致に存し、一元論に依る其の調和せる建設に存すべしなり。

分科大學 第十九世紀中に於て、科學のあらゆる分科に自然科學的方法の侵入したるが爲めに生じたる巨大なる變化は、必ずや大學に於ける此等學科の管理に就いて異なる位置を齎さざるべからず。正教授の代表する各箇分科の數は第十九世紀の終りに於ては、其の初めに於けるよりも二倍以上に達せり。勿論、此の生長は第一、自然科學それ自身に關するものなりと雖、又第二、所謂「精神科學」が新に比較的及び系統的方法を採用して、直接前者と相接したるに因るなり、即ち心理學、言語學、歴史學、教育學等の如し。

此の進歩に照して、吾人が今日尙、吾人の大學に於て行ふが如き、各箇の分科に多數の學科を分配することは、全く舊式なる如く思はる。四箇の古き分科の中、

前三箇即ち神學、法學及び醫學は、大部分應用科學に屬し、之に反して第四の分科 (Ordo amplissimus philosophorum) は純正學科の最大部分を包括す。最近多くの大學に於ては、二箇の新しい分科を之より生じたり。即ち自然科學及び政治學科是なり。されど二三の學科は、直接各種の領域と關係し、到る處之に注意を拂はざるべからず、即ち就中、歴史學及び言語學の如し。各箇の學科の歴史的發達及び其の種々なる實際上の意義は、最も密接なる學科をも屢、甚だしく相遠ざからしむるに至れり。斯くて人類の解剖及び生理學は、其の籍を醫科に有し、之に反して動植物の解剖及び生理學は、哲學科に有するが如し。

教授の改革 吾人の全教育制度は、根本的改良を要すとの確信は、多くの文化國に於て常に一般的となりつゝあり。こは下級の學校に於ても、上級の學校に於ても同様にして、小學校に於ても、中學校に於ても、専門學校に於ても、大學に於ても亦、然りとす。二箇の對抗せる方向の間に存する根本的の争闘は、近來、益々甚だしきを加へたり。一方に於て多くの政府は、其の保守的傾向の結果、中世紀の煩瑣哲學的傳説に出來得る限り執着し、而して此の際、神學及び法律の獨斷教義

を基礎とするものなり。他方に於て「純粹理性」の代表者等は、此の足枷を脱し、現代自然科学及び醫學の實驗的批判的方法を所謂精神科學にも輸入せんと努む。此の兩派の間に於ける相反は、彼等の社會學的傾向を異にするが故に、益甚だしとす。自由主義の人道派は、各個人が個人的素質を自由に發展せしむることを以て幸福なる生活の最も確實なる保證なりと確信して、「萬人の自由と教育」とを前進的發達の目的なりとなす。之に反し保守的政府に取りては、幸福なる生涯の如き、其の向ふ所にあらず。彼等は各國民を其の種々なる分業に應じて、單に國家なる大有機體の螺旋、若しくは道具なりと考ふ。「上流の一萬人」は、其の際、勿論自己の特別な境遇のみを考へ、高等なる教育を自己のみに限らんとす。されど純粹理性に據れば、國家は決してそれ自身を以て目的となすべきにあらずして、あらゆる國民が繁榮すべき手段たるべきなり。而して國民は、其の階級の何たるを問はず、自己の最高の發展を得、其の才能を利用すべき機會を與へられざるべからず。従つて又教育に於ても、一般に人類生活のあらゆる關係を概観せざるべからず。各人は自然科学の原理を己が有せざるべからず、こは物理及

び化學に就いてのみならず、生物學及び人類學に就いても然りとす。之に反し純粹の語學的教育と現代的教育以上の古典的教育の重視とは、甚だしく制限せられざるべからず。各學生は、如何なる分科に屬するを問はず、最初の學年に於ては、哲學と自然科学とをのみ學び、後始めて専門學科に移るべきなり。

一元論の調和 「宇宙の謎」の結論に於て、余は吾人が現代の一元論と傳說的二元論との間に存する相反を鋭く説叙したるが、之と同時に亦、余は下の如く論じたり。「此の判然たる相反は、徹底せる且、透明なる思想に照せば或定度まで緩和せらるべきものにして、又一の喜ぶべき調和に解決せらるゝことすら得べきなり。全く論理整然たる思想と最高の原則とを宇宙全體有機及び無機自然に應用するに於ては、精神論と無神論と、將た活力論と機制論との相反は正に相觸るるまで接近す。然れども徹底せる思想は稀有なる自然現象なり」と。

此の相反を平均せしむる妥協的の確信を懐くこと益長くして、余は其の愈確なるを覺ゆ。吾人の觀察、即ちカント及び今日尙行はるゝ形而上學的學派の二元論が、ゲーテ及び發展しつつある汎神的一元論に屈すべしと謂ふ確信は益増

加しつゝあり。然れども之を以て吾人は決して吾人が理想を失ふものにあらず、吾人の實在的宇宙觀は、吾人の理想が深く人類の天性に基せるものなることを教ふ。吾人は吾人が藝術及び詩歌に於て、かの理想の世界を懐き、吾人の心情を其の所作ソユビールに樂ましむるものなれども、同時に吾人は、現實の宇宙の真相は、吾人の科學の對象として、單に純粹理性の經驗と思考とに依りて認めらるべきものなりとの強き確信を把持す。斯くて『真理と詩歌』とは一元論の完全なる調和に一致するものとす。

第二十一表

純正(理論)科學の主流の一覽

(一元的及び二元的哲學に關聯して)

科 學	任 務	一元論	二元論
一 物理學(狹義の自然論)	質量及びエーテルの重 原子と其の化合物との 物理學	一般に承認せらる。	全然排除せらる。
二 化學(物質論)	抽象的大さ(數及び量) の物理學	同 右	同 右
三 數學(大さの論)	宇宙構造の物理學	同 右	同 右
四 天文學(天體學)	地球の物理學(地理學、 地球發生學、礦物學)	同 右	同 右
五 地質學(廣義の地學)	有機體の物理學(廣義 の意味の)	大部分承認せらる	活力論者に依りて主張 せらる。
六 生物學(生命の學)	人類の理學(廣義)	一部分承認せらる。	人類中心論者に依りて 主張せらる。
七 人類學(人間の學)			

- 八 心理學(心靈學)
- 九 言語學(言語科學)
- 一〇 史學(歷史科學)

フロネマの理學、比較心理學、言語の理學、歴史及び生理學、人類の原始歴史、民族史、文化史

大部分の生理學者に承認せらる。
殆ど一般に承認せらる。
一部分承認せらる。

一般に専門心理學者に依りて主張せらる。
若干の言語學者に依りて主張せらる。
多數の専門歴史學者に依りて主張せらる。

第二十二表

應用(實際)的科學の主派の一覽

(一元及二元論的哲學に關聯して)

科 學	任 務	一元論	二元論
一一 醫學(治療學)	有機體の病理學及び療法	殆ど一般に承認せらる。	神學者及び靈魂學者に依り主張せらる。
一二 精神病學(心靈治療學)	フロネマの病理學及び療法	大多數の醫師より承認せらる。	若干の誤れる醫師及び總ての靈魂學者に依り主張せらる。
一三 衛生學(健康の管理)	健康なる有機體の保持及び疾病の豫防	一般に承認せらる。	全然排除せらる。
一四 工藝學(工業學)	機械學、工業、商業學、交通學	一般に承認せらる。	同 右
一五 教育學(教育する學問)	自然に適ふ鍛鍊、身體及び精神のよく釣り合へる完成	自然に適へる人類學及び凡ての理性的學說より承認せらる。	國家及び教會に依り殆ど一般に要求せらる。
一六 倫理學(道德論)	生活秩序、習慣及び適應等の規範科學	實踐的心理學の一部分たる現代生物學より承認せらる。	『自由なる意志』を基礎とし『道德的宇宙秩序』

- 一七 ソフィオロジー 社會學(社會の學問)
- 一八 政治學、國家科學 (及び國民經濟)
- 一九 司法學(法律學)
- 二〇 神學(宗教學)

ソフィオロジー
社會(家庭、團體)の規範科學
國家の秩序及び國民經濟の規範科學
法律的秩序の規範科學
宗教科學及び信心

認めらる。
現代の生物學により主として承認せらる。
多數の自然研究者及び若干の國民より承認せらる。
多數の生物學者及び若干の法律家より承認せらる。
汎神論及び現代の自然哲學より承認せらる。

として要求せらる。
形而上學に依り主として要求せらる。
今日に至るも尙大多數の國民及び政治家に依り要求せらる。
大多數の法律に依り主張せらる。
大多數の神學者及び教會信心ある民衆に依り要求せらる。

生命の不可思議 下卷終

跋

今年の一月と二月に、現世で最も有名な二人の動物學者の爲めに祝賀會が開かれた。其の一人はイェーナ大學のヘッケル先生の爲めで、他の一人はフライブルグのウァイスマン先生の爲めであつた。兩先生は、共に我が天保五年即ち西歷一八三四年に獨逸國で生れ、今年は共に丁度八十歳といふ高齡に達せられたのである。併し此の二先生は今尙、矍鑠たるもので、其の元氣の旺盛なことは、我々三、四十年後に生れたものでも遠く及ばない所である。

エルンスト・ハイリッヒ・ヘッケル先生は、一八三四年二月の十六日に普魯西ブランデンブルグのポツダムに生れ、學生時代

は主としてベルリン大學及びウエルツブルグ大學で過ごした。即ちそれは此等の諸大學には、當時、ヨハンネス・ミーレル、アルベルト・フォン・ケリケル、ルードルフ・ウィルヒョーなど謂へる、有名な諸先生が居られたのであつたから、ヘッケル先生は此等の人々を追ふて此の兩大學で學んだのである。併し其の頃、ヘッケル先生の専門はまだ確定して居なかつたので、地理學者にならうと思つたり、植物學者にならうと思つたり、又は動植物の探集者にもならうと思つたのであつた。此のやうに思案した後、先生は父の希望で遂に醫師となつた、而して伯林で一箇年の間、開業をして見たが、これとて先生が心から好んで居たものではなかつた。此の時、先生が一年間に診察した患者は、驚くなかれ、實に三人であつたとのことである。尤もこれも先生

の診察時間が午前五時から六時まで、あつたと聽けば、先生の患者が僅かに三人であつたといふ理由も解らぬ譯ではない。斯んなやうで醫術の開業をして居たが、一年に唯、三人位の患者では餘り思はしくなかつたのは無理もないことで、先生は、一八六一年に、かの有名なカール・ゲーゲンバウル先生の推薦に依つて、イェーナ大學の比較解剖學講師となつた、それから遂に同大學で動物學の講座を擔當することゝなつたのである。それ以來、ウエルツブルグ、ポーン、ストラスブルグ、維也納等の諸大學から招聘せられたが、應じないで、イェーナに止まつて居た。

併し、ヘッケル先生は學生であつた頃から嶄然頭角を顯して居た。先生は一八五七年に、『ドクトル』論文を書いた前、既に魚

卵に關した動物學上の論文と窒扶斯と結核との關係、並びに
 陸の研究といふ二篇の醫學上の大論文を公にしたが、其の後、
 今日に至るまでに出版せられた論文の數は、實に百何十とい
 ふほどである。是等は皆獨創的のもので五百頁以上のもの
 が十二篇、千頁以上のものが三篇あつて、五百頁に近いものや、
 千頁に近いものは甚だ多い。而も是等は編纂的のものでは
 なく、今云つたやうに獨創的のものであると聞いては、先生の
 活動振りの偉大なるには驚かざるを得ないのである。其の
 中でも殊に大部なものは、先生が英國の探檢船チャレンジャー號
 の學術報告に出された放散蟲類の一篇である。即ち論文の
 本文が二千頁で、其の附圖版が百四十枚といふ大なるクォート型
 の書である。此の研究の結果を公にされたのは一八八七年

で、丁度、余が獨逸のフライブルグでウァイスマン先生の下に勉
 學して居た頃であつたが、其の當時、ヘッケル先生の添書を持つ
 て、ウァイスマン先生の處へ轉學して來た一學生があつた。此
 の學生は至つて眞面目な男であつたが、余にヘッケル先生が其
 の頃、盛んに研究して居られたことに就いて、次のやうな事を
 話したのを覚えて居る。即ち「我々が夜中の二時頃にクナイ
 ペから歸つて來ると、ヘッケル先生がまだ教室内で勉強して居
 られるのを見て、其の度毎に我々も此のやうなことをして居
 てはならぬと考へて、大に奮發心を起した！」と。著書の善惡
 を其の頁數で是非判別する譯には行かないが、余が一寸算へ
 ることの出來る先生の百二、三十部の著述中で、四十九部の頁
 數を概算して見たら、實に二萬餘頁といふ尨然たるものにな

つた、して見ると、全部を少なく見積ても、先生が書かれた頁數は優に五萬位はあると思はれる。尤も此の約五萬頁といふ書も編纂的のものであるならば兎に角、其の大部分は獨創的のもので、而も解剖、組織、發生等の仕事で、一々顯微鏡と首引きしなければならぬものであるから、先生の勉強の深、且、大なることは、余が説明するまでもないのである。

とはいへ、先生があれ程高名になられたのは唯、努力されたばかりでないのは固よりのことである。先生の動物學に於ける研究と理論とが實に偉大なもので、一方には、緻密な放散蟲の研究があるかと思ふと、又、他方に於ては、「自然創造論」中のアントロポーゲニーの如きものがあつて、學問の蘊奥を極めると同時に、亦、其の普及をも計られたのである。

尤も先生が當時、何れの學を脩めんかと思案して居られたとき、恰もダーウインの淘汰説が現れた。世界はまだ此の新説の眞價を疑つて居た頃、先生は既に之に賛成した。而して先生は、一八六三年にステッティン府に開かれた獨逸國博物學者の大會に於て、ダーウイン説に就いて一大演説を試みられた。その後、英國のハックスリ先生と相並んで其の研究と普及とに全力を盡された。これより二年の後に於て、先生は化石人に就き、又、同年に先生壯年の著書中、最も有名なる「生物の形態」(Operele Morphologie der Organismen) 前後二篇一千二百頁の彪然たる書を出版せられた。これは先生が最愛の夫人の死を悼み、之を忘れんとして研究せられた結果であるといふ。ダーウイン先生は病苦を忘れんと欲して研究に従事せられた事を聞

いて居たが、先生が又學術の研究をして夫人の死の爲めに生ずる苦痛を忘れたといふのは如何にも敬服すべき事である。それは扱て置き、此の著は實に生物學に一大變化を與へたもので、今日の生物學の基礎を成したものであると謂うても決して譽め過ぎた言葉ではないと思はれる。固より先生の『生物の形態』はダーウインの學說に依つて著されたものであるが、生物の形態、發生等の千變萬化の状態を詳細に研究しこれを、ダーウインの學說に依つて論じたのである。併し此の『生物の形態』は一方には餘り學術に過ぎたのと、一方には餘り時勢に先だち過ぎて居たのとで、其の出版當時に於ては、左程學者の注意を惹くまでには至らなかつた。之を非常に氣の毒に思ひ、ゲーゲンバウル博士は、ヘッセル先生に其の通俗的に出版

せられんことを勸告したが、其の結果が即ち前述の『自然創造論』(Natürliche Schöpfungsgeschichte, 1868.)と『人類の發生史』(Anthropo-Genie, 1903. 第五版)とである。

今もいつたやうに、此の『生物の形態』は實に偉大な價値のある著書で生物界全體の形態及び發生學上に於て全く新路を開拓したものと謂へる。即ち、最下等の生物から人類に至るまでの全系統を建て、現に生活するものにて足らざる所は、或は之を化石に求め、又は想像的の中間物を考案したのである。固より此の系統には想像的の箇處が澤山あるが、毫も空想ではない。先生が考案されたものと全く同一ではないが、全體に就ては、後になつて段々と確めらるゝやうになつて來たのである。先生は、今も云つたやうに此のやうな生物界全體に

亘る大仕掛な仕事をして居られたと同時に又、モネラの研究、放散蟲類、管水母、石灰海綿等に關する、至つて緻密な研究も知られて居た。

先生は、どちらかと謂ふと、地味な學者ではなくて華美な方である。實驗室に閉居して顯微鏡と首引きをして居るよりも、出で、世界に濶歩して議論をする方である。であるから、先生の論說には時に依ると事實から遠ざかるやうな觀がないてもない。かの有名なモネラの如きものは即ち其の一例であるが先生が建られた多くの系統中には事實のやうで否らざるものはまだ澤山ある。ハックスリ先生が命名されたバシービウスが既に生物でないといふ事の發見された後にも、猶、其の存在を固く信じて居たやうなことは又ヘッケル先生の

想像力の強い證據である。それ故、先生の論說は宛然パノラマのやうで、事實だと思つて見て居るうちに想像となつて仕舞ふといふのは悪口であらうと思はれるが、又能く穿つた語である、と謂ひたい。併し生物學上に先生が盡された事業は甚だ多く、先づ今日、生物學上に使用して居る學術語の中で先生が造られたものは、實に枚擧するに遑のない程である。其の全體に渉るもので一、二を擧げて見れば、フィルム(界又は小界と譯す)、フィロゲニー(系統發生と譯す)、オントゲニー(個體發生)、ヘテロクロニスム(發生中に器官が或は遅れ、又は早く現出すること)、チイノゲネシス(後生的變化)、バリングネシス(系統的變化)、メタメーレ(同形の體部が環節的に並列するもの)、メタメリスム・チーローム(體腔)、ゴノコリスム(雌雄別體)、ガストルラ(原腸期)、